



始



宇治拾遺物語解説

宇治拾遺物語は歴史上の物語を初め、色々の傳説の如きものを輯録した話説集で有る。古くは靈異記などと同一系統に屬する書である。伴蒿蹊は、「大和物語の一變と覺ゆ」と云つて居るが、大和物語の系統とは云へまい。記紀に傳へられた語部の物語その幽怪的な傳説、其れに佛説を多大に加味した、異邦趣味と云ふやうな物語。又軍記物語の發生のさきがけをして、後世の所謂強力物語、武者物語と云ふやうな話説を簡單に卒直に書いた物で有る。平安朝の戀愛中心の優美なる物語、悪く言へば、いとみじう哀れにの連続的文章に飽き果てた者には、かく卒直に、無技巧な文章で書かれたものが一方に要求せられるのは自然で有る。今昔物語は其隨一で有り、宇治拾遺物語、古今著聞集などが其系統に屬する本で有る。

此物語が鎌倉初期の著作で有らうとは諸家の見一致するやうで有るが、確かな事は知れぬ。佐藤誠實博士の「宇治拾遺物語考」(史學雜誌所載)の要領を坂井衡平氏が今昔物語集の新研究に掲げられしによりて載する

(1) 本朝書籍目録(二一一五頃、清原業忠、廿五枚)に宇治拾遺物語廿卷源隆國とあるぞ、今昔物語集の事なりける云々。廿卷は卅卷の誤ならん。

(2) 寶物集、八雲御抄のもの、及古今著聞集序の宇治拾遺物語之遺類とあるも同じ。

- (3)拾遺とは謙讓の意にて、他の遺したるものを拾ふと云ふ程の意味なり。必ずしも續編補遺の意にあらず。
- (4)今昔物語集隆國作の事は、隆國後の事なく、又隆國同時の人を只今ある、このある等と書けるにて知らる。
- (5)今の宇治拾遺は隆國死後の事三十餘條あり。卷八第五段東大寺炎上の時(治承四年)、齋賣の杖の木の燒失せるを記せる條に、三十四年がさきとあるは、建保四年に記せしならん。又卷十第三段註に件笛幸清進上當今建保三年とあり。當今は順德帝なり。これ隆國死後百三十九年後なり。故にこの書は建保年間の作ならん。
- (6)卷十二、廿三段に後鳥羽院のことあり。帝が顯德院を改めしは百練鈔、一代要記等によれば仁治三年なればこは建保四年より廿六年後なり。多分本院とありしを改めしならん。廿六年間の事少しも交らず。
- (7)今昔當時の事を、この頃あると記せば、其儘取しならん。十訓抄、著聞集にも同じ記し様あり。
- (8)今の宇治拾遺の序文に、宇治大納言之物語の正本は侍從俊貞の許にあり。更に今の宇治拾遺は成れりとするを別書とするは誤なり。乃ち茲に云へる宇治大納言之物語も宇治拾遺物語も皆同一なり。宇治拾遺百九十六段中、今昔物語より八十八條許り採りたれば、序の云ふ如く宇治大納言の補遺とは云ふべくもあらず。此序の言は皆僻説なり。
- (9)今の宇治拾遺のとは隆國筆にて、他は後人の補綴なりと云ふは、この書の一部一貫せる筆致なるを知らぬより、さる人も今昔物語は隆國卿の筆なりと肯ふべきに、この二書の新古の相違甚しきは如何にぞやとて種々の例をあぐ。

- (10)記法相似たれば宇治拾遺は、今昔によれる事をしるべく、宇治拾遺の方、概ね略ける記し様なり。
- (11)宇治拾遺は又古事談(本朝書籍目録によれば源顯兼の作、承元頃の人)によれりと見ゆるものあり。
- (12)十訓抄は宇治拾遺にとりしが如し。伴大納言繪詞亦同じ。
- (13)南泉房聞書は信しがたし。江談抄に見ゆる忠文の錯傳なるべし。異本門跡傳(享保十二、矢野泰長輯)平等院の條に隆國閑居の事を述べて、宇治物語作者なりと記せるは宇治拾遺の序文によれるものならん。
- (14)今の宇治拾遺の原名は何と云ひしか識られず。物語は表紙には名を書くも、卷首に書かぬ故、表紙失すれば名は傳はらぬなり。
- (15)今の宇治大納言物語の文と似て、記事四條少なき世繼物語は、今の宇治拾遺より更に後のものなり。世繼と云ふは、題號を失へるもの、首の一段榮華に出でし條なればの名ならん。小世繼と云ふも榮華、大鏡に對しての命名なるべし。宇治大納言と云へるは、宇治拾遺を補遺と思ひ、その正編の意にて附けしならん。

之に對する坂井氏の説は細かなもので有るが長いから掲げるわけに行かぬ。坂井氏が佐藤博士の論は今昔物語集を隆國著と豫定し論歩を進めたのが誤で有ると、やうに論ぜられたのは尤な事である。今昔物語は私も

隆國著とは思はぬ。坂井氏説の二三ヶ條に就て要を掲げると
(5)の問題に對して坂井氏は云く。

現在宇治拾遺物語が隆國の著にあらざるは明なる所なれども、此書の成れるは論者の云ふが如く建保三四年の頃にはあらずして、想ふに文治頃の上るべし。何となれば論者はその引用したる卷八、第五段の意を誤解したるが如く、「かの鯖の木三十四年が先迄は葉は青くて榮えたり。其後尙枯木にて立てりしが、この度平家の炎上に焼け終りぬ。」とある三十四年は著者の時より三十四年前と見るべきなり。若し「尙枯木にて立てり」が何等かの錯入なりとせば、三十四年も前の事を「この度の平家の炎上」と云ふ事となりて適切ならじ。而して治承四年の兵火を「此度の」と云ふ以上は、先づは月詔和歌集、撰集抄、色葉和歌集等の出でし頃なる、壽永文治の交に成れりとするを穩當とすべし。……

次に論者が引ける卷十、第三段の註「件笛幸清進上當今建保三年」も、物語の著作時の證としては不十分なり。何となれば、この註は小書にして文句も亦怪しき體なるが、そは兎も角として、本文には「件の笛傳はりて今八幡別當幸清が許にありとか」とあれば本文を記したる時、即ち著述の時よりは後に、著者によりてか若くは別人によりて記入せられたるものなること明かなり。さればこの註を採るとせば、そは却つて此書の成立時が、少くとも建保三年以前なるを證するものところ云ふべけれ。但し茲に困難なるは論者の謂へる註書にあらずして、本文の「今八幡別當幸清が許にありとか」の一句なり。石清水祠官系圖(續

群書類從第七輯系圖部) によると、幸清(二八四七——一八九五)は第三十代別當成清の子にして、左右記の著者たる仁和寺守覺法親王の弟子なり。彼が兄祐清に次いで第三十三代別當に補せられしは建永二年の事なるが、其別當事務を命ぜられしは、慣例に依りて建久の終なる十歳の幼年時代なりき。されば假りに本文の別當の意をさる様に解するも、かの文治よりは尙十餘年後の事に當れり。故に今此處に出會したる兩刀の困難を避けんが爲には、本書の著作時を承元頃として「この度」の意義を擴張せしむるか、若くは「件の笛」以下の本文を削除するかの一を選ばざるべからず。今は前者を欲せざるが故に、本文の「件の笛」以下も亦後人の追加記入なるべしと斷じて宇治拾遺物語文治年間著作説を取らんとす云々。

と云はれた。件笛云々の細記は後人の追記たる事は明かであるが「この度」の一語のみで中々事もきめられまい。他書を材料に取つた時其の文章を其のまゝに用ゐてうかと「此の度」の語が残らぬとも云へぬ。まだ研究の餘地がある。(6)に就ては坂井氏は「本院」の改記と見ずして、著聞集等の類似の話より、それらの記事の何時頃よりしてか錯入せし物ならんと斷ずるを可とすべし。況して此話は論者も云へるが如く他の條の話の時代とは殆んど三十年を違ひて「唯一個條交れるものなるをや。」と論じてをられる。しかし之れを錯入と論じて除けば其れまでと有るが、とも角も後鳥羽院の水無瀬殿に御幸が有つたのは建仁三年正月の事であるから其以後に完成した著述で有ると云ふ事は確實である云ふ論は立て得る。むしろ確信性が有りはずまいか。何分之れもまだ研究の餘地がある。尙坂井氏説は各條に就て研究をして居られるから其本を見られ

たい。

本書の著者は群書一覽に、「原本は隆國卿の作にて今昔物語の拾遺なり」と云つて居るが、其れは本書の序文を正確のものとしての論で有る。尤「原本は」と云つて有るから、今の本がさうで有ると云ふのでは無いらしい。今昔物語の拾遺なりと云つて居るのも、直ちには信じ難い。

さて諸家の説を掲げると長くなるので極簡単に私が直覺的に思ふ事を云ふと今昔物語も宇治拾遺物語も共に宇治大納言源隆國の著述で有ると云はれて居たが、人々も云へる如く隆國没後の記事が有るらしいので、隆國が著述で有ると云ふ事は先づ誤と斷じてよいらしい。水無瀬殿御幸の建仁三年より百二三十年前に隆國は死んで居るのでも知れる。隆國は承暦元年七月に薨じたので有る。つまり隆國が晩年宇治平等院の南泉坊に栖居して、ゆきよの人を駐めて雑話をさせて、自らは物かげで聞いて筆録したと云ふ（此事が事實かどうかは疑はしいが）物語の本は散佚したので、今の「今昔」とは關係は有るまい。今の「今昔」も何れ其れよりは後の著で有らう。宇治拾遺は「宇治大納言物語」（隆國作の）拾遺として誰か後人が作つたと見る方が名の上は説明がしよい。佐藤博士が云はるゝ如き名の意とすれば解けぬ事も有るまいが穩當とも云へまい。

今昔と、本書との關係に就ては、本書は今昔の拾遺のやうに云はれて居るが、其れは今昔を種本として本書の一部分が作られたとは云ひ得るが、今昔の拾遺で有るとは云へぬ。其れは今昔と同種の話が本書にかなり出て居るからで有る。又其の同材料を取扱つた上から考へて見ても拾遺の方が後で有る事には論は無い。今

昔は凡て無技巧で卒直單純で有るが、本書の方は相當技巧も加へられた文章で有る。

此書を作る材料に成つたと思はれる書は前述の今昔物語以外に靈異記、古事談、志貴山縁起、伴大納言繪圖等其他有る事で有らう。又先頃古典保存會で複製せられた打聞集と云ふ書も此材料に用ゐられたと見える。

橋本進吉君は其解題に、「之れを宇治拾遺物語に比するに、一致する説話の數は今昔に比して遙に少けれど（二十七條中七條のみなり）その内容は殆相同じきのみならず、語句にいたるまで類似せるもの多く、その間に密接の關係あるを思はしむ。（又靜觀僧正事、寶志和尚事など今昔に見えざりしものにして宇治拾遺に一致するものあり）宇治拾遺は本書より後に成れるものと覺しければ、その編者は、本書を採つてその資料の一とせしなるべし」と云つて居られる。

本會が今刊行するに當つては萬治の刊本を底本とした。古く活字本が有るとの事で有るがまだ見る事を得ぬ。之れで一校を加へたかつたので有るが、其が出来なかつたのは残念で有る。博文館の國文叢書は活字本等を參考して校訂したとの事で有るが、之れは數本を以て校訂したとの事で、其が何れの本に然有ると云ふ事は知られぬから古活字本の事を知るたよりには成らなかつたが、取り敢へず右校訂本を參照して、萬治版の脱落と見える處は補訂して置いた。尤其處々に其由は校本として明記して置いた。又國史大系本も參考した。一本としたのは、大系に引ける、宇治拾遺物語私註本である。□をしたのは大系本による補入と心得られたし。

特 263
883

宇治拾遺物語

世に宇治大納言物語と云ふ物有り。此大納言は隆國と云ふ人なり。西宮殿(高明なり)の孫、俊賢大納言の第二の男なり。年高うなりては、暑を侘びて、暇を申して、五月より八月までは、平等院一切經藏の南の山際に、南泉房と云ふ所に籠り居られけり。さて宇治大納言とは聞えけり。鬢を結び分けて、をかしげなる姿にて、菴を板に敷て涼み居侍りて、大きな團扇をもてあふがせなどして、往來の者、高き卑しきを云はず呼び集め、昔物語をせさせて、我は内にそひ臥して、語るに従ひて、大きな雙紙に書かれけり。天竺の事も有り、大唐の事も有り、日本の事も有り。其れがうちに貴き事も有り、哀れなる事も有り、穢き事も有り、少少は虚物語も有り、利口なる事も有り、さまざまやうくなり。世の人は是れを興じ見る。十五帖なり。其の正本は傳はりて、侍從俊貞と云ひし人の許にぞ有りける。如何に成りにけるにか。後にさかしき人人書き入れたる間、物語多く成れり。大納言より後の事、書き入れたる本も有るにこそ。さる程に、今の世に、又物語書き入れたる出で來たれり。大納言の物語に漏れたるを拾ひあつめ、又其後の事など書き集めたるなるべし。名を宇治拾遺の物語と云ふ。宇治に残れるを拾ふと付けたるにや。又侍從を拾遺と云へば、宇治拾遺物語と云へるにや。差別知り難し。覽東なし。

宇治拾遺物語目録

卷 第一

序	二	に召さるゝ事	一四
一 道命阿闍梨於和泉式部之許讀經五條	三	十 秦兼久向通俊卿許惡口事	一五
道祖神聽聞事	三	十一 源大納言雅俊一生不犯金うたせたる事	一六
二 丹波國篠村平茸生事	三	十二 兒のかい餅するに空寝入したる事	一六
三 鬼に翹取らるゝ事	五	十三 田舎の兒櫻のちるを見て泣く事	一八
四 伴大納言事	九	十四 小藤太聲におどされたる事	一八
五 隨求陀羅尼籠額法師事	一〇	十五 大童子鮭ぬすみたる事	一九
六 中納言師時法師の玉莖檢知の事	一一	十六 尼地藏見たてまつる事	二〇
七 龍門、聖鹿にかはらんとする事	一二	十七 修行者百鬼夜行にあふ事	二二
八 易のうらなひして金取り出だしたる事	二三	十八 利仁薯蕷粥事	二三
九 宇治殿倒れさせ給ひて實相房僧正驗者	二三	卷 第二	
		一 清徳聖きどくの事	三〇

- 二 靜觀僧正祈雨法驗事……………三二
- 三 同僧正大獄の岩祈り失ふ事……………三二
- 四 金峰山薄打事……………三四
- 五 用經あら卷の事……………三五
- 六 原行死人を家より出だす事……………三八
- 七 鼻ノ長キ僧事……………四〇
- 八 晴明封藏人少將事……………四二
- 九 季通欲逢映事……………四四
- 十 袴垂合保昌事……………四七
- 十一 明衡欲逢映事……………四八
- 十二 唐卒都婆に血付くる事……………五一
- 十三 成村強力の博士にあふ事……………五三
- 十四 柿木に佛現ずる事……………五六

卷 第三

- 一 大太郎ぬす人の事……………五八
- 二 藤大納言忠家物言女放尾〔〇尻カ〕事……………六一
- 三 小式部内侍定頼卿の經にめでたる事……………六一
- 四 山伏舟を祈りかへす事……………六二
- 五 鳥羽僧正與國俊二戲事……………六三
- 六 繪佛師良秀家の焼くるを見て悦ぶ事……………六五
- 七 虎の鰐とりたる事……………六五
- 八 樵夫歌の事……………六七
- 九 伯母事……………六八
- 十 同人佛事の事……………六九
- 十一 藤六事……………七〇
- 十二 多田新發意郎等事……………七〇
- 十三 因幡國別當地藏作りさしたる事……………七一
- 十四 伏見修理大夫俊綱事……………七二
- 十五 長門前司女群送時歸本處事……………七四

- 十六 雀報恩事……………七六
- 十七 小野篁廣才事……………八一
- 十八 平貞文太院侍從等事……………八二
- 十九 一條攝政歌事……………八四
- 二十 狐家に火つくる事……………八五

卷 第四

- 九 業遠朝臣蘇生事……………九七
- 十 篤昌忠恆等事……………九七
- 十一 後朱雀院丈六佛奉作給事……………九八
- 十二 式部大輔實重賀茂御正體拜見事……………九八
- 十三 智海法印頼人法談事……………九九
- 十四 白河院御寢の時物におそはれさせ給事……………九九
- 十五 永超僧都魚食事……………一〇〇
- 十六 了延房に實因自湖水中法文の事……………一〇〇
- 十七 慈惠僧正戒壇くづれたる事……………一〇一

卷 第五

- 一 狐人につきてしとき食ふ事……………八六
- 二 佐渡國に有金事……………八六
- 三 藥師寺別當事……………八七
- 四 妹背島事……………八九
- 五 石橋の下の蛇の事……………九一
- 六 東北院菩薩講聖事……………九三
- 七 三河入道遺世々聞事……………九四
- 八 進命婦清水詣事……………九六
- 一 四宮河原地藏事……………一〇二
- 二 伏見修理大夫許へ殿上人ども行きむかふ事……………一〇二

- 三 以長物忌の事……………一〇三
- 四 龜久阿闍梨西方をうしろにせざる事…一〇四
- 五 陪従家綱兄弟互に欺きたる事……………一〇四
- 六 陪従清仲の事……………一〇七
- 七 かな曆あつらへたる事……………一〇八
- 八 實子にあらざる人實子のよしたる事…一〇九
- 九 御室戸僧正の事并一乘寺僧正の事…一一二
- 十 或僧人の許にて氷魚ぬすみ食ひたる事……………一一四

卷 第七

- 十一 仲胤僧都地主權現説法の事……………一一四
- 十二 大二條殿に小式部内侍奉_二歌讀懸_一の事…一一六
- 十三 山_ノ横川賀能地藏の事……………一一六

卷 第六

- 二 世尊寺に死人を掘りいだす事……………一二〇
- 三 留志長者の事……………一二一
- 四 清水寺に二千度参詣者打_二入雙六_一の事…一二三
- 五 観音經化_レ蛇人を助け給ふ事……………一二四
- 六 賀茂の社より御幣紙米等給ふ事……………一二七
- 七 信濃國筑摩の湯に観音沐浴の事……………一二八
- 八 帽子兒與_二孔子_一問答の事……………一二九
- 九 僧伽多行_二羅刹國_一の事……………一三〇

- 一 廣貴依_二妻訴_一炎魔王宮へめざる_レ事…一一八

- 一 五色鹿の事……………一三五
- 二 播磨守爲家侍佐太の事……………一三八
- 三 三條中納言水飯の事……………一四〇
- 四 檢非違使忠明の事……………一四一
- 五 長谷寺参籠男利生にあづかる事……………一四二

- 六 小野宮殿大變の事付西宮殿富小路大臣等大變の事……………一四七
- 七 式成源滿則員等三人被_二瀧口弓藝_一の事…一四九

卷 第八

- 一 大膳大夫以長前駐問の事……………一五一
- 二 下野武正大風雨日参_二法性寺殿_一の事…一五三
- 三 信濃國聖の事……………一五三
- 四 敏行朝臣の事……………一五七
- 五 東大寺花殿會の事……………一六二
- 六 獵師佛を射る事……………一六三
- 七 千手院僧正仙人にあふ事……………一六五

卷 第九

- 一 瀧口道則習_レ術の事……………一六七
- 二 寶志和尚影の事……………一七〇

卷 第十

- 三 越前敦賀女観音助_レ給_レの事……………一七一
- 四 くうすけが佛供養の事……………一七七
- 五 つねまさが郎等佛供養の事……………一八〇
- 六 歌よみて被_レ免_レ罪の事……………一八二
- 七 大安寺別當女に懐する男夢見る事……………一八四
- 八 傳奕打聲入の事……………一八四
- 一 伴大納言應_二大門を焼く_一の事……………一八七
- 二 放鷹樂明進に是季がなら_レの事……………一八九
- 三 堀河院明進に笛ふかせ給ふ事……………一八九
- 四 淨藏が八坂坊に強盜入る事……………一九一
- 五 播磨の守佐大夫が事……………一九一
- 六 吾婦人止_二生賢_一の事……………一九二
- 七 豐前王の事……………一九七

八 藏人頼死事……………一九八
 九 小槻當平事……………一九九
 十 海賊發心出家的事……………二〇一
 十一 丹後守保昌下向の時致經父逢事……………二二二
 十二 出家功德事……………二二二

卷 第 十 一

卷 第 十 二

一 青常の事……………二〇五
 二 保輔盜人たる事……………二〇七
 三 晴明を心みる僧の事付晴明殺蛙事……………二〇八
 四 河内守頼信平忠恆をせむる事……………二一〇
 五 白河法皇北面受領の下りのまねの事……………二二二
 六 藏人得業猿澤池龍の事……………二二三
 七 清水寺御帳給はる女の時……………二二四
 八 則光盜人をきる事……………二二五
 九 空人水したる僧の時……………二二八
 十 日藏上人吉野山にて逢鬼事……………二二〇
 一 達磨見天竺僧行事……………二二五
 二 提婆菩薩參龍樹菩薩の許事……………二二六
 三 慈惠僧正延引受戒之日事……………二二六
 四 内記上人破法師陰陽師紙冠事……………二二八
 五 持經者叙實効驗の時……………二二九
 六 空也上人譬觀音院僧正祈直事……………二三〇
 七 增賀上人參三條宮振舞事……………二三一
 八 聖寶僧正渡二條大路事……………二三二
 九 穀斷聖不實露顯事……………二三三
 十 季直少將歌の時……………二三四
 十一 樵夫の小童隱題歌讀事……………二三四

十二 高忠侍歌讀事……………二三五
 十三 貫之歌の時……………二三六
 十四 東人歌の時……………二三六
 十五 河原院に融公靈住事……………二三七
 十六 八歳童孔子と問答の時……………二三七
 十七 鄭大尉事……………二三八
 十八 貧俗觀佛性富事……………二三八
 十九 宗行郎等射虎事……………二三九
 二十 遣唐使子被食虎事……………二四一
 廿一 或上達部中將之時逢召人時……………二四二
 廿二 陽成院妖物の時……………二四四
 廿三 水無瀬殿むさびの事……………二四四
 廿四 一條の棧敷屋鬼の時……………二四五
 一 上緒主得金事……………二四六
 二 元輔落馬の時……………二四八
 三 俊延迷神にあふ事……………二五〇
 四 龜を買うてはなす事……………二五一
 五 夢買人の時……………二五二
 六 大井光遠妹強力事……………二五三
 七 或唐人女の羊に生れたるを知らずして殺す事……………二五五
 八 出雲寺別當の鯁になりたるを知りながら殺して食ふ事……………二五六
 九 念佛僧魔往生事……………二五八
 十 慈覺大師入額纈城給事……………二六〇
 十一 渡天僧人穴事……………二六二
 十二 寂照上人飛鉢事……………二六三
 十三 清瀧川聖の時……………二六四

卷 第 十 三

十三 清瀧川聖の時……………二六四

十四 優婆塞多弟子の事……………二六五

卷 第 十 四

- 一 海雲比丘弟子童の事……………二六七
- 二 寛朝僧正の事……………二六九
- 三 經頼蛇に逢ふ事……………二七〇
- 四 魚養の事……………二七三
- 五 新羅國后金樹の事……………二七四
- 六 珠の價无量の事……………二七四
- 七 北面女雜使六の事……………二七八
- 八 仲胤僧都連歌の事……………二七九
- 九 大將愼の事……………二八〇
- 十 御堂闕白御犬晴明等きどくの事……………二八一
- 十一 高階俊平が弟子入道算術の事……………二八三

卷 第 十 五

- 一 清見原天皇與大友皇子合戦の事……………二八七
- 二 頼時が胡人見たる事……………二九〇
- 三 賀茂祭のかへり武正兼行御覽の事……………二九一
- 四 門部府生海賊射返す事……………二九二
- 五 土佐判官代通清人遠して關白殿に奉合事……………二九四
- 六 極樂寺僧施仁王經験事……………二九四
- 七 伊良線野世恆毘沙門御下文の事……………二九六
- 八 相應和尚上祿卒夫事付染殿后奉祈事……………二九七
- 九 仁戒上人往生の事……………二九九
- 十 秦始皇自天竺來僧禁獄の事……………三〇一
- 十一 後の千金の事……………三〇二
- 十二 盜跖與孔子問答の事……………三〇三

宇治拾遺物語 卷第一

(一) 道命阿闍梨於和泉式部之許讀經五條道祖神聽聞事

今は昔、道命阿闍梨とて、佛殿（○道綱卿法興院攝政殿息也ト傍訓アリ）の子に、色にふけりたる僧有りけり。和泉式部に通ひけり。經をめたく讀みけり。其れが和泉式部許行きて臥したりけるに、目覺めて、經を心を澄して讀みける程に、八卷讀み果てて、曉に微睡まんとする程に、人の氣はひのしければ、「あれは誰ぞ」と、問ひければ、「己れは五條西洞院の邊に候ふ翁に候ふ」と答へければ、「こは何事ぞ」と、道命云ひければ、「此の御經を今宵うけたまはりぬる事の、生生世世忘れ難く候ふ」と云ひければ、道命、「法華經を讀み奉る事は常の事なり。何と今宵しも云はるぞ」と云ひければ、五條の齋いはく、「清くて讀みまゐらせ給ふ時は、梵天帝釋を始め奉りて聽聞せさせ給へば、翁などは近づき参りて承るに及び候はず。今宵は御行水も候はで讀み奉らせ給へば、梵天帝釋も御聽聞候はぬ間にて、翁参り寄りて、承りて候ひぬる事の忘れ難く候ふなり」とのたまひけり。されば、はかなくさい「因二字衍」よみ奉るとも、清くて讀み奉るべき事なり。「念佛、讀經、四威儀を破ることなかれと惠心」【○ト部源信】の御房も戒め給ふにこそ。

(二) 丹波國篠村平茸生事



是れも今は昔、丹波國篠村と云ふ所に、年比平茸やるかたもなく多かりけり。里村の者は是れを取りて、人にもこころざし、又我れも食ひなどして年比過ぐる程に、其里にとりて主と有る者の夢に、頭小擱みなる法師どもの二三十人ばかり出で来て、「申すべき事」と云ひければ、「如何なる人ぞ」と問ふに、「此法師ばらに、此年比も宮仕ひよくして候ひつるが、此里の縁盡きて、今は他所へ罷り候ひなんずることの、且は哀に、もし又事の由を申さではと思ひて、此由を申すなり」と云ふと見て、打醒きて、「此は何事ぞ」と、妻や子やなどに語る程に、又其里の人の夢にも、此の定に見えたりとて、數多同様に語れば、心も得で年も暮れぬ。さて次の年の九十月にも成りぬるに、さきく出で来る程なれば、山に入りて茸を求むるに、總て疏大方見えず。如何なる事にかと、里國の者思ひて過ぐる程に、故仲胤僧都とて、説法並びなき人いましけり。此事を聞きて、「是は如何に、不淨説法する法師、平茸に生ると云ふ事の有るものを」とのたまひてけり。されば如何にもく、平茸は食はざらん事に事缺くまじきものとぞ。

(三) 鬼に瘤取らるる事

是も今は昔、右の顔に大きな瘤有る翁有りけり。大かう「因二字よそ」山へ行きぬ。雨風はしたなくて歸るに及ばで、山の中に心にも有らず留りぬ。又樵夫も無かりけり。怖ろしさすべき方無し。木の空虚の有りにけるに這ひ入りて、目も合はず屈まりて居たる程に、遙より人の聲多くして、とどめき来る音す。如何にも山の中に只だ獨り居たるに、人の氣はひのしければ、少し生き出づる心地して見出だしければ、大方やうや

うさまぐなる物ども、赤き色には青き物を著、黒き色には赤き物を著、鬚鼻禪にかき、大方目一つ有るもの有り、口無きものなど、大方如何にも言ふべきに有らぬ物ども、百人ばかりひしめき集りて、火を貂の目の如くにともして、我が居たる空虛木の前にるまはりぬ。大方いと物覺えず。主と有ると見ゆる鬼横座に居たり。表裏に、二列に居並みたる鬼數を知らず。其姿、各云ひ盡し難し。酒まゐらせ遊ぶ有様、此世の人のする定なり。度度土器はじまりて、主との鬼、殊の外に酔ひたる様なり。末より若き鬼一人立ちて、折敷をかざして、何と云ふにか、くどきくせせ「因さる」○口説具せざるカ、くどきくどき、せせるノ誤トモ云フ」事を云ひて、横座の鬼の前にねり出でて口説めり。横座の鬼、盃を左の手に持ちて、笑みこだれたる様、唯だ此世の人の如し。舞ひて入りぬ。次第に下より舞ふ。悪く、善く舞ふも有り。あさましと見る程に、此の横座に居たる鬼の云ふやう、「今宵の御遊こそ何時にも勝れたれ。但し、さも珍らしからん舞奏を見ばや」など云ふに、此翁、物の付きたりけるにや、又神佛の思はせ給ひけるにや、あはれ走り出でて舞はばやと思ふを、一度は思ひ返しつ。其れに何となく、鬼どもが打ちあげたる拍子の善げに聞えければ、さも有れ、ただ走り出でて舞ひてん、死なばさて有りなんと思ひ取りて、木の空虛より、烏帽子は鼻に垂れ掛けたる翁の、腰に斧と云ふ木切る物さして、横座の鬼の居たる前に躍り出でたり。此鬼ども跳り上りて、「此は何ぞ」と騒ぎあへり。翁伸び上がり屈まりて、舞ふべき限り、すぢりもちり、えい聲を出だして一庭を走り廻り舞ふ。横座の鬼より始めて、集まり居たる鬼ども感歎み興ず。横座の鬼の云はく、「多くの年比、此



遊をしつれども、未だ斯かるものこそ逢はざりつれ。今より此翁、かやうの御遊に必ず参れ」と云ふ。翁申すやう、「沙汰に及び候はず、参り候ふべし。此の度俄かにて、秘曲の手も忘れ候ひにたり。かやうに御覽に適ひ候はば、靜かに仕う奉り候はん」と云ふ。横座の鬼、「いみじう申したり。必ず参るべきなり」と云ふ。奥の座の三番に居たる鬼、「此の翁は斯くは申し候へども、参らぬ事も候はんずらん、おぼしし質をや取らるべく候ふらん」と云ふ。横座の鬼、「然るべし然るべし」と云ひて、何をか取るべきと、各云ひ沙汰するに、横座の鬼の云ふやう、「かの翁が面にある瘤をや取るべき。瘤は福の物なれば、其れをや惜しみ思ふらん」と云ふに、翁が云ふやう、「唯だ目鼻をば召すとも、此瘤は許し給ひ候はん。年比持ちて候ふ物を、故無く召され、條無き事に候ひなん」と云へば、横座の鬼、「斯う惜しむ申す物なり。唯だそれを取るべし」と云へば、鬼寄りて、「さは取るぞ」とて、捻ぢて引くに、大方痛きこと無し。さて「必ず此度の御遊に参るべし」とて、曉に鳥など鳴きぬれば、鬼ども歸りぬ。翁顔をさぐるに、年來有りし瘤跡形なく、掻い拭ひたるやうに、更更無かりければ、樵らん事も忘れて家に歸りぬ。妻のうば、「こは如何なりつる事ぞ」と問へば、「しかく」と語る。「あさましき事かな」と云ふ。隣にある翁、左の顔に大きな瘤有りけるが、此翁瘤の失せたるを見て、「是は如何にして瘤は失せ給ひたるぞ。何處なる醫師の取り申したるぞ。我に傳へ給へ、此瘤取らん」と云ひければ、「是れは醫師の取りたるにも有らず、しかくの事有りて、鬼の取りたるなり」と云ひければ、「我れ其の定にして取らん」とて、事の次第を細かに問ひければ教へつ。此翁云ふ

ままにして、其の木の空處に入りて待ちければ、誠に聞くやうにして鬼ども出で來たり。居まはりて、酒飲み遊びて、「いづら、翁は参りたるか」と云ひければ、此翁、怖ろしと思ひながらゆるぎ出でたれば、鬼ども「ここに翁参りて候ふ」と申せば、横座の鬼、「こち参れ、疾く舞へ」と云へば、前の翁よりは天骨もなく、蹠蹠奏でたりければ、横座の鬼、「此の度は悪ろく舞ひたり。かへすく悪ろし。其の取りたりし質の瘤返し給べ」と云ひければ、末つ方より鬼出で來て、「質の瘤返し給ふぞ」とて、今片方の顔に投げ付けたりければ、左右に瘤附きたる翁にこそ成りたりけれ。物羨みはせまじき事なりとか。

(四) 伴大納言ノ事

是れも今は昔、伴大納言善男は、佐渡國の郡司が従者なり。彼の國にて善男夢に見るやう、西大寺と東大寺とを跨げて立ちたりと見て、妻の女に此由を語る。妻の云はく、「そこの股こそ裂かれんずらめ」と合するに、善男驚きて、由なき事を語りてけるかなと恐れ思ひて、主の郡司が家へ行き向ふ所に、郡司極めたる相人なりけるが、日來はさもせぬに、殊の外に饜應して、圓座とり出で、むかひて召し上せければ、善男怪みをなして、我をすかしのぼせて、妻の云ひつるやうに、股など裂かんずるやらんと怖れ思ふ程に、郡司が云はく、「汝やんごとなき高相の夢見てけり。其れに由なき人に語りてけり。必ず大位には至るとも、事出で來て罪を被ふらんぞ」と云ふ。然る間、善男縁につきて、上京して大納言に至る。されども犯罪を被ふる、郡司が詞に違はず。

(五) 隨求陀羅尼籠額法師事

是れも今は昔、人の許に、ゆゆしく事事しく負^{おの}斧^{のこぎ}、法螺貝腰に付け、錫杖^{しゃくじやう}つきなどしたる山伏の、事事しげなる入り来て、侍^{まじらひ}の立部^{たてしやう}の内^{うち}の小庭^{せうてい}に立ちけるを、侍「あれは如何なる御房ぞ」と問ひければ、「是れは日比白山^{ひびしろ}に侍りつるが、御獄^{みじやく}へ参りて、今二千日候はんと仕り候ひつるが、齋料^{さいりやう}盡きて侍り。まかり預らんと申し上げ給へ」と云ひて立てり。見れば、額^{ひたひら}眉^{まゆ}の間の程に、髮^{かみ}際^{ぎは}によりて二寸ばかり疵^{きず}有り、未だ生^{なま}癒^いにて赤みたり。侍問うて云ふやう、「其の額の疵は如何なる事ぞ」と問ふ。山伏いと尊^{たうたう}々^々しく聲^{こゑ}をなして云ふやう、「是れは隨求陀羅尼^{ずいすうだらに}を籠^{かご}めたるぞ」と答ふ。侍のものども「ゆゝしき事にこそ侍れ。足手の指など切りたるは數多見ゆれども、額破れて、陀羅尼籠^{だらにかご}めたるこそ見るとも覺えね」と云ひ合ひたる程に、十七八ばかりなる小侍の、ふと走り出で打見て、「あなたたはら痛^{いた}の法師や、なんで隨求陀羅尼を籠^{かご}めんずるぞ。あれは七條町に、江冠者^{かうかんしや}が家の、九^こ東^{とう}にある鑄物師^{ちゆうぶつし}が妻を、密^{ひそ}密^{ひそ}に入り臥し入り臥しせし程に、去年^{こぞ}の夏入り臥したりけるに、男の鑄物師^{ちゆうぶつし}歸りあひたりければ、取る物も取り敢へず、逃げて西へ走る、冠者が家の前程にて、追ひ詰められて、さびづゑして額を打ち割られたりしぞかし。冠者も見しは」と云ふを、あさましと人ども聞きて、山伏が顔を見れば、少しもことと思ひたる氣色もせず、少し目^ま伸^のしたるやうにて、「其の次に籠^{かご}めたるぞ」と、つれなう云ひたる時に、集れる人ども、一度にはと笑ひたるまぎれに、逃げて去^いにけり。

(六) 中納言師時法師の玉莖^{たまき}檢知^{けんち}の事

是れも今は昔、中納言師時^{ちゆうなごんしじ}と云ふ人おはしけり。其御許に、殊の外に色黒き鬘^{まげ}の衣の短きに、不動^{ふどう}袈裟^{けさ}と云ふ袈裟^{けさ}掛けて、木練子^{まねし}の念珠^{ねんじゆ}の大きな、繰^く下げたる聖法師^{せいぼうし}入り来て立てり。中納言、「あれは何する僧ぞ」と尋ねらるゝに、殊の外に聲を哀れげになして、「假の世に、はかなく候ふを忍び難くて、無始^{むし}より此の方、生死^{しやうじ}に流轉^{りゅうてん}するは、詮ずる所煩惱^{ぼんごう}にひかへられて、今にかくてうき世を出でやらぬにこそ。是れを無益^{むやく}なりと思ひ取りて、煩惱を切り捨て、偏に此度生死^{しやうじ}の境^{きやう}を出でなんと、思ひ取りたる聖人に候ふ」と云ふ。中納言、「さて煩惱を切り捨つとは如何に」と問ひ給へば、「くは、是れを御覽せよ」と云ひて、衣の前を掻き上げて見すれば、誠にまめやかのは無くて、ひげばかり有り。こは不思議のことかなと見給ふ程に、下にさがりたる袋の殊の外に覺えて、「人や有る」と呼び給へば、侍三人出で來たり。中納言、「其の法師ひきはれ」とのたまへば、聖目^{せいめ}伸^のをして、阿彌陀佛^{あみだぶつ}申して、「疾くく如何にもし給へ」と云ひて、哀れけなる顔氣色^{かきしよ}をして、足を打廣げて、微睡^{みせ}たるを、中納言、「足を引き廣げよ」とのたまへば、「二三人寄りて引き廣げつ。さて小侍の十二三ばかりなるが有るを召し出でて、「あの法師の股の上を、手を廣げて上げ下^{くだ}「し摩^され」とのたまへば、其のまゝに、肥^あなる手して上げ下^{くだ}し摩^さる。とばかり有る程に、此聖目^{せいめ}伸^のをして、今はさておはせ」と云ひけるを、中納言「よげになりたり。唯だ摩^され、其れく」と有りければ、聖「ちよ悪^{あく}く候ふ。今はさて」と云ふを、あやにくに摩^さり伏せける程に、毛の中より、松茸^{まつたけ}の大きやかなる物

の、ふらくと出で来て、腹にすはくと打ち付けたり。中納言を始めて、そこら集ひたる者ども諸隣に笑ふ。聖も手を打ちて、伏し轉び笑ひけり。早うまめやか物を、下の袋へひねり入れて、續飯にて毛を取り付けて、さり氣なくして人を謀りて、物を乞はんとしたりけるなり。狂惑の法師にて有りける。

(七) 龍門、聖鹿にかはらんこする事

大和國に、龍門と云ふ所に聖有りけり。往みける所を名にて龍門の聖とぞ云ひける。其聖の親く知りたりける里「男カ」の明暮鹿を殺しけるに、照射と云ふ事をしける頃、いみじう暗かりける夜、照射に出でにけり。鹿を求め歩りく程に、目を合せたりければ、鹿有りけりとて、押し廻し／＼するに、確かに目を合せたり。矢比にまはし寄りて、火串に引き懸けて、矢を短けて射んとて、弓振り立て見るに、此の鹿の目の間の、例の鹿の目のあはひよりも近くて、目の色も變りたりければ、怪しと思ひて、弓を引きさして能く見けるに、猶怪しかりければ、矢を外して、火を取りて見るに、鹿の目には有らぬなりけりと見て、起きば起きよと思ひて、近く廻し寄せて見れば、身は一張の革にてあり。猶鹿なりとて、又射んとするに、猶目の有らざりければ、唯だ打ちに打ち寄せて見るに、法師の頭に見なしつ。こは如何にと見て、下り走りて、火打吹きて、椎折りと「り一本アリ」て見れば、この聖の目打たゝきて、鹿の皮を引き被きてそひ臥し給へり。「こは如何に、斯くてはおはしますぞ」と云へば、ほろ／＼と泣きて、「わぬしが制することを聞かず、いたくこの鹿を殺す。我れ鹿に代りて殺されなば、さりともし少しは止まりなんと思へば、斯くて射られんとして居

るなり。口惜しう射ざりつ」との給ふに、此男伏し轉び泣きて、「斯くまで思しける事を、あながちに侍りける事」とて、其處にて刀を抜きて、弓打切り、箆皆折り碎きて、鬘切りて、やがて聖に具して法師に成りて、聖のおはしけるが限り聖につかはれて、聖亡せ給ひければ、又そこにぞ行ひて居たりけるとなん。

(八) 易のうらなひして金取り出だしたる事

旅人の宿覚めけるに、大きやかなる家の荒れたるが有りけるに寄りて、「此處に宿し給ひてんや」と云へば、女聲にて、「善きこと、宿り給へ」と云へば、皆おり居にけり。屋大きなれども、人の有り氣も無し。唯だ女一人ぞ有る氣はひしける。斯くて夜明けにければ、物食ひしたゝめて出でて行くを、此家に有る女出で来て、「え出でおはせじ。留り給へ」と云ふ。「こは如何に」と問へば、「己れが金千兩負ひ給へり。其の辨濟してこそ出で給はめ」と云へば、此旅人、從者ども笑ひて、「あら、しや、さんなめり」と云へば、此旅人「暫し」と云ひて、又おり居て、皮子を乞ひ寄せて、幕引き廻らして、暫しばかり有りて、此女を呼びければ出で來にけり。旅人問ふやうは、「此親は、若し易の占と云ふ事やせられし」と問へば、「いさ、さや侍りけん。そのし給ふやうなる事は、し給ひき」と云へば、「さるなる」さりなん、「一本」と云ひて、「さても何事にて、千兩金負ひたる、其の辨濟せよとは云ふぞ」と問へば、「己れが親の亡せ侍りし折に、世の中に有るべき程の物など得させ置きて、申しやう、「今なん十年有りて其の月に、此處に旅人來て宿らんとす。其人は我が金を千兩負ひたる人なり。其れに其金を乞ひて、堪へ難からん折は、賣りて過ぎよ」と申しよか

ば、今までは親の得させて侍りし物を、少しづつも賣り遣ひて、今年となりては賣るべき物も侍らぬまゝに、いつしか我が親の云ひし月日の疾く來かすと待ち侍りつるに、今日に當りておはして宿り給へれば、金負ひ給へる人なりと思ひて申すなり」と云へば、「金の事は誠なり。さる事有るらん」とて、女を片隅に引きて行きて、人にも知らせで柱を敲かすれば、空虚なる聲のする所を、「くは、是れが中の給ふ金は有るぞ、開けて少しづつ取り出でて遣ひ給へ」と、教へて出でていにけり。此女の親の、易の占の上手に、此女の有様を考へけるに、今年有りて貧しくならんとす。其の月日、易の占する男來て宿らんと考へて、斯かる金有ると告げては、まだしきに取り出でて、遣ひ失ひては貧しくならん程に、遣ふ物無くて惑ひなんと思ひて、しか云ひ教へ死ける後にも、此家をも賣り失はずして、今日を待ちつけて、此人を斯く賣めければ、是れも易の占するものにて、心を得て占ひ出だして、教へ出でて往にけるなりけり。易のトは行末を掌のやうにさして、知る事にて有りけるなり。

(九) 宇治殿倒れさせ給ひて實相房僧正驗者に召さるゝ事

是れも今は昔、高陽院造らるゝ間、宇治殿〔○頼通〕御騎馬にて渡らせ給ふ間、倒れさせ給ひて、心地違はせ給ふ。心譽僧正に祈られんとて、召しにつかはす程に、未だ參らざる前に、女房の局なるに女に物憑きて、申して云はく、「別の事に有らず、きと目見入れ奉るによりて、斯くおはしますなり。僧正參られざる先に、護法先立ちて參りて、追ひ拂ひさぶらへば、逃げ終りぬ」とこそ申しけれ。即ちよくならせ給ひにけり。心

譽僧正いみじかりぬる事。

(十) 秦兼久向通俊卿許惡口事

今はむかし、治部卿通俊卿後拾遺を撰ばれける時、秦兼久行き向ひて、自から歌などや入ると思ひて伺ひけるに、治部卿出でて、物語りして、「如何なる歌か詠みたる」と云はれければ、「はかなくしき候はず。後三條院崩れさせ給ひて後、圓宗寺に參りて候ひしに、花の匂ひは昔にも變らず侍りしかば、仕う奉りて候ひしなりとて、

去年見しに色も變らず咲きにけり花こそ物は思はざりけれ

とこそ仕りて候ひしか」と云ひければ、通俊卿「よろしく詠みたり。但し、けれ、けり、けるなど云ふことは、いとしも無き言葉なり。其れはさる事にて、花こそと云ふ文字こそ、女の童などの名にしつべけれ」とて、いとも譽められざりければ、言葉少なにて、立ちて侍ども有りける所に、「此殿は、大方歌の有様知り給はぬにこそ、斯かる人の撰集うけ給はりておはするは、あさましき事かな。四條大納言〔○公任〕の歌に、

春來てぞ人も問ひける山里は花こそ宿の主人なりけれ

と詠み給へるは、めでたき歌とて、世の人口にのりて申すめるは。其歌に「人も問ひける」と有り、又「宿の主人なりけれ」と有めるは、花こそと云ひたるは、其れには同じ様なるに、如何なれば四條大納言のはめでたく、兼久がは惡ろかるべきぞ。斯かる人の撰集うけ給はりて撰び給ふ、あさましき事なり」と云ひて出

でにけり。侍通俊の許へ行きて、「兼久こそ斯うく申して出でぬれ」と語りければ、治部卿打領きて、「さりけりく、物な云ひそ」とぞ云はれける。

(十一) 源大納言雅俊一生不犯「一本僧アリ」の金うたせたる事

是れも今は昔、京極の源大納言雅俊と云ふ人おはしけり。佛事をせられけるに、佛前にて僧に鐘を打たせて、一生不犯なるを撰びて講を行はれけるに、或僧の禮盤に上りて、少し顔氣色違ひたるやうに成りて、鐘木を取りて振りまはして、打ちもやらで暫しばかり有りければ、大納言如何にと思はれける程に、稍久しく物も云はで有りければ、人ども覺束なく思ひける程に、此僧懐きたる隙にて、「かはつるみは如何が候ふべき」と云ひたるに、諸人頤を放ちて笑ひたるに、一人の侍有りて、「かはつるみは、いく「一本无」つばかりにて候ひしぞ」と問ひたるに、此僧首をひねりて、「きと昨夜もして候ひき」と云ふに、大方動み合へり。其の紛れに、早う逃げにけりとぞ。

(十二) 兒のかい餅するに空寢入したる事

是れも今は昔、比叡の山に見有りけり。僧たち宵の徒然に、「いざ、搦餅せん」と云ひけるを、此兒心よせに聞きけり。さりとて、し出ださんを待ちて、寢ざらんも悪ろかりなと思ひて、かたくによりて、寢たる由にて出で来るを待ちけるに、既にし出だしたる様にて、轉き合ひたり。此兒、定めておどろかさんずらんと待ち居たるに、僧の「物申しさぶらはん、醒かせ給へ」と云ふを、嬉しと思へども、唯だ一度に



答へんも、待ちけるかともぞ思ふとて、今一聲呼ばれて答へんと、念じて寝たる程に「や、な起し奉りそ。幼き人は寝入り給ひにけり」と云ふ聲のしければ、あな佗しと思ひて、今一度起せかしと思ひ寝に聞けば、ひし／＼と、唯だ食ひに食ふ音のしければ、すべ無くて、無期の後に「えい」と答へたりければ、僧達笑ふこと限りなし。

(十三) 田舎の兒櫻の散るを見て泣く事

是れも今は昔、田舎の兒の比叡の山へ登りたりけるが、櫻のめでたく咲きたりけるに、風の烈しく吹きけるを見て、此兒さめ／＼と泣きけるを見て、僧のやはら寄りて、「など、かうは泣かせ給ふぞ。此花の散るを惜しう覺えさせ給ふか。櫻ははかなき物にて、斯く程無く移ろひ候ふなり。されども、さのみぞさぶらふ」と慰めければ、「櫻の散らんは、あながちにいかがせん、苦しからず。我が父の作りたる麥の花散りて、實の入らざらん思ふが佗しき」と云ひて、歎歎あげてよ／＼と泣きければ、うたてしやな。

(十四) 小藤太聳におどされたる事

是れも今は昔、源大納言定房と云ひける人の許に、小藤太と云ふ侍有りけり。やがて女にあひ具してぞ有りける。女も女房にてつかはれけり。此の小藤太は殿の沙汰をしければ、三とほり四とほりに居廣げてぞ有りける。此女の女房に、生寮家司の通ひける有りけり。宵に忍びて局へ入りけり。曉より雨降りて、え歸らで局に忍びて臥したりけり。此女の女房は上へのぼりにけり。此聳の君、屏風を立て廻はして寝たりける。

春雨いつとなく降りて、歸るべきやうも無く臥したりけるに、此舅の小藤太、此聳の君、徒然にておはすらん、看折敷に据ゑて持ちて、今片手に提に酒を入れて、縁より入らんは人見つべしと思ひて、奥の方より、さり氣なくて持て行くに、此聳の君は衣を引き被きて、仰様に臥したりけり。此女房の疾く下りよかしと、徒然に思ひて臥したりける程に、奥の方より遣戸を開ければ、疑ひ無く此女房の上より下るぞと思ひて、衣をば顔に被きながら、あ「一本前」の物をかき出だして、腹を反らして、けし／＼と起しければ、小藤太怯えて、な「一本の因」けざれ反りける程に、看も打散らし、酒もさながら打こぼして、大鬘をさ／＼けて、仰様に伏して倒れたり。頭を荒う打ちて、目眩入りて臥せりけりとか。

(十五) 大童子鮭ぬすみたる事

是れも今は昔、越後國より鮭を馬に負せて、二十駄ばかり、粟田口より京へ追ひ入れけり。其れに粟田口の鍛冶が居たる程に、頂禿けたる大童子の、眉目しぐれて、物むつかしう、おもらかにも見えぬが、此の鮭の馬の中に走り入りにけり。道は狭くて、馬なにかと躡きける間、此大童子走り添ひて、鮭を二つ引き抜き、懐へ引き入れてんけり。さてさり氣なくて走り先立ちけるを、此鮭に具したる男見てけり。走り先立ちて、童のたて首を取りて、引き留めて云ふやう、「吾先生は、如何で此鮭を盗むぞ」と云ひければ、大童子「さる事無し、何を證據にて斯うはの給ふぞ。吾主が取りて、此わらはに負するなり」と云ふ。斯く躡く程に、上り下る者市をなして、行きもやらで見合ひたり。さる程に、此鮭の綱丁、「まさしく吾先生取りて、

懐に引き入れつ」と云ふ。大童子はまた「吾主こそ盗みつれ」と云ふ。時に此鮭に付きたる男、「詮ずる所、我も人も懐を見ん」と云ふ。大童子「さまでやは有るべき」など云ふ程に、此男袴を脱ぎて、懐をひろけて、「くは見給へ」と云ひてひし／＼とす。さて此男、大童子に掴みつきて、「吾先生、早や物脱ぎ給へ」と云へば、「童さま悪しとよ。さまで有るべき事か」と云ふを、此男唯だ脱がせに脱がせて、前を引き明けたるに、腰に鮭を二つ腹に添へてさしたり。男「くは／＼」と云ひて出だしたる時に、此大童子打見て、「あはれ勿體なき主かな。此のやうに、裸に成して求らんには、如何なる女御、后なりとも、腰に鮭の一二尺無きやうは有りなんや」と云ひければ、そこら立ち留りて見ける者ども、一度にはつと笑ひけるとか。

(十六) 尼地藏見たてまつる事

今は昔、丹波國に老いたる尼有りけり。地藏菩薩は、曉毎に歩き給ふ事を仄かに聞きて、曉毎に地藏見奉らんとて、一夜かい惑ひ歩りに、博打の打ちほうけて居たるが見て、「尼公は寒きに何わざし給ふぞ」と云へば、「地藏菩薩の曉に歩き給ふなるに、逢ひ参らせんとて斯く歩りくなり」と云へば、「地藏の歩りかせ給ふ道は、我こそ知りたれば。いざ給へ、逢はせ参らせん」と云へば、「あはれ嬉しき事かな。地藏の歩りかせ給はん所へ、我を率ておはせよ」と云へば、「我に物を得させ給へ、やがて率て奉らん」と云ひければ、「此著たる衣奉らん」と云へば、「いざ給へ」とて、隣なる所へ率て行く。尼喜びて急ぎ行くに、その子に、ちざうといふ童有りけるを、其れが親を知りたりけるによりて、「ちざうは」と問ひければ、親「遊びにいぬ、



今來なん」と云へば、「くは此處なり、地藏のおはします所は」と云へば、尼嬉くて、袖の衣を脱ぎて取らすれば、博打は急ぎ取りていぬ。尼は地藏見參らせんとて居たれば、親どもは心得ず、何ど此童を見んと思ふらんと思ふ程に、十ばかりなる童の來たるを、「くは、ちさうよ」と云へば、尼見るまゝに是非も知らず、伏し轉びて拜み入りて、土に俯向たり。童、楚を持ちて遊びけるまゝに來たりけるが、其楚して、手すさびのやうに額をかけば、額より顔の上までさけぬ。さけたる中より、えもいはずめでたき地藏の御顔見え給ふ。尼拜み入りて打見上げたれば、斯くて立ち給へれば、涙を流して拜み入り參らせて、やがて極樂へ参りけり。されば心にも深く念じつれば、佛も見え給ふなりけりと、信すべし。

(十七) 修行者百鬼夜行にあふ事

今は昔、修行者の有りけるが、津の國まで行きたりけるに、日暮れて、龍泉寺とて大きな寺の古りたるが、人も無き有りけり。是れは人宿らぬ所と云へども、其邊りに又宿るべき所無かりければ、如何がせんと思ひて、策打下ろして内に入りてけり。不動の呪を唱へて居たるに、夜中ばかりにや成りぬらんと思ふ程に、人々の聲數多して來る音すなり。見れば、手毎に火を燈して、人百人ばかり此堂の内に來集ひたり。近くて見れば、目一つ着たりなどさまじくなり。人にも有らず、あさましき物どもなりけり。或は角生ひたり。頭もえも云はず怖しげなる物どもなり。怖ろしと思へども、すべきやうも無くて居たれば、各皆居ぬ。一人ぞまだ所も無くてえ居ずして、火を打振りて、我をつらくと見て云ふやう、「我が居るべき座に、新しき不動

尊こそ居給ひたれ。今宵ばかりは外におはせ」とて、片手して我れを引きさげて、堂の縁の下に据ゑつ。さる程に曉になりぬとて、此人々喧騒りて歸りぬ。誠にあさましく恐ろしかりける所かな。疾く夜の明けよかし、往なんと思ふに、辛うじて夜明けたり。打見廻はしたれば、有りし寺も無し。遙々とある野の來し方も見えず、人の踏み分けたる道も見えず、行くべき方も無ければ、あさましと思ひて居たる程に、まれく馬に乗りたる人どもの、人數多具して出で來たり。いと嬉くて、「こゝは何處とか申し候ふ」と問へば、「など斯くは問ひ給ふぞ。肥前國ぞかし」と云へば、あさましきわざかなと思ひて、事のやう委しく云へば、此馬なる人も「いと希有の事かな。肥前の國に取りても、是れはおくの郡なり。是れは御館へ參るなり」と云へば、修行者喜びて、「道も知り候はぬに、さらば道までも參らん」と云ひて往きければ、是れより京へ行くべき道など教へければ、舟尋ねて京へ上りにけり。さて人どもに、「かゝるあさましき事こそ有りしか。津の國の龍泉寺と云ふ寺に宿りたりしを、鬼どもの來て、所狭しとて、新らしき不動尊、暫し雨だりにおはしませ」と云ひて、かき抱きて、雨だりについ据ゆと思ひしに、肥前の國のおくの郡にこそ居たりしか。斯かるあさましき事にこそ逢ひたりしか」とぞ、心に來て語りけるとぞ。

(十八) 利仁薯預粥の事

今は昔、利仁の將軍の若かりける時、其時の一人の御許に啓動して候ひけるに、正月に大饗せられけるに、そのかみは大饗はて、鳥喰と云ふ物を、拂ひて入れずして、大饗のおろし米とて、給仕したる啓動の

者どもの食ひけるなり。其所に年比になりて、給仕したる者の中には、所得たる五位有りけり。其おろし米の座にて、芋粥(いもかゆ)盛り、舌打(したう)をして、「あはれ、如何で芋粥に飽かん」と云ひければ、利仁是れを聞きて、「大夫殿、未だ芋粥に飽かせ給はずや」と問ふ。五位「未だ飽き侍らず」と云へば、「飽かせ奉りてんかし」と云へば、「かしこく侍らん」とて止みぬ。さて四五日ばかりありて、曹司住(そうし)にて有りける所へ、利仁來て云ふやう、「いざさせたまへ湯浴(ゆあび)に、大夫殿」と云へば、「いかしきことかな。今宵身の痒く侍りつるに、乗物こそは侍らね」と云へば、「こゝにあやし馬具して侍り」と云へば、「あな嬉しあな嬉し」と云ひて、薄綿(うすわた)の衣二つばかりに、青鈍(あお鈍)の指貫(さしほ)の裾破れたるに、同じ色の狩衣(かりぎ)の肩少し落ちたるに、下の袴も著ず、鼻高(はなたか)なるもの、先は赤みて、穴のあたりぬればみたるは、嚙(か)滅(め)を拭はぬなめりと見ゆ。狩衣の後ろは、帯に引き歪められたるまゝに、引きもつくろはねば、いみじう見苦し。をかしかれども、先に立て、我も人も馬に乗りて、河原さまに打出でぬ。五位の供には、あやしの童だに無し。利仁が供には、調度掛(てうどがけ)、舎人(とねり)、雑色(ざつしき)一人ぞ有りける。河原打過ぎて、粟田口にかゝるに、「いづくへぞ」と問へば、唯だ「こゝぞ」とて山科(やまなか)も過ぎぬ。「こは如何に、こゝぞこゝぞとて山科も過しつるは」と云へば、「あしこあしこ」とて關山(せきざん)も過ぎぬ。「此處ぞ」とて、三井寺(さんせいじ)に知りたる僧の許に行きたれば、此處に湯沸すかと思ふだにも、物狂(ものぐる)はしう遠かりけりと思ふに、此處にも湯有り氣も無し。「いづら、湯は」と云へば、「誠は敦賀(つが)へ奉りて奉るなり」と云へば、「物狂はしうおはしける。京にてさとの給はましかば、下人(げにん)なども具すべかりけるを」と云へ

ば、利仁あざわらひて、「利仁二人侍らば、千人と思せ」と云ふ。斯くて物など食ひて急ぎ出でぬ。そこにて利仁、箆(へら)取りて負ひける。斯くて行く程に、三津の濱に、狐の一つ走り出でたるを見て、よき使出(ついで)で來たりとて、利仁狐を押しかくれば、狐身を投げて逃ぐれども、追ひ責められてえ逃げず。落ちかゝりて、狐の後足を取りて引き上げつ。乗りたる馬、いとかしこしとも見えざりつれども、いみじき適物(いたもの)にて有りければ、いくばくも延ばさずして捕へたる所に、此五位走らせて行き着きたれば、狐を引き上げて云ふやうは、「わ狐、今宵(こや)の中に、利仁が家の敦賀(つが)に罷りて云はんやうは、「俄に客人を具し奉りて下るなり。明日(あす)の巳の時に高島邊に、郎黨(らうたう)ども迎へに馬に鞍置きて、二疋具して參(ま)で來」と云へ。若し云はぬものならば、わ狐たゞ心みよ。狐は變化(へんげ)有るものなれば、今日のうちに行き着きて云へ」とて放てば、「荒涼(あらいやう)の使かな」と云ふ。「よし御覽(ごらん)せよ、罷らではよに有らじ」と云ふに、早く狐見返しつて、前に走り行く。「よく罷るめり」と云ふに合せて、走り先立ちて失せぬ。斯くて其夜は道に留まりて、翌朝(つぎあした)疾く出でて行く程に、誠に巳の時ばかりに、三十騎ばかりと「寄因(よきん)りて來る有り。何にか有らんと見るに、「郎黨(らうたう)ども參(ま)できたり」と云へば、「不定(ふだい)の事かな」と云ふ程に、唯だ近(ちか)に近くなりて、はらくと下る程に、「此れ見よ、誠におはしたるは」と云へば、利仁打微笑(うちわら)みて「何事ぞ」と問ふ。大人(おとな)しき郎黨(らうたう)進み來て、「希有(けいゆう)の事の候ひつるなり」と云ふ。先づ「馬は有りや」と云へば、「二疋(ふたひた)さぶらふ」と云ふ。食物(くひもの)などして來たりければ、その程におり居て食ふ序(ついで)に、大人(おとな)しき郎黨(らうたう)等の云ふやう、「昨夜(こぞ)希有(けいゆう)の事のさぶらひしなり。戌(いぬ)の時ばかりに、大盤所(おほまじり)の、胸を

きりに切りて病せ給ひしかば、如何なる事にかとて、俄に僧召さんなど騒がせ給ひし程に、手づから仰せ候ふやう、「何か騒がせ給ふ。己れは狐なり。別の事無し。この五日三津の濱にて、殿の下らせ給ひつるに逢ひ奉りたりつるに、逃げつれど、え逃げで捕へられ奉りたりつるに、「今日の中に我が家に行き着きて、客人具し奉りてなん下たる。明日巳の時に、馬二つに鞍置きて、具してをのことも高島の津に参りあへ」と云へ。若し今日の中に行き着きて云はずば、辛きめ見せんずるぞ」と仰せられつるなり。「郎黨ども疾くく出で立ちて参れ。遅く参らば、我は勘當かうぶりなん」と怖ら騒がせ給ひつれば、郎黨どもに召し仰せ候ひつれば、例ざまに成らせ給ひにき。その後、鳥と共に参り候ひつるなり」と云へば、利仁打笑みて、五位に見合すれば、五位あさましと思ひたり。物など食ひ果て、急ぎ立ちて昏々に行き着きぬ。「是れ見よ、誠なりけり」とあざみ合ひたり。五位は馬より下りて、家のさまを見るに、賑はしくめでたき事物にも似ず。もと著たる衣二つが上に、利仁が宿衣を著せられたども、身の中しすきたるべければ、いみじう寒けに思ひたるに、長炭櫃に火を多うおこしたり。疊厚らかに敷きて、菓食物し設けて、楽しく覺ゆるに、「道の程寒くおはしつらん」とて、練色の衣の綿厚らかなる、三つ引き重ねて持て来て、打破ひたるに、樂しとはおろかなり。物食ひなどして、事静まりたるに、舅の有仁田で来て云ふやう、「是は如何で、斯くは渡らせ給へるに、是れに并せて、御使のさま物狂はしうて、うへ俄に病せ奉り給ふ。希有の事なり」と云へば、利仁打笑ひて、「物の心みんと思ひてしたりつる事を、誠に参うで来て、告げて侍るにこそ有んなれ」と云へば、



舅も笑ひて、「希有の事なり」と云ふ。「具し奉らせ給ひつらん人は、此のおはします殿の御事ぞ」と云へば、「さに侍り。芋粥に未だ飽かずと仰せらるれば、飽かせ奉らんとて率て奉りにたる」と云へば、「安き物にもえ飽かせ給はざりけるかな」とて戯るれば、五位「東山に湯わかしたりとて、人を謀り出で、斯くのたまふなり」など云ひ戯れて、夜少し更けぬれば、舅も入りぬ。寢所と覺しき所に、五位入りて寢んとするに、綿四五寸ばかり有る直垂有り。我が許の薄綿は、むつかしう なにのあるに、斯く行き所も出で来るきめなれば、脱ぎ置きて、練色の衣三つが上に、此直垂ひき著ては臥したる、心未だならはぬに、氣も上げつべし。汗水にて臥したるに、又傍らに人のはたらけば、「誰ぞ」と問へば、「御足給へと候へば、参りつるなり」と云ふ。氣はひ憎からねば、かきふせて風の透く所に臥せたり。斯かる程に、物高く言ふ聲す。「何事ぞ」と聞けば、男の叫びて云ふやう、「此邊の下人承れ。明日の卯の時に、切口三寸、長さ五尺の芋、各一筋づつ持て参れ」と云ふなりけり。あさましう、大のかにも云ふ物かなと聞きて、寢入りぬ。曉方に聞けば、庭に鐘數く音のするを、何わざするに可有らんと聞くに、小屋當番より始めて、起き立ちて居たる程に、菰あけたるに、見れば長筵をぞ四五枚敷きたる。何の料に可有らんと見る程に、下衆男の、木のやうなる物を肩に打掛けて來たりて、一筋置きて去ぬ。其後打續き持て來つゝ置くを見れば、誠に口三寸ばかりの芋の五六尺ばかりなるを、一筋づゝ持て來て置くとすれど、巳の時まで置きければ、居たる屋と等く置きなし。昨夜叫びしは、はやう其邊にある下人の限りに物云ひ聞かすとて、人呼の岡とてある塚の上にて云ふなりけり。

唯だ其の聲の及ぶ限りの、めぐりの下人の限り持て來るにだにさばかり多かり。況して立ち退きたる從者どもの多さ、思ひ遺るべし。あさましと見たる程に、五石なほの釜を五つ六つ昇き持て來て、庭に杭ども打ち据ゑ渡したり。何の料ぞと見る程に、しほぎぬの襖と云ふ物著て帶して、若やかに穢け無き女どもの、白く新しき桶に水を入れて、此釜どもにさくく入る。何ぞ、湯沸すかと見れば、此水と見るは御榮なりけり。若きをのこどもの袂より手出だしたる、薄らかなる刀の長やかなる持たるが、十餘人ばかり出で來て、此芋を剥きつゝ、湯切に切れれば、早く芋粥煮るなりけりと見るに、食ふべき心地もせず、かへりては疎ましく成りにけり。さら／＼とかへらかして、「芋粥出でまうできにたり」と云ふ。「参らせよ」とて先づ大きな土器具して、金の提の一斗ばかり入りぬべきに、三つ四つに入れて、「且一つ」とて持て來るに、飽きて一盛をだにえ食はず、「飽きにたり」と云へば、いみじう笑ひて集まりて居て、「客人殿の御徳に、芋粥食ひつ」と云ひ合へり。斯様にする程に、向ひの長屋の軒に、狐のさし窺きて居たるを、利仁見付けて、「かれ御覽げよ、候ひし狐の見参するを」とて、「かれに物食はせよ」と云ひければ、食はするに打食ひてけり。斯くて萬づの事、頼母しと云へばおろかなり。一月ばかり有りて上りけるに、けをさめの装束ども數多具したり。又たゞの入丈、綿、絹など、皮子どもに入れて取らせ、初めの夜の直垂はた更なり。馬に鞍置きながら取らせてこそ送りけれ。給者なれども、所につけて、年比になりて許されたる者は、さるものゝ自ら有るなりけり。

宇治拾遺物語 卷第二

(一) 清徳聖きさぐの事

今は昔、清徳聖と云ふ聖の有りけるが、母の死にたりければ棺に打入れて、唯だ一人愛宕の山に持ちて行きて、大きな石を四つの隅に置きて、其上に此棺を打置きて、千手陀羅尼を片時やすむ時無く、打寝る事もせず、物も食はず、湯水も飲まで、醒絶もせず誦し奉りて、此棺を回ること三年になりぬ。其年の春、夢ともなく現ともなく、仄かに母の聲にて、「此陀羅尼を斯く夜晝誦し給へば、我はやく男子と成りて天に生れにしかども、同じくは佛に成りて告げ申さんとて、今までは告げ申さざりつるぞ。今は佛に成りて告げ申すなり」と云ふと聞ゆる時、さ思ひつることなり。今は早う成り給ひぬらんとて、取り出でよそこも「一本そこにて」焼きて、骨取り集めて埋みて、上に石卒都婆など立てよ、例のやうにして、京へ出づる道に、西京に水葱いと多く生ひたる所有り。此聖困じて、物いと欲しかりければ、道すがら折りて食ふ程に、主の男出で来て見れば、いと尊げなる聖の、斯くすゑろに折り食へば、あさましと思ひて、「如何に斯くはめすぞ」と云ふ。聖「困じて、苦しきまゝに食ふなり」と云ふ、時に「さらば参りぬべくは、今少しもめさまほしからん程食せ」と云へば、三十筋ばかりむずぐと折り食ふ。此水葱は、三町ばかりぞ植ゑたりけるに、斯く食へばいとあさましく、食はんやうも見ま欲しくて、「食しつべくはいくらも食せ」と云へば、「あな尊」

とて、打膝行膝行折りつゝ、三町をさながら食ひつ。主の男、あさましう物食ひつべき聖かなと思ひて、一暫し居させ給へ、物してめさせん」とて、白米壹石取り出で、飯にして食はせたらば、「年比物も食はで困じたるに」とて、皆食ひて出で去ぬ。此男いとあさましと思ひて、是れを人に語りけるを聞きつゝ、坊城の右の大段に人の語りまらせければ、如何でかさは有らん、心得ぬ事かな。呼びて物食はせて見んと思して、「結縁の爲に物参らせて見ん」とて、呼ばせ給ひければ、いみじげなる聖歩み参る。其後に、餓鬼、畜生、虎、狼、犬、鳥、萬づの鳥獸など、千萬と歩み續きて來けるを、こと人の目に大方は見えず、唯だ聖一人とのみ見えけるに、此大段見付け給ひて、さればこそ、いみじき聖にこそ有りけれ。めでたしと思えて、白米十石を御膳にして、新しき籠籠に折敷、桶、櫃などに入れて、いく／＼と置きて食はせさせ給うければ、後に立ちたるものどもに食はすれば、集まりて、手を捧げ皆食ひつ。聖はつゆ食はで喜びて出でぬ。さればこそ、尋常人には有らざりけり。佛などの變じて歩き給ふにやと思しけり。他人の目には、唯だ聖一人して食ふとのみ見えければ、いとあさましき事に思ひけり。さて出で行く程に、四條の北なる小路に穢土をまゐる。此後に具したるものし散したれば、唯だ墨のやうに黒き穢土を際も無く適々とし散したれば、下衆なども穢がりて、其小路を蕪の小路と附けたりけるを、帝聞かせ給ひて、「その四條の南をば何と云ふ」と云はせ給ひければ、「綾の小路となん申す」と申しければ、「さらば、是れをば錦の小路と云へかし。餘り穢き名かな」と仰せられけるよりしてぞ、錦の小路とは云ひける。

(二) 静観僧正祈雨法験事

今は昔、延喜の御時早魃せんぼつしたりけり。六十人の貴僧を召して、大般若經讀ましめ給ひけるに、僧ども黒魃くろぼつを立て、驗顯しんしんさんと祈りけれども、いたくのみ晴れまさりて、日強く照りければ、帝を始めて、大臣公卿、百姓人民、此一事より外の歎き無かりけり。藏人頭を召し密せて、静観僧正に仰せ下さるゝやう、「殊更思し召さるゝやう有り。斯くの如く方々に御祈りども、させる験無し。座を立ちて、別に壁のもとに立ちて祈れ。思し召すやう有れば、取り分け仰せ付くるなり」と仰せ下されければ、静観僧正、其時は律師にて、上に僧都、僧正、上臈じやうらふどもおはしけれども、面目限りなくて、南殿の御階より下りて、屏の許に北向に立ちて、香爐取りくびりて、額に香爐をあてゝ祈請し給ふ事、見る人さへ苦しく思ひけり。熱き日の、暫しもえさし出でぬに、涙を流し、黒煙を立てゝ祈請し給ひければ、香爐の煙空へあがりて、扇ばかりの黒雲になる。上達部の南殿に列び居、殿上人は弓場殿ゆまのどのに立ちて見るに、上達部の御前は美福門より覗く。如此く見る程に、其雲斑なく大空に引き塞ぎて、龍神震動し、電光大千界に満ち、車軸しやうじくの如くなる雨降りて、天下忽ちにうるほひ、五穀豊饒にして萬木果を結ぶ。見聞の人歸依せずと云ふ事なし。さて帝、大臣、公卿等隨喜して、僧都に成し給へり。不思議の事なれば、末の世の物語に斯くしるせるなり。

(三) 同僧正大嶽の岩祈る事

今は昔、静観僧正は、西塔の千手院と云ふ所に住み給へり。其所は南に向うて、大嶽を守る所にて有りけ



り。大獄の乾の方のそひ「ばイ本」に大きな巖有り。其巖の有様、龍の口をあきたるに似たりけり。其巖の筋に向ひて住みける僧ども、命脆くして多く死にけり。暫らくは、如何にして死ぬるやらんと、心も得ざりける程に、此巖の有る故ぞと云ひ立ちにけり。此巖を毒龍の巖とぞ名付けたりける。是れに因りて西塔の有様、唯だ荒れにのみ荒れ増りけり。此の千手院にも、人多く死にければ、住みわづらひけり。此巖を見るに、誠に龍の大口をあきたるに似たり。人の云ふことは、實にもさ有りけりと僧正思ひ給ひて、此巖の方に向ひて、七日七夜加持し給ひければ、七日と云ふ夜半ばかりに、空曇り震動する事おびたし。大獄に黒雲懸りて見え、暫らく有りて空晴れぬ。夜明け大獄を見れば、毒龍巖碎けて散り失せにけり。其より後、彼の西塔に入住みけれども、崇り無かりけり。西塔の僧どもは、件の屋主を、今に至るまで貴み拜みけるとぞ語り傳へたる、不思議のことなり。

(四) 金峰山薄打事

今は昔、七條に薄打あり、御獄詣しけり。まゐりて金崩を行いて見れば、誠の金のやうにて有りけり。嬉しく思ひて、件の金を取りて、袖に包みて家に歸りぬ。おろして見ければ、きら／＼として信實の金なりければ、不思議のことなり。此金取れば、神鳴り、地震、雨降りなどして、少しもえ取らさんなるに、是れはさる事も無し。この後も、此金を取りて世の中を過ぐべしと、嬉しくて、秤にかけて見れば、十八兩ぞ有ける。是れを薄に打つに、七八千枚に打ちつ。是れを纏げて、皆買はん人もがなと思ひて、暫く持ちたる程

に、非檢に使なる人の、東寺の佛造らんとて、薄を多く買はんと云ふと告ぐる者有りけり。喜びて、懷にさし入れて行きぬ。「薄や召す」と云ひければ、「いくらばかり持ちたるぞ」と問ひければ、「七八千枚ばかり候ふ」と云ひければ、「持ちて参りたるか」と云へば、「候ふ」とて、懷より紙に包みたるを取り出だしたり。見れば、破れず廣く、色いみじかりければ、廣げて數へんとて見れば、小さき文字にて、「金御獄、云云」と、悉く書かれたり。心もえで、「此書付は何の料の書付ぞ」と問へば、薄打「書付も候はず。何の料の書付かは候はん」と云へば、「現にあり、是れを見よ」とて見するに、薄打見れば誠にあり。あさましき事かなと思ひて、口もえあかず。檢非違使、「是れは尋常事にあらず、標あるべき」とて、友を呼びぐして、金をば看督長に持たせて、薄打具して大理の許へ参りぬ。件の事どもを語り奉れば、別當驚きて、「早く河原に出で行いて問へ」と言はれければ、檢非違使ども河原に行いて、寄柱掘り立て、身を働かさぬやうにはりつけて、七十度の拷問をへければ、背中は紅の練單衣を水に濡して著せたるやうに、みさ／＼と成りて有りけるを、重ねて獄に入りたりければ、僅に十日ばかり有りて死にけり。薄をば金峰山に返して、もとの所に置きけると語り傳へたり。其れよりして人怖て、いよ／＼件の金取らんと思ふ人無し。あな恐ろし。

(五) 用「一本茂ニ作ル下同」經あら卷の事

今は昔、左京の大夫なりける古上達部有りけり。年老いて、いみじう古めかしかりけり。下わたりなる家に、ありきもせで籠り居たりけり。其の司の目にて、紀用經と云ふ者有りけり。長岡になん住みける。司

の目なれば、此大夫の許にも来てなんをとづり「〇をこづりカ」ける。この用經、大殿に参りて、寶殿に居たる程に、淡路の守頼親が、鯛の荀直を多く奉りたりけるを、寶殿に持て参りたり。寶殿の預義澄に、二卷用經乞ひ取りて、ま木にさゝげて置くこと、義澄に云ふやう、「是れ人して取りに奉らん折に、遣せ給へ」と云ひ置く。心の中に思ひけるやう、是れ我が司の大夫に奉りて、誘り奉らんと思ひて、是れをま木にさゝげて、左京の大夫の許に行きて見れば、かんの君、出居に客人二三人ばかり来て、饗應せんとて、地火爐に火おこしなどして、我が許にて物食はんとするに、はか／＼しき魚も無し。鯛鳥など用ありげなり。それ用經が申すやう、「用經が許にこそ、津の國なる下人の、鯛のあら卷三つ持て参うで來たりつるを、一卷たべ心み侍りつるが、えも云はずめでたく候ひつれば、今二卷はけがさで置きて候ふ。急ぎて参でつるに、下人の候はで、持て参り候はざりつるなり。只今取りに遣はさんは如何に」と、聲高くしたり顔に、袖をつくろひて、口わきかい拭ひなどして、はや「不居あ」がりのぞきて申せば、大夫「さるべき物の無きに、いと善き事かな。疾く取りに遣れ」とのたまふ。客人ども、「食ふべき物の候はさめるに、九月ばかりの比なれば、此比鳥の味いと悪ろし。鯉はまだ出で來ず。よき鯛は奇異の物なり」など云ひ合へり。用經、馬ひかへたる童を呼び取りて、「馬をば御門の傍に繋ぎて、只今走り、大殿に寶殿の預の主に、「其の置きつる荀直、只今おこせ給へ」と私語めきて、「時かはさず持て來。外に寄るな。疾く走れ」とて遣りつ。さて「俎洗ひて持て參れ」と聲高く云ひて、やがて「用經、今日の庖丁は仕らん」と云ひて、眞魚箸けづり、

鞆なる刀抜いて設けつゝ、「あな久し、いづら來ぬや」など、心もと無がり居たり。「遅し／＼」と云ひ居たる程に、遣りつる童、木の枝に荒卷二つ結び付けて持て來たり。「いとかしこく、あはれ飛ぶが如走りて参うで來たる童かな」と譽めて、取りて俎の上に打ち置きて、事々しく大鯉つくらんやうに、左右の袖つくろひ、括りひき結び、片膝立て、今片膝ふせて、いみじくつき／＼しく居なして、あらまきの鞆をおし切りて、刀して薬をおし開くに、ほろ／＼と物どもこぼれて落つる物は、平足駄、古尻切、古草鞋、古沓、かやうの物の限り有るに、用經あきれて、刀も眞魚箸も打ち捨て、沓も履きあへず逃げて去ぬ。左京の大夫も、客人もあきれて目も口もあきて居たり。前なる侍ども、あさましくて、目を見かはして居並むたる顔ども、いと怪しげなり。物食ひ酒飲みつる遊も、皆荒涼くなりて、一人立ち二人立ち、皆立ちて去ぬ。左京の大夫の云はく、「此男をば、斯くえも云はぬ癡物狂ひとは知りたりつれども、司のかみとて來睦びつれば、よしとは思はねど、追ふべき事も有らねば、さと見て有るに、斯かるわざをしてはからんをば如何がすべき。物悪しき人は、はかなき事に付けても斯かるなり。如何に世の人聞き傳へて、世の笑種にせんとすらん」と、空を仰ぎて歎き給ふ事限りなし。用經は馬に乗りて、馳せちらして殿に参りて、寶殿の預義澄に逢ひて、「此荒卷をば惜しと思さば、寛厚に取り給はではあらで、斯かる事し出で給へる」と、泣きぬばかりに怨み喧騒る事限りなし。義澄が云はく、「此は如何にのたまふ事ぞ。荒卷は奉りて後、假初に宿に罷りつとて、己が男に云ふやう、「左京の大夫の主の許から、荒卷取りにおこせたらば、取りて使に取ら

せよ」と云ひ置きてまかで、只今歸りまゐりて見るに、荒巻無ければ、「何處いぬぞ」と問ふに、「しかじかの御使ありつれば、のたまはせつるやうに取りて奉りつる」と云ひつれば、然にこそは有んなれと聞きてなん侍る。事のやうを知らず」と云へば、「さらばかひ無くとも言ひ預けつらん主を呼びて問ひ給へ」と云へば、男を呼びて問はんとするに、出でゝいにけり。臆部なる男が云ふやう、「己れが部屋に入り居て聞きつれば、此若主たちの、「ま木にさゝげられたる苞直こそ有れ。こは誰が置きたるぞ、何の料ぞ」と問ひつれば、誰にか有りつらん、「左京の目の主のなり」と云ひつれば、「さては事にも有らず、すべきやう有り」とて、取り下して、鯛をば皆切りまゐりて、かはりに古尻切、平足駄などをこそ入れて、ま木に置かると聞き侍りつれ」と語れば、用經聞きて、叱りのゝしる事限りなし。此聲を聞きて、人々いとはしとは云はで笑ひ喧騒る。用經しわびて、斯く笑ひ喧騒られん程は歩かじと思ひて、長岡の家に籠り居たり。其後、左京の大夫の家にも、え行かずなりにけるとかや。

(六) 原「○厚カ」行死人を家より出だす事

昔、右近將監下野原「厚下同」行と云ふ者有りけり。競馬によく乗りけり。帝王より始め奉りて、覺え殊に勝れたりけり。朱雀院の御時より、村上の御門の御時などは、盛にいみじき舍人にて、人もゆるし思ひけり。年高くなりて、西京に住みけり。隣なりける人俄に死にけるに、この原行とふらひに行きて、その子に逢ひて、別れの間の事どもとふらひけるに、「此死にたる親を出ださんに、門悪しき方に向へり。されば

とて、さて有るべきに有らず、門よりこそ出だすべき事にて有れ」と云ふを聞きて、原行が云ふやう、「悪しき方より出ださん事、殊に然るべからず。かつは數多の御子たちの爲、殊に忌はしかるべし。原行が隔の垣を破りて、其れより出だし奉らん。かつは生き給ひたりし時、事に觸れて情のみ有りし人なり。斯かる折だにもその恩を報じ申さずば、何をもつてか報い申さん」と云へば、子どもの云ふやう、「無爲なる人の家より出ださん事有るべきに有らず。忌の方なりとも、我が門よりこそ出ださめ」と云へども、「僻言なし給ひそ。唯だ原行が門より出だし奉らん」と云ひて歸りぬ。我が子どもに云ふやう、「隣の主の死にたるいとほしければ、弔ひに行きたりつるに、あの子どもの云ふやう、「忌の方なれども、門は一つなれば、是れよりこそ出ださめ」と云ひつれば、いとほしく思ひて、「中の垣を破りて、我が門より出だし給へ」と云ひつる」と云ふに、妻子ども聞きて、「不思議の事し給ふ親かな。いみじき激斷の聖なりとも、斯かる事する人やは有るべきと。身思はぬと云ひながら、我家の門より隣の死人出だす人や有る。返すくも有るまじき事也」と皆云ひ合へり。原行「僻言な言ひ合ひそ。唯だ原行がせんやうに任せて見給へ。物忌し、奇しく忌むやつは命も短く、はかしくしき事無し。唯だ物忌まぬは、命も長く子孫も榮ゆ。いたく物忌み奇しきは人と云はず。恩を思ひ知り、身を忘るゝをこそは人とは云へ。天道も是れをぞ恵み給ふらん。由なき事な佗び合ひそ」とて、下人ども呼びて、中の櫓垣をたゞ毀ちに毀ちて、其れよりぞ出ださせける。さて其事世に聞えて、殿ばらもあざみ譽め給ひけり。さて其後、九十ばかりまで保ちてぞ死にける。其れが子どもに至るまで、皆命長くて、

下野氏の子孫は、舍人の中にも多くあるとぞ。

(七) 鼻長僧の事

昔池の尾に、禪珍内供と云ふ僧住みける。眞言などよく習ひて、年久しく行ひて貴かりければ、世の人々標榜の祈をせさせければ、身の徳ゆたかにて、堂も僧坊も少しも荒れたる所無し。佛供御燈なども絶えず、折節の僧踏、寺の講演繁く行はせければ、寺中の僧坊に隙なく、僧も住み眠ひけり。湯屋には、湯沸さぬ日無く沐み喧騒りけり。又其あたりには、小家ども多く出で来て里も眠ひけり。さてこの内供は鼻長かりけり。五六寸ばかりなりければ、頤より下りてぞ見えける。色は赤紫にて、大柑子の膚のやうに粒立ちて脹れたり。痒がる事限り無し。提に湯をかへらかして、折敷を鼻さし入るばかり彫り通して、火の炎の顔に當らぬやうにして、其折敷の穴より鼻をさし出で、提の湯にさし入れて、能く茹て引上げたれば、色は濃き紫色なり。其れを側さまに臥せ、下に物を當て、人に踏ますれば、粒立ちたる穴毎に、煙のやうなる物出づ。其れをいたく踏めば、白き蟲の穴毎にさし出づるを、毛抜にてぬけば、四分ばかりなる白き蟲を穴毎に取り出だす。其の跡は穴多にあきて見ゆ。其れを又同じ湯に入れて、さらめかし沸すに、茹づれば鼻小さく萎みあがりて、尋常人の鼻のやうに成りぬ。又二三日になれば、前の如くに腫れて大きに成りぬ。斯くの如くしつゝ、腫れたる日數は多く有りければ、物食ひける時は、弟子の法師に、平なる板の一尺ばかりなるが、廣さ一寸ばかりなるを鼻の下にさし入れて、對ひ居て、上さまへ持上げさせて、物食ひ果つるまでは有りけり。



他人して持上げさする折は、荒く持上げければ、腹を立てて物も食はず。されば此法師一人を定めて、物食ふ度毎に持上げて上げさす。それに心地悪しくて、此の法師出でざりける折に、朝粥食はんとするに、鼻を持って上ぐる人無かりければ、「如何にせん」など云ふ程に、つかひける童の、「我は能く持て上げ參らせてん、更に其御房にはよも劣らじ」と云ふを、弟子の法師聞きて、「此童の斯くは申す」と云へば、中大童子にて、みめも穢けなく有りければ、上に召し上げて有りけるに、此童鼻持て上の木を執りて、うるはしく對ひ居て、善き程に高からず低からず持上げて、粥を嚙らすれば、此の内供、「いみじき上手にて有りけり。例の法師には勝りたり」とて、粥を嚙る程に、此童鼻をひんとて、側様に向かひて鼻をひる程に、手震ひて鼻持上の木搖ぎて、鼻外れて粥の中へふたりと打入れつ。内供が顔にも童の顔にも、粥逆りてひともの掛かりぬ。内供大きに腹立ちて、頭顔に掛かりたる粥を紙にて拭ひつゝ、「己れは凶凶しかりける心持ちたる者かな。心なしの乞兒とは、己れがやうなる者を云ふぞかし。我れならぬ、やごつなき人の御鼻にもこそまゐれ、其れには斯くやはせんずる。うたてなりける心なしの癡者かな。おのれ立て／＼」とて追ひ立てければ、立つまゝに、「世の人の、斯かる鼻持ちたるがおはしまさばこそ、鼻持上にも參らめ。迂愚の事の給へる御房かな」と云ひければ、弟子ども、物の後ろに逃げのきてぞ笑ひける。

(八) 晴明封藏人少將事

昔、晴明陣に參りたりけるに、前驅花やかに追はせて、殿上人の參りけるを見れば、藏人の少將とて、まだ若く花やかなる人の、みめ殊に清けにて、車より下りて内に參りたりける程に、此少將の上に鳥の飛びて通れけるが、糞をし掛けけるを、晴明きと見て、あはれ世にも逢ひ、年なども若くて、みめも善き人にこそ有んめれ。職神に打てけるにか。此の鳥はしき神にこそ有りけれと思ふに、しかるべくて、此少將の生くべき報や有りけん。いとほしう晴明が覺えて、少將の側へ歩み寄りて、「御前へ參らせ給ふか。さかしく申すやうなれど、何かまゐらせ給ふ。殿は今夜え過ぐさせ給はじと見奉るぞ。然るべくて、己れには見えさせ給へるなり。いざさせ給へ。物心みん」とて、此一つの車に乗りければ、少將戰慄きて、「あさましき事かな。さらば助け給へ」とて、一つ車に乗りて少將の里へ出でぬ。申の時ばかりの事にて有りければ、斯く出でなどしつる程に日も暮れぬ。晴明、少將をつと抱きて身固めをし、又何事にか、つぶ／＼と夜一夜も寝ず、聲絶もせず讀み聞かせ加持しけり。秋の夜の長きに、よく／＼したりければ、曉方に戸をはた／＼と敲きけるに、「あれ、人出だして聞かせ給へ」とて、聞かせければ、此少將のあひ聲にて、藏人の五位の有りけるも、同じ家に彼方此方に据ゑたりけるが、此少將をばよき聲とてかしづき、今一人をば殊の外に思ひ落したりければ、妬がりて、陰陽師を語らひて、職神を伏せたりけるなり。さて其少將は死なんとしけるを、晴明が見付けて、夜一夜祈りたりければ、其伏せける陰陽師の許より人の來て、高やかに「心の惑ひけるまゝに、由なく守り強かりける人の御爲に、仰せを背かじとて職神伏せて、既にしき神かへりて、己れ只今職神に打て、死に侍りぬ。すまじかりける事をして」と云ひけるを、晴明「是れ聞かせ給へ。昨夜見つけ參らせざ

らましかば、かやうにこそ候はまし」と云ひて、其使に人を添へて遣りて聞きければ、「陰陽師はやがて死にけり」とぞ云ひける。職神しんふ「衍カ」をさせける聲をば、舅やがて追ひ捨てけるとぞ。晴明には、泣く泣く喜びて、多くの事どもして、あかずぞ「イ本ニヨリテ補フ」喜びける。誰とはおぼえず、大納言まで成り給ひけるとぞ。

(九) 季通欲逢映事

昔、駿河前司橋季通はつせのさきとほと云ふ者有りき。それが若かりける時、さるべき所なりける女房を、忍びて行き通ひける程に、其處そこに有りける侍ども、「なま六位の家人けにんにて有らぬが、宵曉よあけに此殿へ出で入る事佗し。これ閉て籠めて勘ぜん」と云ふ事を、集まりて云ひ合はせけり。斯かる事をも知らで、例の事なれば小舎人童一人具して局つぼに入りぬ。童をば、「曉迎へに來よ」とて返し遣りつ。此打たんとする男ども窺ひまもりければ、「例のぬし來て、局に入りぬるは」と告げまはして、彼方此方の門どもを鎖し廻して、鑰取り置きて侍れども、曳杖ひきぼうして、築地の崩などの有る所に立ち塞がりて守りけるを、其局の女の童氣色とりて、主の女おんな「因房」に「斯かる事のさふらふは、如何なる事にか候ふらん」と告げれば、主の女も聞き驚き、二人臥したりけるが、起きて季通も装束して居たり。女房上にうにのぼりて尋ねぬれば、侍どもの心合はせてするとは云ひながら、主の男も、空しらずしておはする事と聞きえて、すべきやう無くて、局に歸りて泣き居たり。季通、いみじきわざかな、恥を見てんずと思へども、すべきやう無し。女の童を出だして、出でて往ぬべき少しの隙

や有ると見せけれども、「さやうの隙有る所には、四五人づゝ括りを上げ、そばをはさみて、太刀を佩き、杖を脇わきばさみつゝ皆立てりければ、出づべきやうも無し」と云ひけり。此駿河前司は、いみじう力ぞ強かりける。如何がせん、明けぬとも此局に籠り居てこそは、引出でに入り來ん者と取りあひて死なめ。さりとも夜明けて後、我ぞ人ぞと知りなん後には、兎も角もえせじ。從者共呼びに遣りてこそ、出でゝも行かめと思ひ居たりけり。曉に此童の來て、心も得ず門敲きなどして、我が小舎人童と心得られて、捕へ縛られやせんずらんと、其れぞ不便ふべんに覺えければ、女の童を出だして、若しや聞き付くると伺ひけるをも、侍どもはしたなく云ひければ、泣きつゝ歸りて屈かぶまり居たり。斯かる程に、曉方に成りぬらんと思ふ程に、此童如何にしてか入りけん、入り來る音するを、侍、「誰ぞ、其童は」と、氣色とりて問へば、あら「しかく答へなんずと思ひ居たる程に、「御讀經の僧の童子に侍り」と名告る。さ名告られて「疾く過ぎよ」と云ふ。かしこく答へつる者かな。寄り來て、例呼ぶ女の童の名や呼ばんずらんと、又其れを思ひ居たる程に、寄り來て過ぎて去ぬ。此童も心得てけり、巧うまき奴ぞかし。さ心得ては、さりとも謀る事有らんずらんと、童の心を知りたれば、頼母たのぼしく思ひたる程に、大路に女聲して、「引剝有りて人殺すや」と喚く。其れを聞きて、この立てる侍ども、「あれ搦めよや、異しうは有らじ」と云ひて、皆走り掛りて、門をもえ開け敢へず、崩より走り出で、「何方へ去ぬるぞ、此方彼方」と尋ね騒ぐ程に、此童の計る事よと思ひければ、馳せ出で、見るに、門をば鎖したれば、門をば疑はず、崩のもとに、片方はとまりて、とかく云ふ程に、門のもとに馳せ



よりて、鑊いばらを捻ひねちて引き抜きて開くるまゝに馳せのきて、築地走り過ぐる程にぞ、此童は馳せ合ひたる。具して三町ばかり馳せ延びて、例のやうに長閑に歩みて、「如何にしつる事ぞ」と云ひければ、「門どもの例ならず鎖されたるに合せて、崩に侍どもの立ち塞がりて、巖しげに尋ね問ひ候ひつれば、其處にては、「御讀經の僧の童子」と名告り侍りつれば、いで侍りつるを、其れより罷り歸りて、とかくやせましと思ひ給ひつれども、参りたりと知られ奉らでは、悪しかりぬべく覺え侍りつれば、聲を聞かれ奉りて、歸り出で、此隣なる女のわ「一本ニヨリテ補フ」らはのくほまり居て侍るを、しや頭を取りて打ち伏せて、衣きぬを剥はぎ侍りつれば、喚こゑき候ひつる聲に付きて、人々出でまうで來つれば、今は然さりとも出でさせ給ひぬらんと思ひて、此方さまに参りあひつるなり」とぞ云ひける。童部なれども、かしこくうるせき者は斯かる事をぞしける。

(十) 袴垂合保昌事

昔、袴垂かすかけとていみじき盗人の大將軍有りけり。十月ばかりに衣きぬの用なりければ、衣少し設けんとて、さるべき所々窺のぞひ歩きけるに、夜中ばかりに、人皆静り果て、後、月の朧おぼろなるに、衣あまた著きたりけるぬしの、指貫さしぬきの稜かどはさみて、きぬの狩衣かきこめきたる著て、唯だ一人笛吹きて、行きもやらずねり行けば、哀れ是こそ、我に衣得させんとて出でたる人なめりと思ひて、走り掛りて衣を剥はがんと思ふに、怪しく物の恐ろしく覺えければ、添そひて二三町ばかり往いけども、我に人こそ付きたると思ひたる氣色も無し。いよく、笛を吹きて往けば、試んと思ひて、足を高くして走り寄りたるに、笛を吹きながら見返りたる氣色、取り懸かるべくと覺えざりけ

れば走り退きぬ。斯やうに數多度、とさまかうさまするに、つゆばかりも騒ぎたる氣色無し。希有の人かなと思ひて、十餘町ばかり具して行く。さりとて有らんやとは思ひて、刀を抜きて走り掛かりたる時に、其度笛を吹きやみて、立ち返りて「こは何者ぞ」と問ふに、心も失せて、我にも有らで躑居られぬ。又「如何なる者ぞ」と問へば、今は逃ぐともよも逃さじと覺えければ、「引剝に候ふ」と云へば、「何者ぞ」と問へば、「宇袴垂となん云はれ候ふ」と答ふれば、「さふ者有りと聞くぞ、危げに希有の奴か」と云ひて、「共に參で來」とばかり云ひ掛けて、又同じやうに笛吹きて行く。此人の氣色、今は逃ぐともよも逃さじと覺えければ、鬼に神取られたるやうにて、共に行く程に家に行き着きぬ。何所ぞと思へば、攝津前司保昌と云ふ人なりけり。家の内に呼び入れて、綿厚き衣一つを給はりて、「衣の用有らん時は參りて申せ。心も知らざらん人に取り掛かりて、汝あやまちすな」と有りしこそ、あさましくむくつけく恐ろしかりしか。いみじかりし人の有様なり」と、捕へられて後語りける。

(十一) 明衡欲逢映事

昔、博士にて大學頭明衡と云ふ人有りき。若かりける時、さるべき所に宮仕へける女房を語らひて、其の所に入り臥さんこと便無かりければ、其傍に有りける下衆の家を借りて、「女房語らひ出だして臥さん」と云ひければ、男主人は無くて妻ばかり有りけるが、「いと安き事」とて、己れが臥す所より外に臥すべき所の無かりければ、我が臥し所を去りて、女房の局の疊を取り寄せて寢にけり。家主人の男、我が妻の密男すると



聞きて、「其密男、今宵なん逢はん」と構ふる」と告ぐる人有りければ、來んを構へて殺さんと思ひて、妻には「遠く物へ行きて、今四五日歸るまじ」と云ひて、虚行きをして窺ふ夜にてぞ有りける。家主人の男、夜更けて立ち聞くに、男女の忍びて物云ふ氣色しけり。さればよ、隠男來にけりと思ひて、密に入りて窺ひ見るに、我が寢所に男女と臥したり。暗ければ確に氣色見えず。男の駢する方へやをらのぼりて、刀を逆手に抜き持ちて、腹の上と思しき程を探りて突かんと思ひて、腕を持ち上げて突きたてんとする程に、月影の板間より漏りたりけるに、指貫のくもり長やかにて、ふと見えければ、其れにきと思ふやう、我が妻の許には、かやうに指貫著たる人はよも來じものを、若し人違へしたらんはいとほしく不便なるべき事と思ひて、手をひき返して、著たる衣などを探りける程に、女房ふと駭きて、「此處に人の音するは誰ぞ」と、忍びやかに云ふ氣はひ、我が妻にあらざりければ、さればよと思ひて居退きける程に、此臥したる男もおどろきて、「誰ぞ」と問ふ聲を聞きて、我が妻の、下なる所に臥して、我が男の氣色の怪しかりつるは、其れが密に來て、人違き「〇き衍カ」などするにやと覺えける程に、驚き騒ぎて、「あれは誰ぞ、盗人かな」と喧騒る聲の、我が妻にて有りければ、他人々の臥したるにこそと思ひて、走り出で、妻が許に行きて髪を取りて引き伏せて、「如何なる事ぞ」と問ひければ、妻さればよと思ひて、「かしこういみじき過ちすらん。彼處には上藤の今宵ばかりとて借らせ給ひつれば、貸し奉りて、我は宿にこそ臥したれ。希有のわざする男かな」と喧騒る時にぞ、明衡も駭きて、「如何なる事ぞ」と問ひければ、其時に男出で來て云ふやう、「己れは、甲斐

殿の雜色某と申す者にて候。一家の君おはしけるを知り奉らで、ほとく過ちをなん仕るべく候ひつるに、希有に御指貫の括りを見付けて、しかく思ひ給ひてなん、腕を引きしめて候ひつる」と云ひて、いみじう詫びける。甲斐殿と云ふ人は、此明衡の妹の男なりけり。思ひ掛けぬ指貫の括りの徳に、希有の命をこそ生きたりけれ。斯かれば、人は忍ぶと云ひながら、怪しき所には立ち寄るまじきなり。

(十二) 唐卒都婆に血付事

昔、唐土に大きな山ありけり。其山の頂に大きな卒都婆一つ立てりけり。其山の麓の里に、年八十ばかりなる女の住みけるが、日に一度、其山の峰に在る卒都婆を必ず見けり。高く大きな山なれば、麓より峰へ登る程険しくはげしく道遠かりけるを、雨降り雪降り、風吹き雷鳴り、しみ氷りたるにも、又暑く苦しき夏も一日も缺かず、必ず登りて此卒都婆を見けり。斯くするを人え知らざりけるに、若き男ども、童部の、夏暑かりける頃峯に登りて、卒都婆の許に居つゝ涼みけるに、此女汗を拭ひて、腰二重なる者の杖にすがりて、卒都婆のもとに來て、卒都婆を廻りければ、拜み奉るかと思れば、卒都婆を打廻りては、即ち返りくる事一度にも有らず、あまた度此涼む男どもに見えにけり。此の女は何の心有りて、斯くは苦しきにするにかと怪しがりて、「今日見えば、此事問はん」と云ひ合はせける程に、常の事なれば、此女這ふく登りけり。男ども女に云ふやう、「わ女は何の心によりて、我等が涼みに來るだに、暑く苦しく大事なる道を、涼まんと思ふによりて登り來るだにこそ有れ。涼むことも無し、別にする事も無くて、卒都婆を見廻るを事にて、

日々に登りおるゝこそ怪しき女のわざなれ。此故知らせ給へ」と云ひければ、此女、「若き主達は實に怪しと思ふらん。斯くまうで来て此卒都婆見る事は、此頃の事にしも侍らず。物の心知り始めてより後この七十餘年、日毎に斯く登りて卒都婆を見奉るなり」と云へば、「其事の怪しく侍るなり。其故をのたまへ」と候間丙一本へば、「己れが親は、百二十にてなん亡せ侍りにし。祖父は、百三十ばかりにてぞ亡せ給へりし。其れに又父の祖父などは、二百餘年までぞ生きて侍りける。其人々の云ひ置かれたりけるとて、「此卒都婆に血の付かん折になん、此山は崩れて深き海と成るべき」となん父の申し置かれしかば、麓に侍る身なれば、山崩れなば、打覆れて死にもぞすると思へば、若し血付かば逃げて退かんとて、斯く日毎に見侍るなり」と云へば、此聞く男ども、迂愚がり嘲りて、「恐ろしき事かな。崩れん時と告げ給へ」など笑ひけるをも、我を嘲りて云ふとも心得ずして、「勿論なり。如何でかは我れ一人逃げんと思ひて、告げ申さざるべき」と云ひて、歸り下りにけり。此男ども、「此女は今日はよも來じ。明日又來て見んに、感して走らせて笑はん」と言ひ合はせて、血を滴して、卒都婆によく塗り付けて、此男ども歸り下りて、里の者どもに、「此麓なる女の日毎に峯に登りて、卒都婆見るを怪しさに問へば、云々なん云へば、明日感して走らせんとて、卒都婆に血を塗りつるなり。さぞ崩るらんものやなど云ひ笑ふを、里の者ども聞き侍りて、迂愚なる事の例しに引き笑ひけり。斯くて又の日、女登りて見るに、卒都婆に血の大らかに付きたりければ、女打見るまゝに色を違へて倒れ轉び、走り歸りて叫び云ふやう、「此里の人々、疾く逃げ退きて命を生きよ。此山は只今崩れ

て、深き海に成りなんとす」と、遍く告げまはして、家に行きて、子孫どもに家の具足どもおほせ持たせて、己れも持ちて、手感して里移りしぬ。是れを見て血付けし男ども、手打ちて笑ひなどする程に、其事ともなく、私語めき喧騒り合ひたり。風の吹き來るか、雷の鳴るかと思ひ怪しむ程に、空もつゝ闇に成りて、あさましく恐ろしげにて、此山動き立ちにけり。是は如何に如何にと喧騒り合ひたる程に、唯だ崩れに崩れもて行けば、「女は誠しけるものを」など云ひて逃げ、逃げ得たる者も有れども、親の行方も知らず、子をも失ひ、家の物の具も知らずなどして、喚き叫び合ひたり。此女一人ぞ子孫を引き具して、家の物の具一つも失はずして、かねて逃げ退きて靜かに居たりける。斯くて此山皆崩れて、深き海と成りにければ、是を嘲り笑ひし者どもは、皆死にけり、あさましき事なりかし。

(十三) 成村強力の學士にあふ事

昔、成村と云ふ相撲有りけり。時に國々の相撲ども上り集まりて、相撲の節待ちける程、朱雀門に集まりて涼みけるが、其邊遊び行くに、大學の東門を過ぎて、南さまに行かんとしけるを、大學の衆ども、數多東の門に出で、涼みて立てりけるに、此相撲どもの過ぐるを通さじとて、「鳴り制せん、鳴り高し」と云ひて、立ち寒がりて通さよりければ、さすがにやこつなき所の衆どものする事なれば、破りてもえ通らぬと、長低らかなる衆の冠、上のきぬ、こと人よりは少し善ろしきが、中に勝れて出で立ちて、いたく制するが有りけるを、成村は見つめてけり。いざなく歸りなんとて、もとの朱雀門に歸りぬ。そこにて云ふ、「此大學の衆

憎き奴どもかな。何の心に、我等をば通さじとはするぞ。唯だ通らんと思ひつれども、さも有れ、今日は通らで、明日通らんと思ふなり。長低やかにて、中に勝れて「鳴り制せん」と云ひて、通さじと立ち塞がる男憎きやつなり。明日通らんにも、必ず今日のやうにせんずらん。何主、其男が尻鼻、血あゆばかり必ず蹴給へ」と云へば、さ云はるゝ相撲、脇をかきて、「己れが試てんには、如何にも生かじものを、懸議にてこそいかめ」と云ひけり。この尻蹴よと云はるゝ相撲は、覺え有る力こと人よりは勝れ、走り疾くなど有りけるを見て、成村も云ふなりけり。さて其日は、各家に歸りぬ。又の日に成りて、昨日参らざりし相撲などの數多召し集めて、人がちに成りて通らんと構ふるを、大學の衆も然や心得にけん、昨日よりは人多くなりて、懸しう「鳴る（〇りカ）制せん」と云ひ立てりけるに、此相撲ども、打群れて歩み懸りたり。昨日すぐれて制せし大學の衆、例の事なれば、勝れて大路を中に立ちて、過ぐさじと思ふ氣色したり。成村、尻蹴よと云ひつる相撲に、目をくはせければ、此相撲、人より長高く大きに、若く勇みたる男にて、括高やかに掻き上げて、さし進み歩み寄る。其れに續きて、この相撲も唯だ通りに通らんとするを、かの衆どもも通さじとする程に、尻蹴んとする相撲、斯く云ふ衆に走り懸かりて。蹴倒さんと足をいたくもたげたるを、此衆は目を掛け、背を撫めてちがひければ、蹴外して足の高くあがりて、仰様になるやうにしたる足を、大學の衆取りてけり。其相撲を、細き杖などを人の持ちたる様に引き下けて、片方の相撲も走り掛かりければ、其れを見て、片方の相撲逃げゝるを追ひかけて、其手にさげたる相撲をば投げゝれば、振りぬきて、二三段ばかり投げら



れて倒れ伏しにけり。身碎けて、起き上るべくも無く成る。其れをば知らず、成村がある方さまへ走り騒かりければ、成村も目を掛けて逃げゝり。心も置かず追ひければ、朱雀門の方さまに走りて、脇の門より走り入るを、やがてつめて走り掛かりければ、捕へられぬと思ひて、式部省の築地越えけるを、引き留めんとて手をさし遣りたりけるに、早く越えければ、こと所をばえ捕へず、片足少し下がりにたりける踵を、沓加へながら捕へたりければ、沓の踵に足の皮を取り加へて、沓の踵を刀にて切りたるやうに、引き切りて取りてけり。成村、築地の内に立ちて足を見ければ、血走りて止まるべくも無し。沓の踵切れて失せにけり。我を追ひける大學の衆、あさましく力有る者にてぞ有りけるなめり。尻蹴つる相撲をも、人杖につかひて投げ砕くめり。世の中廣ければ、斯かる者の有ること恐ろしき事なれ。投げられたる相撲は、死に入りたりければ、物に昇き入れて、荷ひて持て行きけり。此の成村、方の將に「云々の事なん候ひつる。かの大學の衆は、いみじき相撲に候ふめり。成村と申すとも、合ふべき心地仕らず」と語りければ、方の將は官旨申し下して、「式部の丞なりとも、其道に堪へたらんはと云ふ事有れば、況して大學の衆は何條ことか有らん」とて、いみじう尋ね求められけれども、其人とも聞えずして止みにけり。

(十四) 楠木に佛現ずる事

昔延喜の御時、五條の天神の邊に、大きな楠の木の実ならぬ有り。其木の上に、佛現れておはします。京中の人擧りてまゐりけり。馬車も立て敢へず、人もせき敢へず拜み喧騒りけり。斯くする程に、五六日あるに、右大臣殿心得ず思し給ひける間、誠の佛の、世の末に出で給ふべきにあらず、我れ行きて試みんと思して、晝の装束美はしくして、櫛櫛の車に乗りて、御前多く具して集まり集ひたる者ども退けさせて、車かけ外して、櫛を立て、木末を、目もたゝかず、他見もせずして凝視て、一時ばかりおはするに、此佛、暫しこそ花も降らせ、光をも放ち給ひけれ。餘りに餘りに凝視れて、し佗て、大きな屎鴉の羽折れたる、土に落ちて惑ひふためくを、童部ども寄りて打殺してけり。大臣は、さればこそとて歸り給ひぬ。さて時の人、此大臣を、いみじく賢き人にておはしますとぞ評判りける。

宇治拾遺物語 卷第三

(一) 大太郎ぬす人の事

昔、大太郎とて、いみじき盗人の大將軍有りけり。其れが京へ上りて、物取りぬべき所有らば、入りて物取らんと思ひて、窺がひ歩きける程に、周囲も荒れ、門なども片片は倒れたるを、横様に寄せ掛けたる所のあたけなるに、男と云ふものは一人も見えずして、女の限りにて、張物多く取り散らして有るに合はせて、八丈賣る者など數多呼び入れて、絹多く取り出でて、撰り換へさせつゝ物どもを買へば、物多かりける所かなと思ひて、立ちとまりて見入るれば、折しも風の、南の簾を吹き上げたるに、簾の内に、何の入りたりとは見えねども、皮子のいと高く打積まれたる前に、蓋開きて、絹なめりと見ゆる物取り散らして有り。是れを見て、嬉しきわざかな。天道の我に物を給ふなりけりと思ひて、走り歸りて、八丈一疋、人に借りては來て賣るとて、近く寄りて見れば、内にも外にも男と云ふものは一人も無し。唯だ女どもの限りして、見れば皮子も多かり。物は見えねど、堆高く蓋掩はれ、絹なども殊の外にあり。布打散らしなどして、いみじく物多く有りげなる所かなと見ゆ。高く云ひて八丈をば賣らで、持ちて歸りて主に取らせて、同類どもに、「斯かる所こそ有れ」と言ひ廻はして、其の夜來て門に入らんとするに、沸り湯を面に懸くるやうに覺えて、ふつとえ入らず。「是は如何なる事ぞ」とて、集まりて入らんとすれど、せめて物の恐ろしかりければ、



「有るやう有らん、今宵は入らじ」とて歸りにけり。翌朝て、「さても如何なりつる事ぞ」とて、同類など具して、賣物など持たせて来て見るに、如何にも煩はしき事無し。物多く有るを、女どもの限りして、取出で取納めすれば、事にも有らずと、返すく思ひみふせて、又暮るれば、能くくしたゝめて入らんとするに、猶恐ろしく覺えて、え入らず、「わぬし先づ入れ先づ入れ」と云ひたちて、今宵も猶入らず成りぬ。又翌朝も同じやうに見ゆるに、猶氣色異なる物も見えず、唯だ我が臆病にて覺ゆるなめりとて、又其夜能くしたためて行き向ひて立てるに、日比よりも猶物恐ろしかりければ、「こは如何なる事ぞ」と云ひて、歸りて云ふやうは、「事を起したらん人こそは先づ入らめ。先づ大太郎が入るべき」と云ひければ、「さも云はれたり」とて、身を無きにして入りぬ。其れに取付きて、かたへも入りぬ。入りたれども、猶物の恐ろしければ、やはり歩み寄りて見れば、荒らなる屋の内に火燈したり。母屋の際に掛けたる簾をば下ろして、簾の外に火をば燈したり。誠に皮子多かり。かの簾の中の恐ろしく覺ゆるに合はせて、簾の内に矢を爪よる音のするが、其矢の来て、身に立つ心地して、云ふばかりなく恐ろしく覺えて、歸り出づるも、背をそらしたるやうに覺えて、構へて出でえて、汗を拭ひて、「是は如何なる事ぞ、淺ましく恐ろしかりつる爪よりの音かな」と、云ひ合はせて歸りぬ。其のつとめて、其家の傍に、大太郎が知りたりけることの有りける家に行きたれば、見付けていみじく響應して、「いつ上り給へるぞ、覺東なく侍りつる」など云へば、「只今參うで來つるまゝに參うで來たるなり」と云へば、「土器參らせん」とて、酒わかして、黒き土器の大なるを盃にして、土

器取りて大太郎にさして、家主入飲みて土器渡しつ。大太郎取りて、酒を一土器受けて持ちながら、「此の北には誰が居給へるぞ」と云へば、驚きたる氣色にて、「まだ知らぬか、大矢の佐たけのぶの、此比上りて居られたるなり」と云ふに、さは入りたらしかば、皆數を盡して射殺されなましと思ひけるに、物も覺えず臆して、其の受けたる酒を、家主人に頭より打かけて、立ち走りけるものは、うつぶしに倒れにけり。家主人あさましと思ひて、「是は如何に如何に」と云ひけれど、顧みだにもせずして逃げていにけり。大太郎がとられて、武者の城の恐ろしき由を語りけるなり。

(二) 藤大納言忠家物言女放尾〔〇尻力〕事

今は昔、藤大納言忠家と云ひける人、未だ殿上人におはしける時、美々しき色好みなりける女房と物云ひて、夜更くる程に、月は晝よりも明かりけるに堪へかねて、御簾を打かづきて、長押の上に上ぼりて、扇をかきてひき寄せられたる程に、髪を振り懸けて、「あなあさまし」と云ひて、くるめきける程に、いと高くなるらしてけり。女房は云ふにも堪へず、くだくとして寄り伏しにけり。此大納言、「心憂き事にも逢ひぬるものかな。世に有りても何にかはせん。出家せん」とて、御簾の裾を少し掻き上げて、拔足をして、疑ひなく出家せんと思ひて、二間ばかりは行く程に、抑その女房過ちせんからに、出家すべきやうや有ると思ふ心また付きて、直だくと走り出でられにけり。女房は如何がなりけん知らずとか。

(三) 小式部内侍定頼卿の經にめでたる事

今は昔、小式部内侍に、定頼中納言物云ひ渡りけり。其れにまた、時の關白通よひ給ひけり。局に入りて臥し給ひたりけるを知らざりけるにや、中納言寄り来て敲きけるを、局の人斯くとや云ひたりけん、沓をはきて行きけるが、少し歩みのきて、經をはたと打あげて讀みたりけり。二聲ばかりまでは、小式部内侍、きと耳を立つるやうにしければ、此の入りて臥し給へる人、怪しと思しける程に、少し聲遠うなるやうにて、四聲五聲ばかり、行きもやらで讀みたりける時、「う」と云ひて、うしろさまにこそ伏し反りたれ。此の入り臥し給へる人の「さばかり堪へ難う、恥かしかりし事こそ無かりしか」と後にのたまひけるとかや。

(四) 山伏舟祈返事

是れも今は昔、越前の國甲樂城の渡と云ふ所に、渡りせんとして、ものども、集まりたるに、山伏有り、けいたる房と云ふ僧なりけり。熊野、御嶽は云ふに及ばず、白山、伯耆の大山、出雲の鱒淵、大方修行し残したる所無かりけり。其れに、此の甲樂城の渡に行きて渡らんとするに、渡りせんとする者雲霞の如し。各物を取りて渡す。此のけいたる房「渡せ」と云ふに、渡守聞きも入れて漕ぎ出づ。其時に此山伏、「如何に、斯くは無下には有るぞ」と云へども、大方耳にも聞き入れずして漕ぎ出だす。其時にけいたる房、齒を喰ひ合せて、念珠を揉みちぎる。この渡守見かへりて、迂愚の事と思ひたる氣色にて、三四町ばかり行くを、けいたる房見遣りて、足を砂子に脛の半ばかり踏み入れて、目も赤く睨みなして、數珠を砕けぬと揉みちぎりて、「召し返せ召し返せ」と叫ぶ。猶行き過ぐる時に、けいたる房、袈裟と念珠とを取り合はせて、汀近く歩

み寄りて護す「召し返せ。召し返へさずば、長く三寶に別れ奉らん」と叫びて、この袈裟を海に投げ入れんとす。其れを見て、此集ひ居たる者ども、色を失ひて立てり。斯く言ふ程に、風も吹かぬに、此の行く舟の此方へ寄り來。其れを見てけいたる房、「寄りめるは寄りめるは、早う率ておはせ率ておはせ」と、すはなちをして見る者、色を違へたり。斯く云ふ程に、一町がうちに寄り來たり。其時けいたる房「さて今は打覆へせ打覆せ」と叫ぶ。其時に集ひて見る者ども、一聲に「むさうの申しやうかな。ゆゑしき罪にも候ふ。さておはしませおはしませ」と云ふ時、けいたる房今少し氣色變りて、「はや打覆へし給へ」と叫ぶ時に、この渡船に二十餘人の渡る者、つぶりと投げ覆へしぬ。其時けいたる房、汗をおし拭ひて、「あな、いたの奴ばらや、まだ知らぬか」と云ひて立ち歸りにけり。世の末なれども、三寶おはしませしけりとなん。

(五) 鳥羽僧正與三國俊一戲事

是れも今は昔、法輪院大僧正覺猷と云ふ人おはしけり。其甥に陸奥前司國俊僧正の許へ行き、一参りてこそ候へ」と云はせければ、「只今見参らすべし。そなたに暫しおはせ」と有りければ、待ち居たるに、二時ばかりまで出で逢はねば、生腹立たしう覺えて、出でなんと思ひて、供に具したる雜色を呼びければ、出で來たるに、「沓持て來」と云ひければ、持て來たるを履きて、「出でなん」と云ふに、此の雜色が云ふやう、「僧正の御房の陸奥殿に申したれば、疾う乘れと有るぞ。其車率て來」とて、小御門より出でんと仰せ事候ひつれば、やうぞ候ふらんとて、牛飼乗せ奉りて候へば、「待たせ給へと申せ。時の程そ有らんずる。やがて歸り

來んずるぞ」とて、早う奉りて出でさせ給ひ候ひつるに、今は斯うて一時には過ぎ候ひぬらん」と云へば、「吾
雑色は不覺の奴かな。「御車を、斯く召しの候ふは」と、我に云ひてこそ食し申さめ。不覺なり」と云へば、
「打さし退きたる人にもおはしませず、やがて御尻切奉りて、「きとく能く申したるぞ」と仰せ事候へば、
力及ばず候はざりつる」と云ひければ、陸奥前司歸り上りて、如何にせんと思ひ廻すに、僧正は定まりたる
事にて、浴槽に薬を細々と切りて、一はた入れて、其れが上に筵を敷きて、ありき廻りては、さうなく湯殿
へ行きて、裸になりて、「えさいかさいとりふすま」と云ひて、浴槽にさくと仰様に臥す事をぞし給ひける。
陸奥前司、より筵を引き上げて見れば、誠に薬を細々と切り入れたり。其れを湯殿の垂布を解きおろして、
此の薬を皆取り入れて、能く包みて、其の湯舟に湯桶を下に取り入れて、其れが上に圍碁盤を裏返して置き
て、筵を引き掩ひて、然り氣なくて、垂布に包みたる薬をば、大門の脇に隠し置きて待ち居たる程に、二時
餘り有りて僧正小門より歸る音しければ、違ひて大門へ出で、歸りたる車呼び寄せて、車の尻に此の包みた
る薬を入れて、家へ早らかに遣りて下りて、「此薬を牛のあちこち歩き困じたるに食はせよ」とて牛飼
に取らせつ。僧正は例の事なれば、衣脱ぐ程も無く、例の湯殿へ入りて、「えさいかさいとりふすま」と云ひ
て、浴槽へ躍り入りて、仰様にゆくりもなく臥したるに、碁盤の足のいかりさしあがりたるに、尻骨を荒う齒
きて、年高う成りたる人の死に入りて、さし反りて臥したりけるが、其後音なかりければ、近う仕ふ僧寄りて
見れば、目を上に見つけて、死に入りて寝たり。「是は如何に」と云へど答もせず。寄りて顔に水吹きなど

して、とばかり有りてぞ息の下におろく云はれける。此の戯れ、いとはしたなかりけるにや。

(六) 繪佛師良秀家の焼くるを見て悦ぶ事

是も今は昔、繪佛師良秀と云ふ者有りけり。家の隣より火出で來て、風おしおほひて責めければ、逃げ出で
て大路へ出でにけり。人の書かする佛もおはしけり。また衣、絹、妻子なども、さながら内に有りけり。其
れも知らず、唯だ逃げ出でたるをことにして、向ひのつらに立てり。見れば、既に我が家に移りて、烟炎
くゆりけるまで 大方向ひのつらに立ちて眺めければ、あさましき事とて、人ども來訪ひけれど騒がず。「如
何に」と、人云ひければ、向ひに立ちて家の焼くるを見て、打鎖きて時々笑ひけり。「哀れ、しつる所得か
な。年比は悪ろく書きける物かな」と云ふ。時に訪ひに來たる者ども、「こは如何に、斯くては立ち給へる
ぞ。あさましきことかな。物の憑き給へるか」と云ひければ、「何條物の憑くべきぞ。年比不動尊の火焰を
悪しく書きけるなり。今見れば、斯うこそ燃えけれと心得つるなり。是れこそ所得よ。此道を立て、世に有
らんには、佛だに善く書き奉らば、百千の家も出できなん。吾黨たちこそさせる能もおはさねば、物をも惜
しみ給へ」と云ひて、あざ笑ひてこそ立てりけれ。其後にや、良秀がよちり不動とて、今に人々めであへり。

(七) 虎の鰐をとりたる事

是も今は昔、筑紫の人、商しに新羅に渡りけるが、商果て、歸り路に、山の根に添ひて、舟に水汲み入れ
んとて、水の流れ出でたる所に舟を留めて水を汲む。其程舟に乗りたる者、舷に居て俯伏して海を見れば、



山の影映りたり。高き岸の三四十丈ばかり餘りたる上に、虎蹲りて物を伺ふ。其影水に映りたり。其時に人々に告げて、水波む者を急ぎ呼び乗せて、手毎に櫓をおして、急ぎて舟を出だす。其の時に、虎躍り下りて舟に乗るに、舟は疾く出づ。虎は落ち来る程の有りければ、今一丈ばかりを、え躍り着か海に落ち入りぬ。舟を漕ぎて急ぎて行くまゝに、此の虎に目を懸けて見る。暫しばかり有りて、虎海より出で来ぬ。遊ぎて陸さまに上りて、汀に平なる石の上に乗るを見れば、左の前足を、膝より噛み食ひきられて血あゆ。鰐に喰ひ切られたるなりけりと見る程に、其の切れたる所を、水に浸してひらがりるを、如何にするにかと見る程に、沖の方より、鰐、虎の方をさして来ると見る程に、虎右の前足をもつて、鰐の頭に爪を打ち立て、陸さまに投げ上ぐれば、一丈ばかり濱に投げ上げられぬ。仰顔になりて、ふためく。鰐の下を躍り懸りて食ひて、二度三度ばかり打振りて、萎々となして、肩に打懸けて、手を立てたるやうなる岩の五六丈有るを、三つの足ももちて、下り坂を走るが如く登りて行けば、船の内なる者ども、是れがしわざを見るに、半は死に入りぬ。舟に飛び懸かりたらましかば、いみじき劔刀を抜きて合ふとも、かばかり力強く早からんには、何わざをすべきと思ふに、肝心失せて船漕ぐそらも無くてなん、筑紫には歸りけるとかや。

(八) 樵夫歌の事

今は昔、樵夫の山守に斧を取られて、わびし心うしと思ひて、頬杖打衝きて居りける、山守見て「さるべき事を申せ、取らせん」と云ひければ、

悪きだに無きはわりなき世の中によきを取られて我れ如何にせん
と詠みければ、山守返しせんと思ひて、こゝくと呻吟うめきけれどえせざりけり。さて斧返きりかへし取らせてければ、
嬉しと思ひけりとぞ。人は唯だ、歌をかまへて詠むべしと見えたり。

(九) 伯母の事

今は昔、多氣たけの大夫と云ふ者の、常陸のほより上りて愁訴うれする頃、むかひに、越前守と云ふ人の許に經誦きやうしけり。
此の越前守は、伯母とて世にめでたき人「人一本無シ」、歌詠みの祖うらなり。妻は伊勢の大輔、姫君達あまた
有るべし。多氣たけの大夫徒然つれづれに覺ゆれば、聽聞きこに参りたりけるに、御簾みすだを風の吹き上げたるに、並てならず美
しき人の、紅の一重ひとへがさね著たるを見るより、此人を妻にせばやと、いりもみ思ひければ、其家の上童うまわらわを語らひ
て問ひ聞けば、「大姫御前の紅は奉りたる」と語りければ、其れに語らひ付きて、「我に盜ぬすませよ」と云ふに、
「思ひ懸かげずえせじ」と云ひければ、「さらば、其の乳母めのとを知らせよ」と云ひければ、「其れはさも申してん」
とて知らせてけり。さていみじく語らひて、金百兩取らせなどして、「此姫君を盜ぬすませよ」と責め云ひければ、
さるべき契ちぎりにや有りけん、ぬすませてけり。やがて乳母めのとうち具して、常陸へ急ぎ下だりにけり。あとに
泣き悲しめどかひもなし。程經ほどて乳母めのと音づれたり。あさましく心憂しと思へども、いふがひなき事なれば、
時々うち音づれて過ぎけり。伯の母、常陸へ斯く云ひ遣り給ふ。

匂ひきや都の花は東路にこちのかへしの風の告げしは

かへし、姉、

吹き返すこちの返しは身に沁みき都の花のしるべと思ふに

年月へだたりて、伯ちちの「一本ニヨル」母常陸守の妻にて下りけるに、姉は亡せにけり。女二人有りけるが、
斯くと聞きて参りたりけり。田舎人とも見え、いみじくしめやかに、恥かしげによりけり。常陸守の上
を、「昔の人に似させ給ひたりける」とて、いみじく泣き合ひたりけり。四年が間名聞なまきこにも思ひたらず、用
事なども云はざりけり。任果て、上る折に、常陸守「無下むげなりけるものもかな。斯くなん上ると云ひに遣
れ」と、男に云はれて、伯の母上る由云ひに遣りたりければ「承りぬ。参り候はん」とて、明後日あした上らんと
ての日参りたりけり。えも云はぬ馬、一つを賣にする程の馬十疋づ、二人して、又皮子負かわこせたる馬ども百
疋づ、二人して奉りたり。何とも思ひたらず、かばかりの事したりとも思はず、うち奉りて歸りにけり。常
陸守のありけり「因ゆゑ」、常陸四年が間の物は何ならず。その皮子の物どもしてこそ、萬づの功德くどくも何もし
給ひけれ。ゆゑしかりけるものどもの、心の大きき廣さかな」と語られけるとぞ。この伊勢の大輔の子孫
は、めでたき幸あきほ人多く出で來給ひたるに、大姫君の斯く田舎人に成られたりける哀れに心憂くこそ。

(十) 同人佛事の事

今は昔、伯の母佛ほとけ供養くやうしけり。永縁えん僧正しやうを請まねじて、さまざまの物共を奉る中に、紫の薄うす様に包みたる物有
り。あけて見れば、

朽ちにける長柄の橋の橋柱法の爲めにも渡しつるかな

長柄の橋のきれなりけり。又の日また翌朝、若狭阿闍梨らく「覺一本」縁と云ふ人、歌詠みなるが來たり。哀れ、此ことを聞きたるよと僧正思すに、み懐より名簿を引き出で奉る。「此の橋のきれ給はらん」と申す。僧正「かばかりの希有の物は、如何でか」とて、何しにか取らせ給はん、「口惜し」とて歸りにけり。ナきぐしく哀れなる事どもなり。

(十一) 藤六ノ事

今は昔、藤六と云ふ歌詠み有りけり。下家の家に入りて、人も無かりける折を見付けて入りにけり。鍋にある物を抄ひける程に、家主人の女水を汲みて、大路の方より來て見れば、斯く抄ひ食へば、「如何に、斯く人も無き所に入りて、斯くはする物をばまゐるぞ。あなうたてや、藤六にこそいましけれ。さらば歌詠み給へ」と云ひければ、

昔より阿彌陀佛の誓にて煮ゆる物をばすくふとぞしる

とこそ詠みたりけれ。

(十二) 多田新發郎等ノ事

是れも今は昔、多田満中の許に、猛く悪しき郎等有りけり。物の命を殺すをもて業とす。野に出で山に入りて、鹿を狩り鳥を取りて、僅の善根する事無し。或時出で、狩する間、馬を馳せて鹿追ふ。矢をばげ弓を

引きて、鹿にしたがひて、走らせて行く道に寺有りけり。其前を過ぐる程に、きと見遣りたれば、内に地藏立ち給へり。左の手を以ちて弓を取り、右の手して笠を脱ぎて、いさゝか歸依の心を出だして馳せ過ぎにけり。其後、いくばくの年をへずして、病づきて日比重く苦しみ煩ひて命絶えぬ。冥途に行き向ひて、炎魔の應に召されぬ。見れば多くの罪人、罪の輕重に隨ひて打ちせため、罪せらるゝ事いといみじ。我が一生の罪業を思ひ續くるに、涙落ちてせんかたなし。斯かる程に、一人の僧出で來たりてのたまはく、「汝を助けんと思ふなり。早く古郷に歸りて罪を懺悔すべし」とのたまふ。僧に問ひ奉りて云はく、「是れは誰の人の斯くは仰せらるるぞ」と、僧答へてのたまはく、「我は、汝鹿を追うて寺の前を過ぎしに、寺の中において、汝に見えし地藏菩薩なり。汝罪業深重なりと云へども、僅か我れに歸依の心を起し、業によりて、我れ今汝を助けんとするなり」とのたまふと思ひて、甦りて後は、殺生を長くたちて、地藏菩薩に仕うまつりけり。

(十三) 因幡國別當地藏作りさしたる事

是も今は昔、因幡の高草の郡、さかの里に伽藍有り。國隆寺と名づく。此國の前國司ちかなか造れるなり。そこに年老いたる者、語り傳へて曰く、「此寺に別當有りき。家に佛師を呼びて、地藏を造らす程に、別當が妻こと男に語らはれて、跡を暗うして失せぬ。別當心を惑はして、佛の事をも佛師をも知らで、里村に手を分ちて尋ね求むる間、七八日を経ぬ。佛師ども檀那を失ひて、空を仰ぎて手を徒らにして居たり。其寺の專當法師これを見て、善心を發して、食物を求めて佛師に食はせて、僅に地藏の木作ばかりを仕奉りて、

彩色瓔珞をばえせず。其後この専當法師、病づきて命終へぬ。妻子悲しみ泣きて、棺に入れながら、捨てずして置きて、猶是れを見るに、死にて六日と云ふ日の末の時ばかりに、俄に此棺はたらく。見る人おち恐れて逃げ去りぬ。妻泣き悲しみて、あけて見れば、法師甦りて、水を口に入れ、やうく程經て冥途の物語す。「大きなる鬼二人來りて、我を捕へて、追ひ立て、廣き野を行くに、白き衣著たる僧出で來て、「鬼ども、此法師疾くゆるせ。我は地藏菩薩なり。因幡の國の國隆寺にて我を造りし僧なり。佛師等、食物無くて日比經しに、此法師信心をいたして、食物を求めて、佛師等を供養して、我が像を造らしめたり。此恩忘れ難し、必ず許すべきものなり」とのたまふ程に、鬼ども許し終りぬ。懇ろに道教へてかへしつと見て、生き返りたるなり」と云ふ。其後この地藏菩薩を、妻子ども彩色し供養し奉りて、長く歸依し奉りける、今此寺におはします。

(十四) 伏見修理大夫俊綱ノ事

是も今は昔、伏見修理大夫は宇治殿の御子にておはす。餘り公達多くおはしければ、様をかへて、橋俊遠と云ふ人の子になし申して、藏人になして、十五にて尾張守になし給ひてけり。其れに尾張に下だりて國行ひけるに、其頃熱田ノ神、いちはやくおはしまして、自ら笠をもぬがず、馬の鼻を向け無禮をいたす者をば、やがて立所に罪せさせおはしましたければ、大宮司の威勢國司にも勝りて、國の者どもおち畏れたりけり。其れに此國司下だりて、國の沙汰ども有るに、大宮司我はと思ひて居たるを、國司咎めて、「如何に大宮司な



らんからに、國にはらまれては、見參にも參らぬぞ」と云ふに、「先きくさる事無し」とて居たりければ、國司むつがりて、「國司も國司にこそよれ。我等に逢ひて斯うは云ふぞ」とて、いやみ思ひて、「知らん所ども點ぜよ」など云ふ時に、人有りて大宮司に云ふ、「誠に國司と申すに斯かる人おはす、見參に參らせ給へ」と云ひければ、さらばと云ひて、衣冠にきぬ出だして、供の者ども三十人ばかり具して、國司の許向ひぬ。國司出で逢ひ對面して、人どもを呼びて、「きやつ確に召し籠めて勘當せよ。神官と云はんからに、國中にはらまれて、如何に奇怪をば致す」とて、召し立てゆふ程に、籠めて勘當す。其時大宮司、「心慢き事に候ふ。御神はおはしまさぬか。下臈の無禮を致すだに立所に罰せさせおはしますに、大宮司を斯くせさせ御覽するは」と泣くくどきて、微睡みたる夢に、熱田の仰せらるるやう、「此事におきては、我が力及ばぬなり。其故は、僧有りき。法華經を、千部讀みて、家に法樂せんとせしに、百餘部は讀み奉りたりき。國の者ども尊がりて、此僧に歸依し合ひたりしを、汝むつかしがりて、其僧を追ひ拂ひてき。其れに、此僧悪心をおこして、我れ此國の守に成りて、この答をせんとて生れ來て、今國司に成りてければ、力およばずその先生の僧を俊綱と云ひしに、此國司も俊綱と云ふなり」と、夢に仰せ有りけり。人の悪心はよしなき事なりと。

(十五) 長門前司ノ女葬送時歸本處事

今は昔、長門前司と云ひける人の女二人有りけるが、姉は人の妻にて有りける。妹はいと若くて宮仕ひぞしけるが、後には家に居たりけり。わざとありつきたる男と無くて、唯だ時々通ふ人などぞ有りける。高辻室町わたりにぞ家は有りける。父母も無く成りて、奥の方には姉ぞ居たりける。南の表の西の方なる妻戸口にぞ、常に人に逢ひ、物など云ふ所なりける。二十七八ばかりなりける年、いみじく煩ひて亡せにけり。奥は所狭しとて、其妻戸口にぞやがて臥したりける。さて有るべき事ならねば、姉などし立て、鳥部野へ奉ていぬ。さて例の作法に、とかくせんとして、車より取り下ろすに、櫃々として、蓋いさゝか開きたり。怪しくて開けて見るに、如何にも如何にもつゆ物無かりけり。道などにて落ちなどすべき事にも有らぬに、如何なる事にかと心得ずあさまし。すべき方も無くて、「然りとて有らんやは」とて、人々走り歸りて、道に自らやと見れども、有るべきならねば家へ歸りぬ。若しやと見れば、此の妻戸口に、本のやうにて打臥したり。いとあさましくも恐ろしくて、親しき人々集まりて、「如何がすべき」と云ひ合はせ騒ぐ程に、夜もいたく更けぬれば、「如何がせん」とて、夜明けて又棺に入れて、此度は能く誠にしたためて、夜さり如何にもなと思ひて有る程に、夕つ方見る程に、此棺の蓋細目に開きたりけり。いみじく恐ろしくすぢなけれど、親しき人々、「近くて能く見ん」とて寄りて見れば、棺より出で、又妻戸口に臥したり。「いとあさましきわざかな」とて、又かき入れんとて萬づにすれど、更に更にゆるがず。土より生ひたる大木などを、引揺さんやうなれば、すべき方無くて、唯だ此處に有らんとてかと思ひて、おとなしき人寄りて云ふ。「唯だ此處に有らんと思すか、さらばやがて此處にも置き奉らん。斯くてはいと見苦しかりなん」とて、妻戸口の板敷を毀ちて、

其處に下ろさんとしければ、いと軽らかに下されたれば、すべ無くて、其妻戸口一間を板敷など取り退け毀ちて、其處に埋みて、高々と塚にてあり。家の人々も、さてあひたまひ「たまひイ本の因」てあらん、物むつかしく覺えて、皆外へ渡りにけり。さて年月経にければ、寢殿も皆毀れ失せにけり。如何なる事にか、此の塚の傍ら近くは、下衆なども居つかず。むつかしき事有り云ひ傳へて、大方人も居付かねば、そこには唯だ其塚一つぞ有る。高辻よりは北、室町よりは西、高辻表に六七間が程は小家も無くて、其塚一つぞ高々として有りける。如何にしたる事にか、塚の上に神の社をぞ、一齋すゑて有なる。此頃も今にありとなん。

(十六) 雀報恩事

今は昔、春つ方日うらゝかなりけるに、六十ばかりの女の有りけるが、蟲打取りて居たりけるに、庭に雀のしありきけるを、童部石を取りて打ちたれば、當りて腰を打折られにけり。羽をふためかして惑ふ程に、鳥のかけり歩きければ、「あな心う、鳥取りてん」とて此の女急ぎ取りて、息しかけなどして物食はす。小桶に入れて夜はをさむ。明くれば米食はせ、銅、薬にこそけて食はせなどすれば、子ども孫など、「哀れ女乃自は老いて、雀飼る」とて憎み笑ふ。斯くて月「日イ本」比よくつた「二字イ本く因」へば、やう／＼躍りありく。雀の心にも、斯く養ひ生けたるを、いみじく嬉しく／＼と思ひけり。倏忽に物へ往くとも、人に「此雀見よ。物食はせよ」など云ひ置きければ、子孫など、「あはれ、何で雀飼はる」とて憎み笑へ

ども、「さばれ、いとほしければ」とて、飼ふ程に、飛ぶ程に成りにけり。「今はよも鳥に取られじ」とて、外に出で、手に据ゑて、「飛びやする、見ん」とて、捧げたれば、ふらく／＼と飛び去ぬ。女「多くの月比日比、暮るればをさめ、明くれば物食はせならひて、哀れや飛び去ぬるよ。又來やすると見ん」など、徒然に思ひて、云ひければ、人に笑はれけり。さて二十日ばかり有りて、此の女の居たる方に雀のいたく鳴く聲しければ、雀こそいたく鳴くなれ。有りし雀の來るにや有らんと思ひて、出で、見れば此雀なり。「哀れに忘れず來たるこそ哀れなれ」と云ふ程に、女の顔を打見て、口より露ばかりの物を落し置くやうにして飛び去ぬ。女「何にか有らん、雀の落して去ぬる物は」とて、寄りて見れば、瓢の種を唯だ一つ落して置きたり。「持て來たる、やうこそ有らめ」とて、取りて持ちたり。「あないみじ。雀の物得て實にし給ふ」とて、子ども笑へば、「さばれ植ゑて見ん」とて植ゑたれば、秋に成るまゝに、いみじく多く生ひ廣がりて、なべての瓢にも似ず、大きに多くなりたり。女悦び興じて、さと隣の人にも食はせ、取れども取れども盡きもせず多かり。笑ひし子孫も、是れを明暮食ひてあり。一里配りなどして、果てには、誠に勝れて大きな七つ入つは、杓にせんと思ひて、内に吊り付けて置きたり。さて月比經て、「今は善く成りぬらん」とて見れば、善く成りにけり。取り下して口開けんとするに、少し重し。怪しけれども切り開けて見れば、物一はた入りたり。何にか有るらん」とて、移して見れば、白米の入りたるなり。思ひ懸けずあさましと思ひて、大きなる物に皆を移したるに、同じやうに入りて有れば、「尋常事には有らざりけり。雀のしたるにこそ」と、あ

さまざま嬉しければ、物に入れて隠し置きて、残りの瓢どもを見れば、同じやうに入りて有り。是れを移し移しつかへば、せんかたなく多かり。さて誠に裕福なほき人にぞ成りにける。隣里の人も見あざみ、いみじき事に羨うらやみけり。この隣に有りける女の子どもの云ふやう、「同じ事なれど、人は斯くこそ有れ。はかばかしき事もえし出で給はぬ」など云はれて、隣の女、此女房の許に來たりて、「さてもさても、こは如何なりし事ぞ。雀のなどは仄聞けど、能くはえ知らぬは、もと有りけんまゝにの給へ」と言へば、「瓢の種を一つ落したりし、植ゑたりしより有る事なり」とて、細こまにも云はぬを、「猶有りのまゝに細かに宜へ」と切きに問へば、心狭こころく隠すべき事かと思ひて、「かうく腰折れたる雀の有りしを、飼かひ生なしたりしを嬉しと思ひけるにや、瓢の種を一つ持ちて來たりしを植ゑたれば、斯くなりたるなり」と云へば、「其の種只だ一つ給べ」と云へば、「其れに入りたる米などは參らせん。種は有るべき事にも有らず、更にえなん散すまじき」とて取らせねば、我も如何で、腰折れたらん雀見付けて飼はんと思ひて、目を立て、見れど、腰折れたる雀更に見えず。つとめて毎ごとに窺かひ見れば、背戸せとの方に米の散りたるを食ふとて、雀の躍り歩りくを、石を取りて、若しやとて打てば、數多の中に度々うてば、自まづら打當うちあてられてえ飛とばぬ有り。悦よろこびて寄りて、腰よく打折りて後に、取とりて物食はせ、薬くすりくはせなどして置きたり。一つが徳をだにこそ見れ。況いはして數多ならば、如何にたのもしからん。あの隣の女にはまさりて、子どもに譽められんと思ひて、籠かごの内に米まきて伺かひ居たれば、雀ども集りて食たひに來たれば、又打ちくしければ、三つ打ち折りぬ。今はかばかりにて有りなんと思ひて、腰折れ



たる雀三つばかり桶に取り入れて、銅こそげて食はせなどして、月比ふる程に皆よくなりたれば、喜びて外に取り出でたれば、ふらくと飛びて皆いぬ。いみじきわざしつと思ふ。雀は腰打折られて、斯く月比ぬめ置きたるを、よにねたしと思ひけり。さて十日ばかり有りて、此雀ども來たれば悦びて、先づ口に物や銜へたと見るに、瓢の種を一つづゝ皆落して去ぬ。さればよと嬉しくて、取りて三所に植えてけり。例よりもするく生ひ立ちて、いみじく大きに成りたり。是れはいと多くもならず、七つ八つぞなりたる。女笑みまけて見て、子どもに云ふやう、「はかくしき事し出でずと云ひしかど、我は隣の女にはまさりなん」と云へば、實にさも有らなんと思ひたり。是れは數の少なければ、米多く取らんとて、人にも食はせず我も食はず。子どもが云ふやう、「隣の女房は里隣の人にも食はせ、我も食ひなどこそせしか。これは況して三つが種なり。我も人にも食はせらるべきなり」と云へば、さし、「〇もノ誤力」と思ひて、近き隣の人にも食はせ、我も子どもにも諸共に食はせんとして、多勢にて食ふに、苦き事物にも似ず、黄蘗などのやうにて心地まどふ。食ひと食ひたる人々も、子どもも、我も、物を吐きて惑ふ程に、隣の人どもも、皆心地を損じて來集りて、「こは如何なる物を食はせつるぞ。あな恐ろし。つゆばかりけふん「一本り」の口によりたる者も、物を吐き惑ひ合ひて、死ぬべくこそ有れ」と腹立ちて、云ひせためんと思ひ來たれば、主の女をはじめて、子どもも皆物覺えず、吐き散らして伏せり合ひたり。いふがひなくて共に歸りぬ。二三日も過ぎぬれば、誰れくも心地直りたり。女思ふやう、皆米にならんとしける物を、急ぎて食ひたれば、斯く怪しかりける

なめりと思ひて、残りをは皆吊り付けて置きたり。さて月比もへて、「今はよく成りぬらん」とて、移し入れん料の桶ども具して部屋に入る。嬉しければ、齒も無き口して、耳のもとまで一人喚して、桶を寄せて移しければ、蚊、蜂、蟻、蛇など出で、目鼻とも云はず、一身に取り付きて螫せども、女いたさも覺えず、唯だ米のこぼれ懸かるぞと思ひて、「暫し待ち給へ雀よ。少しづゝ取らん」と云ふ。七つ八つの蟻より、そこらの毒蟲ども出で、子どもをも螫しくひ、女をば螫し殺してけり。雀の腰を打折られて、ねたと思ひて、萬づの蟲どもを語らひて入れたりけるなり。隣の雀は、もと腰折れて、鳥の命取りぬべかりしを養ひ生けたれば、嬉しと思ひけるなり。されば、物羨みは爲まじき事なり。

(十七) 小野篁廣才ノ事

今は昔、小野篁と云ふ人おはしけり、嵯峨の御門の御時に、内裏に札を立てたりけるに、無惡善と書きたりけり。御門、篁に「讀め」と仰せられたりければ、「讀みは讀み候らひなん。然れど畏れにて候へば、え申し候はじ」と奏しければ、「たゞ申せ」と度々仰せられければ、さが「〇感、嵯峨」なくて善からんと申し候ふぞ。されば君を呪ひ參らせて候ふなり」と申しければ、「汝放ちては、誰か書かん」と仰せられければ、「さればこそ、申し候はじとは申して候ひつれ」と申すに、御門「さて何も書きたらん物は、讀みてんや」と仰せられければ、「何にても讀み候ひなん」と申しければ、片假字のね文字を十二書かせて給ひて、「讀」と仰せられければ、「ねこのこの子ねこ、しゅのこの子しゅ」と讀みたりければ、帝微笑ませ給ひて、

事無くてやみにけり。

(十八) 平貞文本院侍從等ノ事

今は昔、兵衛佐平貞文をば、平中と云ふ。色好みにて、宮仕人はさらなり。人の女など忍びて見ぬは無かりけり。思ひ懸けて、文遣る程の人の離かぬは無かりけるに、本院侍從と云ふは、村上の御母后〔〇穩子〕の女房なり。世の色好みにて有りけるに、文遣るに、憎からず返事はしながら、逢ふ事は無かりけり。暫しこそ有らめ、遂にはさりとともと思ひて、物の哀れなる夕暮の空、又月の明き夜など、艶に人の目留めつべき程を計らひつゝ音づれければ、女も見知りて、情はかはしながら心をば許さず、つれなくて、はしたなからぬ程に、答へつゝ、人居交り、苦しがるまじき所にては、物云ひなどはしながら、めでたく通れつゝ心も許さぬを、男はさも知らで、斯くのみ過ぐる心もとなくて、常よりも繁く音づれて、「參らん」と云ひおこせたりけるに、例のはしたなからず答へたれば、四月の晦日比に、雨おどろしく降りて、物恐ろしげなるに、斯かる折に行きたらばこそ、哀とも思はめと思ひて出でぬ。道すがら堪へ難き雨を、これに往きたらんに、逢はで歸す事など〔因よもと〕、頼もしく思ひて局に行きたれば、人出で来て「上になれば、案内申さん」とて、端の方に入れて去ぬ。見れば、物の後に火灰かに點して、宿直物と思しき衣伏籠に掛けて、薫物しめたる匂ひなべてならず。いとど心憎くて、身に沁みていみじと思ふに、人歸りて、「只今も下りさせ給ふ」と云ふ、嬉しさ限りなし。即ち下りたり。「斯かる雨には如何に」など云へば、「是れに障らんは、無下に淺き事にこそ」

など云ひかはして、近く寄りて髪を探れば、氷を伸し懸けたらんやうに冷かにて、あたりめでたき事限りなし。何やかやとえも云はぬ事ども云ひかはして、疑ひなく思ふに、「あはれ遺戸を開けながら忘れて來にける。つとめて、「誰か開けながらは出でにけるぞ」など、煩しき事に成りなんす。閉て、歸らん、程も有るまじ」と云へば、さる事と思ひて、かばかり打解けにたれば、心安くて、衣を留めて參らせぬ。誠に遺戸閉つる音して、此方へ來らんと待つ程に、音もせで奥さまへ入りぬ。其れに、心もとなくあさましく、ちつし心も失せはて、這ひも入りぬべけれど、すべき方も無くて、遣りつる悔しさを思へど、かひ無ければ、泣く泣く曉近く出でぬ。家に行きて思ひ明して、すかし置きつる心憂さ、書き續けて遣りたれど、「何しにか障さん。歸らんとせしに召し、かば、後にも」など云ひて過ごしつ。大方間近き事は有るまじきなめり。今はさは、此人のわろく疎ましくらん事を見て、思ひ疎まばや。斯くのみ心盡しに思はで有りなんと思ひて隨身を呼びて、「其人の櫛洗のかは」〇三字は「誤カ」もていかん。奪ひ取りて我に見せよ」と云ひければ、日比添ひて伺ひて、辛うじて逃げたるを追ひて、奪ひ取りて主に取らせつ。平中悦びて、隠れに持て行きて見れば、香なる薄物の三重がさねなるに包みたり。香しき事類ひなし。引き解きてあくるに、香さ響へん方無し。見れば、沈、丁子を濃く煎じて入れたり。又薫物をば、多く轉がしつゝ數多人れたり。さるまゝに、香さ推し量るべし。見るにいとあさまし。ゆゝしげにし置きたらば、其れに見飽きて、心もや慰むとこそ思ひつれ。こは如何なる事ぞ。斯く心有る人やは有る。尋常人とも覺えぬ有様どもと、いとど死ぬば

かり思へどかひなし。我が見んとしもやは思ふべきにと、斯かる心ばせを見て後は、いよ／＼恍惚しく思ひけれど、遂に逢はで止みにけり。我が身ながらも、彼に世に恥ぢがましくねたく覺えしと、平中密に人に忍びて語りけるとぞ。

(十九) 一條攝政歌の事

今は昔、一條攝政「○伊尹」とは、東三條殿「○兼家」の兄におはします。御容貌よりはじめ、心用みなどめでたく、才ありさま誠しくおはしまし、また色めかしく、女をも多く御覽に興せさせ給ひけるが、少し輕々に覺えさせ給ひければ、御名を隠させ給ひて、大藏の丞西園と名告りて、上ならぬ女の許は御文も遣はしける。懸想せさせ給ひ、逢はせ給ひもしけるに、皆人さ心えて知り參らせたり。やんごとなく、よき人の姫君の許へおはしまし初めにけり。乳母、母などを語りて、父には知らせさせ給はぬ程に、聞き付けて、いみじく腹立ちて、母をせため爪はじきをして、いたくのたまひければ、「さる事無し」と争ひて、「まだしき由の文書きて給べ」と母君の佞び申したりければ、

人知れず身はいそげども年を経てなど越え難き逢阪の關

とて遣はしたりければ、父に見すれば、さては虚言なりけりと思ひて、返し、父のしける、

東路に行きかふ人に有らぬ身は何時かは越えん逢阪の關

と詠みけるを見て、微笑まれけんかしと御集にあり、をかしく。

(二十) 狐家に火つくる事

今は昔、甲斐國に館の侍なりける者の、夕暮に館を出で、家さまに行きける道に、狐の逢ひたりけるを追ひ懸けて、引目して射ければ、狐の腰に射當て、けり。狐射轉ばかされて、鳴き佞びて、腰を引きつ、草に入りけり。此の男引目「め一本」を取りて行く程に、此狐腰を引きて先に立ちて行くに、又射んとすれば失せにけり。家今四五町かと見えて行く程に、此狐二町ばかり先立ちて、火を銜へて走りければ、「火を銜へて走るは、如何なる事ぞ」とて馬をも走らせけれども、家の許に走り寄りて、人に成りて火を家に放けてけり。「人のつくるにこそ有りけれ」とて、矢を射けて走らせけれども、つけ果てければ、狐に成りて、草の中に走り入りて失せにけり。さて家焼けにけり。斯かる物も、忽ちに讎を報ふなり。是れを聞きて、かやうの物をば、構へて打すまじきなり。

宇治拾遺物語 卷第四

(一) 狐人につきてしとき食事

昔物氣煩ひし所に、物氣渡し程に、物氣者に憑きて云ふやう、「己れは、崇りの物氣にても侍らず、うか
れて罷り通りつる狐なり。塚屋に子どもなど侍るが、物を欲しがりつれば、かやうの所には、食物散ぼふ物
ぞかして參で來つるなり。桑ばらたべて罷りなん」と云へば、桑をせさせて、一折敷取らせたれば、少し食
ひて「あなうまや」と云ふ。此の女の、桑欲しがりければ、偽物憑きて斯く云ふと憎み合へり。「紙給は
りて是れ包みて罷りて、老女や子どもなどに食はせん」と云ひければ、紙を二枚引きちがへて包みたれば、
大きやかなるを腰についばさみたれば、胸にさしあがりてあり。斯くて「追ひ給へ、罷りなん」と、讒者に
云へば、「追へ」と云へば、立ち上がりて倒れ伏しぬ。暫しばかり有りて、やがて起き上がりたるに、
懐なる物さらに無し。失せにけるこそ不思議なれ。

(二) 佐渡國に有る金事

登能國には、鐵と云ふ物の、素鐵と云ふ程なるを取りて、守に取らす者六十人ぞ有なる。實房と云ふ守
の任に、鐵取六十人が長なりける者の、「佐渡國にこそ金の花咲きたれ」「一本る」所は有りしか」と、人
に云ひけるを、守傳へ聞きて、其男を守呼び取りて、物取らせなどしてすかし問ひければ、「佐渡國には、

誠に金の侍るなり。候ひし所を見置きて侍るなり」と云へば、「さらば往きて取りて來なんや」と云へば、
「遣はさば罷り候はん」と云ふ。「さらば舟を出だし立てん」と云ふに、「人をば給はり候はじ。唯だ小舟一
つと、食物少しとを給はり候ひて、罷り至りて、若しやと取りて參らせん」と云へば、唯だ是れが云ふに任
せて、人にも知らせず、小舟一つと食ふべき物少しとを取らせたりければ、其れを持て佐渡國へ渡りにけり。
一月ばかり有りて、打忘すれたる程に、此の男ふときて、守に目を見合せたりければ、守心えて人傳には取
らで、自ら出で合ひたりければ、袖うつしに、黒ばみたる裂帛に包みたる物を取らせたりければ、守重げに
引きさげて、懐に引き入れて歸り入りにけり。其後その金取の男は、何處ともなく失せにけり。萬づに尋ね
けれども、行方も知らず止みにけり。如何に思ひて失せたりと云ふ事を知らず。金の有る所を問ひ尋ねやす
ると、思ひけるにやとぞ疑ひける。其金八千兩ばかり有りけるとぞ語り傳へたる。斯かれば、佐渡國には金
有りける由と、能登國の者ども語りけるとぞ。

(三) 藥師寺別當事

今は昔、藥師寺の別當僧都と云ふ人有りけり。別當はしけれども、殊に寺の物もつかはで、極樂に生れん事
をなん願ひける。年老い病して、死ぬるきざみに成りて、念佛して消え入らんとす。無下に限りと見ゆる程
に、よろしうなりて、弟子を呼びて云ふやう、「見るやうに、念佛は他念なく申して死ぬれば、極樂の迎へ
いますらんと侍たるに、極樂の迎へは見えずして、火の車を寄す。「是は何ぞ、斯くは思はず。何の罪に



よりて、地獄の迎ひは來たるぞ」と云ひつれば、車につきたる鬼どもの云ふやう、「此寺の物を、一とせ五斗かりて、未だ返さねば、其罪によりて、此迎へはえたるなり」と云ひつれば、我が云ひつるは、「さばかりの罪にては、地獄に落つべきやう無し。其物を返してん」と云へば、「火の車を密せて待つなり。されば疾くく一石誦經にせよ」と云ひければ、弟子共手懸をして、云ふまゝに誦經にしつ。其鐘の聲のするをり、火の車返りぬ。さてとばかり有りて「火の車返りて、極樂の迎へ今なんおはする」とて、手をすりて悦びつゝ終りにけり。其坊は、薬師寺の大門の北の脇に有る坊なり。今に其のかた失せずして有り。さばかり程の物遺ひたるだに、火の車迎に來る。況して寺物を心のまゝに遺ひたる諸寺の別當の、地獄の迎ひこそ思ひやらるれ。

(四) 妹背島ノ事

土佐國幡多の郡に住む下衆有りけり。己が國には有らで、こと國に田を作りけるが、己が住む國に苗代をして、植うべき程になりければ、其苗を舟に入れて、植ゑん人どもに食はすべき物より始めて、鍋、釜、鋤、鎌、唐鋤など云ふ物に至るまで、家の具を舟に取り積み、十一二ばかりなる男子女子、二人の子を舟のまもりめに乗せ置きて、父母は植ゑんと云ふ者履はんとて、陸に倏忽に上りにけり。舟をば倏忽に思ひて、少し引き据ゑて、撃がずして置きたりけるに、此童部ども舟底に寝入りにけり。潮の満ちければ、舟は浮きたりけるを、はなつきに少し吹き出だされたりける程に、干潮に引かれて、遙に海へ出でにけり。沖にて

は、いと風吹き増りければ、帆を上げたるやうにて行く。其時に童部起きて見るに、かゝりたる方もなき沖に出でければ、泣き惑へどもすべき方も無し。何方とも知らず、唯だ吹かれて行きにけり。さる程に、父母は人々も雇ひ集めて、舟に乗らんとて来て見るに舟無し。暫しは風隠にさし隠したるかと思見る程に、呼び騒げども誰かは答へん。浦々求めけれども無かりければ、云ふがひなくて止みにけり。斯くて此の舟は、遙の南の沖に在りける島に吹き付けてけり。童部ども泣くく下りて、舟駛ぎて見れば、如何にも人無し。歸るべき方も覺えねば、島に下りて云ひけるやう、「今はすべきかた無し。さりとては命を捨つべきに有らず。此の食物の有らん限りこそ、少しづも食ひて生きたらめ。是れ盡きなば、如何にして命は有るべきぞ、いざ此苗の枯れぬさきに植ゑん」と云ひければ實にもとて、水の流れの有りける所の、田に作りぬべきを求め出だして、鋤鎌は有りければ、木を切りて庵などつくりける。なり物の木の折りに生りたる多かりければ、其れを取り食ひて、明し暮す程に、秋にも成りにけり。さるべきにや有りけん、作りたる田のよくて、此方に作りたるにも殊の外勝りたりければ、多く刈り置きなどして、さりとて有るべきならねば、夫婦に成りにけり。男子女子あまた生み續けて、又其れが夫婦に成りくしつゝ、大きな島なりければ、田島も多く作りて、此比は、その妹背が生み續けたりける人ども、島に餘るばかりに成りてぞあんなる。妹背島とて土佐國の南の沖に在るとぞ人語りし。

(五) 石橋下ノ蛇の事

此の近くの事なるべし、女有りけり。雲林院の菴〔〇下には菩提トアリ〕講に、大宮を上ほりに参りける程に、西院の邊近く成りて、石橋有りける。水の邊を、廿餘三十ばかりの女な〔〇房カ〕中ゆひて歩み行くが、石橋を踏み返して過ぎぬる跡に、踏み返されたる橋の下に、斑なる小蛇のきりくとして居たれば、石の下に蛇の有りけると云ふ程に、此の踏み返したる女の後に立ちて、ゆらくと此蛇の行けば、後なる女の見ると怪しくて、如何に思ひて行くにか有らん。踏み出だされたるを悪しと思ひて、其れが報答せんと思ふにや。是れがせんやう見んとて、後に立ちて行くに、此女時々見返りなどすれども、我が伴に蛇の有るとも知らぬげなり。又同じやうに行く人有れども、蛇の女に具して行くを見つけ云ふ人も無し。唯だ最初見付けたる女の目にのみ見えければ、是れがしなさんやう見んと思ひて、此女の後を離れず歩み行く程に、雲林院に参り着きぬ。寺の板敷に昇りて此女居ぬれば、此蛇も昇りて傍に蟠り伏したれど、是れを見つけて騒ぐ人無し。稀有のわざかなと、目を放たず見る程に、講はてぬれば、女立ち出づるに隨ひて、蛇も付きて出でぬ。此女、是れがしなさんやう見んとて、後に立ちて京さまに出でぬ。下さまに行きとまりて家有り。其家に入れば、蛇も具して入りぬ。是れぞ是れが家なりける。思ふに晝は姿も無きなめり、夜こそとかくする事も有らんずらめ。是れが夜の有様を見ばやと思ふに見るべきやうも無ければ、其家に歩み寄りて、「田舎より上る人の、行きとまるべき所も候はぬを、今宵ばかり宿させ給はなんや」と云へば、此蛇の付きたる女を家主人と思ふ

た、「此處に宿り給ふ人有り」と云へば、老いたる女出て来て、「誰れかの給ふぞ」と云へば、是れぞ家の主人なりけると思ひて、「今宵ばかり宿借り申すなり」と云ふ。「よく侍りなん入りておはせ」と云ふ。嬉しと思ひて入りて見れば、板敷の有るに昇りて此の女ありたり。蛇は板敷の下に、柱のもとに蟠りて有り。目を着けて見れば、此女を目守り上げて此蛇はゐたり。蛇付きたる女、「殿に有るやうは」など物語し居たり。宮仕する者なりと見る。斯かる程に日たゞ暮れに暮れて暗く成りぬれば、蛇の有様を見るべきやうも無く、此家主と覺ゆる女の云ふやう、「斯く宿させ給へるかはりに、葶やある、續みて奉らん。火を黙し給へ」と云へば、「嬉しくのたまひたり」とて、火黙しつ。葶取り出だして預けたれば、其れを續みつゝ見れば、此女臥しぬめり。今や寄らんずらんと見れども、近くは寄らず。此事、やがても告げばやと思へども、告げたらば、我が爲も悪しくや有らんと思ひて、物も云はで、しなさんやう見んとて、夜中の過ぐるまで目守りゐたれども、終に見ゆる方も無き程に、火消えぬれば此の女も寝ぬ。明けて後如何が有らんと思ひて、密ひ起きて見れば、此女よき程に寝起きて、とも斯くも無げにて、家主人と覺ゆる女に云ふやう、「今宵夢をこそ見つれ」と云へば、「如何に見給へるぞ」と問へば、「此寝たる枕上に、人の居ると思ひて見れば、腰より上は人にて下は蛇なる女、清げなるがゐて云ふやう、「己れは人を恨めしと思ひし程に、斯く蛇の身を受けて、石橋の下に多くの年を過ぐして、佗しと思ひ居たる程に、昨日己れが重の石を踏み返へし給ひしに助けられて、石の苦を免れて、嬉しと思ひ居しかば、此人のおはし着かん所を見置き奉りて、悦びも申さんと思ひて、

御供に参りし程に、菩提講の庭に参り給ひければ、其御供に参りたるに依りて逢ひ難き法を承り、事足るに依りて、多く罪をさへ滅ぼして、其力にて、人に生れ侍るべき功德の近くなり侍れば、いよく悦びを戴きて、斯くて参りたるなり。此報いには、物善く有らせ奉りて、善き男など逢はせ奉るべきなり、と云ふとなん見つる」と語るにあさましくなりて、此宿りたる女の云ふやう、「誠は己れは、田舎より上りたるにも侍らず、そこ／＼に侍る者なり。それが、昨日菩提講に参り侍りし道に、其程に行き合ひ給ひたりしかば、後に立ちて歩み罷りしに、大宮のそのほどの、河の石橋を踏み返されたりし下より、斑なりし小蛇の出で来て、御供に参りしを、斯くと告げ申さんと思ひしかとも、告げ奉りては、我が爲も悪しき事にてもや有らんずらんと、恐ろしくてえ申さざりしなり。誠講の庭にも、其蛇侍りしかども、人もえ見付けざりしなり。果て、出で給ひし折、又具し奉りたりしかば、なり果てんやうゆかしくて、思ひも掛けず今宵こゝにて夜を明し侍りつるなり。此夜中過ぐるまでは、此蛇柱のもとに侍りつるが、明けて見侍りつれば、蛇も見え侍らざりしなり。其れに合はせて、斯かる夢語をし給へば、あさましく恐ろしくて、斯くあらはし申すなり。今よりは是れを序にて、何事も申さん」など言ひ語らひて、後は常に行き通ひつゝ、知る人になん成りにける。さて此女、世にもよく成りて、此頃は何とは知らず、大殿の下家司の、いみじく徳有るが妻に成りて、萬づ事協ひてぞ有りける。尋ねば、隠れ有らじかしとぞ。

(六) 東北院菩薩講、聖の事

東北院の辨講始めける聖は、本はいみじき悪人にて、囚獄に七度ぞ入りたりける。七度と云ひける度、檢非違使ども集まりて、「是れはいみじき悪人なり。一二度獄にゐむだに、人としては善かるべき事かは。況していくそばくの犯しをして、斯くて七度までは、あさましくゆゑしき事なり。此度はれが足切りてんと定めて、足切りに率て行きて切らんとする程に、いみじき相人有りけり。其れが物へ往きけるが、此の足切らんとする者によりて云ふやう、「此人己れに免されよ、是れは必ず往生すべき相有る人なり」と云ひければ、「よしたき事云ふものも覺えぬ相する御房かな」と云ひて、唯だ切りに切らんとすれば、其の切らんとする足の上に昇りて、「此足の替りに我が足を切れ。往生すべき相有る者の足切られては、如何でか見んや、をう／＼」とをめきければ、切らんとする者どもしあつかひて、檢非違使に「斯う／＼の事侍り」と云ひければ、やんごとなき相人の云ふ事なれば、さすがに用ゐるすもなく、別當に「斯かる事なん有る」と申しければ、「さらば免してよ」とて、免るされにけり。其時、此盜人心發して、法師に成りて、いみじき聖に成りて、此辨講は始めたるなり。誠に相に協ひて、いみじく終りとりてこそ亡せにけれ。斯かれば高名せんずる人は、其相有りと、臆氣の相人の見る事にも有らざりけり。始め置きたる講も、今日まで絶えぬは、誠にあはれなる事なりかし。

(七) 三河入道遁世世間事

參河入道「○大江定基」、未だ俗にて有りける折、本の妻をば去りつゝ、若く容貌よき女に思ひ付きて、其れを妻にて三河へ率て下りける程に、其の女久しく煩ひて美かりける容貌も衰へて亡せにけるを、悲しさの餘りにとかくもせで、夜もひる「原本さに誤ル一本ニヨル」も語らひ臥して、口を吸ひたりけるに、あさましき香の口より出で來たりけるにぞ疎む心出で來て、泣く／＼葬りてける。其れより、世「○は脱力」憂き物にこそ有りけれと思ひなりけるに、三河の國に風祭と云ふ事をしけるに、生賢と云ふ事に、猪を生ながらおろしけるを見て、此國のきなんと思ふ心付きてけり。雉子を生ながら捕へて人の出で來たりけるを、「いざ、此雉子生けながら作りて食はん、今少し味や善きと試みん」と云ひければ、如何でか心に入らんと思ひたる郎等の、物も覺えぬが「いみじく侍りなん、如何でか味勝らぬやうは有らん」など、囁し云ひけり。少し物の心知りたる者は、あさましき事をも云ふなど思ひけり。斯くて前にて、生ながら毛を毳らせければ、暫しはふた／＼とするを、抑へて唯だ毳りに毳りければ、鳥の目より血の涙を垂れて、目を瞬きて、此彼に見合はせけるを見て、え堪へずして立ちて去く者も有りけり。「是れが、斯く鳴く事」と興じ笑ひて、いとゞ情無げに毳る者も有り。毳り果てゝおろさせければ、刀に隨ひて、血のつぶ／＼と出で來けるを、拭ひ／＼おろしければ、あさましく堪へ難げなる聲を出だして、死に果てければ、おろし果てゝ、「熬焼などして試みよ」とて、人々試みさせければ、「殊の外に侍りけり。死にたるおろして熬焼したるには、是れは勝りたり」など云ひけるを、つく／＼と見聞きて、涙を流して、聲を立てゝ喚きけるに、甘しきと云ひける者ども、支度たがひにけり。さてやがて、其日國府を出でゝ京に上ぼりて、法師に成りにけり。道心の發りければ、能く

心を固めんとて、斯かる希有の事をして見けるなり。乞食と云ふ事しけるに、或家に食物えも云はずして、庭に疊を敷きて物を食はせければ、此疊にゐて食はんとしける程に、簾を巻き上げたりける内に、美き装束著たる女のゐたるを見ければ、我が去りにし古き妻なりけり。「あの乞兒、斯くて有らんを見んと思ひしぞ」と云ひて、見合はせたりけるを、恥かしとも、苦しとも思ひたる氣色も無くて、「あな尊と」と云ひて、物能く打食ひて歸りにけり。有難き心なりかし。道心を固く發してければ、さる事に逢ひたるも、苦しとも思はずりけるなり。

(八) 進命婦清水まよりでの事

今は昔、進命婦若かりける時、常に清水へ参りける間、師の僧清かりけり。八十のものなり。法華經を八萬四千餘部よみ奉りたる者なり。此女房を見て、欲心を起して、忽ちに病に成りて、既に死なんとする間、弟子ども怪しみをなして問うて云はく、「此病の有様、打まかせたる事に有らず。思し召す事の有るか。仰せられずばよしなき事なり」と云ふ。此時語りて云はく、「誠は、京より御堂へ参らるゝ女な〔○房カ〕に近づきたれて、物を申さばやと思ひしより、此三箇年不食の病に成りて、今は既に邪道に落ちなんずる。心憂き事なり」と云ふ。茲に弟子一人、進命婦〔○祇子〕の許へ行きて、此事を云ふ時に、女な〔○房カ〕程無く來れり。病者頭を剃らで年月を送りたる間、獨髮銀針を立てたるやうにて、鬼の如く〔○シカ〕。されども、此女恐るゝ氣色なくして云ふやう、一年比頼み奉る志淺からず、何事に候ふとも、如何でか仰せられん事背き奉らん。御身頼れさせ給はざりし前に、何か仰せられざりし」と云ふ時、此僧掻き起されて、念珠を取りて、推し揉みて云ふやう、「嬉しく來らせ給ひたり。八萬餘部讀み奉りたる法華經の最第一の文をば御前に奉る。「俗を生まれ給はゞ、關白攝政を生まれ給へ。女を生まれ給はゞ、女御后を生まれ給へ。僧を生まれ給はば、法務の大僧正を生まれ給へ」と云ひ終りて、即ち死ぬ。其後この女房、宇治殿〔○頼道〕に思はれ參らせて、はたして京極大殿〔○師實〕四條宮〔○寛子〕、三井の覺圓座主を生み奉れりとぞ。

(九) 業遠朝臣蘇生ノ事

是れも今は昔、業遠朝臣死ぬる時、御堂の入道殿〔○道長〕仰せられけるは、「云ひ置くべき事有らんかし。不便の事なり」とて、解脱寺觀修僧正を召し、業遠が家に向ひ給ひて加持する間、死人忽ちに蘇生して、要事を云ひて後、また目を閉ちてけりとか。

(十) 篤昌忠愼等の事

是れも今は昔、民部大輔篤昌と云ふ者有りけるを、法性寺殿〔○忠通〕の御時、藏人所の所司〔底本用一本ニヨル〕に義助とかや云ふ者有りけり。件の篤昌を役に催しけるを、「我は、かやうの役はすべき者にも有らず」とて、参らざりけるを、所司、小舎人を數多つけて、苛法に催しければ参りにけり。さき先づ「此所司に物申さん」と呼びければ、出で合ひけるに、この世ならず腹立ちて、「斯やうの役に催し給ふは如何なる事ぞ。篤昌をば如何なる者と知り給ひたるぞ。承はらん」と、頻りに責めけれど、暫しは物も言はで居たり

けるを、叱りて「のたまへ、先づ篤昌がありやうを承らん」と、いたう責めければ、「別の事候はず。民部大輔五位の鼻赤きにこそ、しか申したれ」と云ひたりければ、「をう」と云ひて逃げにけり。又この所司が居たりける前を、忠恆と云ふ隨身、つ「〇こカ」とやうにて違り通りけるを見て、「わり有る隨身の姿かな」と忍びやかに云ひけるを耳敏く聞きて、隨身、所司が前に立ち返りて、「わり有るとは如何にのたまふ事ぞ」と咎めければ、「我は、人の理り有り無しもえ知らぬに、只今武正府生の通られつるを、此人々、「わり無きもの、様體かな」と言ひ合はせつるに、少しも似給はねば、さては若し、わりのおはするかと思ひて、申したりつるなり」と云ひたりければ、忠恆「をう」と云ひて逃げにけり。此所司をば、あら所司とぞ付けたりけるとか。

(十一) 後朱雀院丈六佛奉作給事

是れも今は昔、後朱雀院例ならぬ御事、大事におはしましける時、後生の事おそれ思し召しけり。其れに御夢に、御堂入道殿参りて、申し給ひて云はく、「丈六の佛を造れる人、子孫において更に悪道に落ちず。某多くの丈六を造り奉れり。御井において疑ひ思し召すべからず」と、是れに依りて、明快座主に仰せ合せられて、丈六佛を造らる。件の佛、山の灌佛院に安置し奉らる。

(十二) 式部大輔實重賀茂、御正體拜見の事

是れも今は昔、式部大輔實重は、賀茂へ参る事ならびなき者なり。前生の運躑そかにして、身に過ぎたる

利生に預らず。人の夢に、大明神「又實重來たり云ふやうは」とて、歎かせおはします由見けり。實重、御本地を見奉るべき由祈り申すに、或夜下の御社に通夜したる夜、上へまゐる間、半木「一本ひゝら木」の邊にて行幸にあひ奉る、百官供奉常の如し。實重片敷に隠れみて見れば、鳳翬の中に金泥の經一卷おはしましたり。其外題に、「一稱南無佛、皆已成佛道」と書かれたり。夢即ち覺めぬとぞ。

(十三) 智海法印頼人、法談ノ事

是れも今は昔、智海法印有職の時、清水寺へ百日まゐりて、夜更けて下向しけるに、橋の上に、唯圓教意、逆即是順、自餘三教、逆順定故と云ふ文を誦する聲あり。尊き事かな、如何なる人の誦するならんと思ひて、近う寄りて見れば白癩人なり。傍らにゐて法文の事を云ふに、智海ほとくしい「底本み、イ本ニヨル」ひまはされけり。南北二京に、是程の學生あらじ物と思ひて、「何れの所に有りて「二字るぞカ」と同ひければ、「此坂に候ふなり」と云ひけり。後に度々たづねけれど、尋ね逢はずして止みにけり。若し化人にや有りけんと思ひけり。

(十四) 白河院御寢ノ時物におそはれさせ給事

是れも今は昔、白河院御殿ごもりて後、物に魔れさせ給ひける、然るべき武具を、御枕の上に置くべきと沙汰有りて、義家朝臣に召されければ、眞弓の黒塗なるを一張参らせたりけるを、御枕に立てられて後、魔せさせおはしまさざりければ、御感有りて、「此弓は十二年の合戦の時や持ちたりし」と、御尋ね有りければ、

覺えざる由申されけり。上皇頻りに御感有りけるとか。

(十五) 永超僧都魚食事

是れも今は昔、南の京の永超僧都は、魚無き限りは、時非時もすべて食はざりける人なり。公請つとめて、在京の間久しくなりて、魚を食はで頼れて下る間、奈島の丈六堂の邊にて、晝破子食ふに、弟子一人近邊の在家にて、魚を乞ひてすゝめたりけり。件の魚の主、後に夢に見るやう、恐ろしげなる物ども、其の邊の在家を誑しけるに、我が家を誑し除きければ、尋ねぬる所に、使の云はく、「永超僧都に魚を奉る所なり。さて誑し除く」と云ふ。其年、此村の在家、盡く疫病をして死ぬる者多かりけり。此魚の主が家唯だ一字、其事を免かるゝによりて、僧都の許へ参り向ひて此由を申す。僧都此由を聞きて、被物一重給ひてぞ返されける。

(十六) 了延房に實因自湖水中法文の事

是れも今は昔、了延房阿闍梨、日吉の社へ参りて歸る、唐崎の邊を過ぐるに、有相安樂行、此依觀思と云ふ文誦したりければ、浪中に、散心誦法花、不入禪三昧と、末の句をば誦する際有り。不思議の思ひを成して、「如何なる人のおはしますぞ」と問ひければ、奥房僧都實因と名告りければ、汀「底本河、一本ニ據ル」に居て法文を談じけるに、少々僻言ども答へければ、「是れは僻言なり、如何に」と問ひければ、「よく申すところ思ひ候へども、生を隔てぬれば力及ばぬ事なり。我なればこそ此程も申せ」と云ひけるとか。

(十七) 慈惠僧正戒壇くづ「つかか」れたる事

是れも今は昔、慈惠僧正は近江國淺井郡の人なり。叡山の戒壇を、人夫かなはざりければ、え築かざりける頃、淺井郡司は、親しき上に師壇にて、佛事を修する間、此僧正を請じ奉りて、僧膳の料に、前にて大豆を煎りて酢を懸けゝるを、「何しに酢をば懸くるぞ」と問はれければ、郡司云はく、「暖かなる時酢を懸ければすむつかりとて、にがみてよく挾まるゝなり。然らざれば、滑りて挾まれぬるなり」と云ふ。僧正の云はく、「如何なりとも、なじかは挾まぬやうや有るべき。投げやるとも挾み食ひてん」と有りければ、「如何でさる事あるべき」と争ひけり。僧正「勝ち申しなば、異事くはカ有るべからず、戒壇を築きて給へ」と有りければ、「安き事」とて煎大豆を投げ遣るに、一間ばかり退きて居給ひて、一度も落さず挾まれけり。見る者あざまずと云ふ事無し。柚の實の只今しほり出だしたるを交せて、投げて遣りたるをぞ、挾みすべらかし給ひけれど、落しもたてず、又やがて狭み留め給ひける。郡司一家廣き者なれば、人數をおこして、不日に戒壇を築きてけりとぞ。

宇治拾遺物語 卷第五

(一) 四の宮河原地藏の事

是れも今は昔、山科の道づらに四の宮河原と云ふ所にて、袖くらべと云ふ商人集まる所有り。其邊の下衆のありける、地藏芥を一體作り奉りたりけるを、開眼もせで櫃に打入れて、奥の部屋などおぼしき所に納め置きて、世の營みにまぎれて程經にければ、忘れにける程に、三四年ばかり過ぎにけり。或夜夢に、大路を過ぐる者の、聲高に人呼ぶ聲のしければ、何事ぞと聞けば、「地藏こそ」と、高く此家の前にて云ふなれば、奥の方より「何事ぞ」と答ふる聲すなり。「明日天帝釋の地藏會し給ふには参らせ給はぬか」と云へば、此小家の内より「参らんと思へど、まだ目の開かねば、え参るまじく」と云へば、「かまへて参り給へ」と云へば、「目も見えねば、如何でか参らん」と云ふ聲すなり。打驚きて、何の斯くは夢に見えつるにかと思ひ参らすに、怪しくて、夜明けて奥の方を能く見れば、此地藏納めて置き奉りたりけるを、思ひ出だして見出だしたりけり。是れが見え給ふにこそと驚き思ひて、急ぎ開眼し奉りけりとなん。

(二) 伏見修理大夫許へ殿上人共行きむかふ事

是れも今は昔、伏見修理大夫〔○俊綱〕の許へ、殿上人廿人ばかり押し寄せたりけるに、俄に騒ぎけり。看もの取り取へず、沈地の机に、時の物ども色々、唯だ推し量るべし。盃度々になりて、各たはふれ出でける。殿に黒馬の額少し白きを、二十疋立てたりけり。移しの鞍二十具、鞍懸に懸けたりけり。殿上人酔ひ亂れて、各この馬に移しの鞍置きて、乗せて返しにけり。つとめて、「さても昨日、いみじくしたるものかな」と云ひて、「いざ、又押し寄せん」と云ひて、又二十人押し寄せたりければ此の度はさる體にして、俄なるさまは昨日に替りて、炭櫃を飾りたりけり。殿を見れば、黒栗毛なる馬をぞ二十疋まで立てたりける。是れも額白かりけり。大方かばかりの人ども無かりけり。是れは宇治殿の御子におはしけり。されども公達多くおはしませければ、橋俊遠と云ひて、世の中の徳人有りけり。其子になして、斯かるさまの人になさせ給うたりけるとぞ。

(三) 以長物忌の事

是れも昔、大膳亮大夫、橋以長と云ふ藏人の五位有りけり。宇治左大臣殿〔○頼長〕より召し有りけるに、「今明日は、かたき物忌を仕る事候ふ」と申したりければ、「こは如何に、世にある者の物忌と云ふ事やは有る、確に参られよ」と、召し厳しかりければ、恐れながら参りにけり。さる程に十日ばかり有りて、左大臣殿に、よにしらぬ固き物忌出で來にけり。御門のはさまに書い立てなどして、仁王講行なはる僧も、高陽院の方の土戸より、童子なども入れずして、僧ばかりぞ参りける。御物忌有りと此の以長聞きて、急ぎ参りて、土戸より参らんとするに、舍人二人居て、「人な入れそと候ふ」とて、立ち向ひたりければ、「やう

れ、おれらよ、召されて参るぞ」と云ひければ、是等もさすがに職事にて常に見れば、力及ばで入れつ。参りて藏人所に居て何となく、聲高に物云ひ居たりけるを、左府「〇頼長」聞かせ給ひて、「此の物云ふは誰」と之間はせ給ひければ、盛兼申すやう、「以長に候ふ」と申しければ、「如何に、かばかり固き物忌には昨夜より参り籠りたるかと尋ねよ」と仰せければ、行きて仰せの旨を云ふに、藏人所は御所より近かりけるに、くは／＼と大聲して、憚らず申すやう、「過ぎ候ひぬる頃、私に物忌仕りて候ひしに、召され候ひき。物忌の由を申し候ひしを、物忌に云ふ事は有る確に参るべき由仰せ候ひしかば、参り候ひにき。されば物忌と云ふ事は候はぬと、知りて候ふなり」と申しければ、聞かせ給ひて、打領きて、物も仰せられで止みにけりとぞ。

(四) 範久阿闍梨西方をうしろにせざる事

是れも今は昔、範久阿闍梨と云ふ僧有りけり。山の楞嚴院に住みけり。ひとへに極樂を願ふ。行住坐臥西方を後にせず。唾大小便西に向はず。入日を背に負はず。西坂より山へ登る時は、身をそばだて、歩む。常に云はく、作る事、必ず傾く方にあり。心を西方に懸けんに、何んぞ心ざしを遂げざらん。臨終正念疑はず」となん云ひけり「〇るカ」。往生傳に入るとか。

(五) 陪従家綱兄弟互に謀りたる事

是れも今は昔、陪従はさもこそはと云ひながら、是れは世に無き程の猿樂なりけり。堀河院の御時、内侍所



の御神樂の夜、仰せにて、「今宵珍しからん事仕れ」と仰せ有りければ、職事家綱を召して、此由仰せけり。承はりて、何事をかせましと按じて、弟行綱「底本岡一本ニヨル」を片隅へ招き寄せて、「斯かる事仰せ下されたれば、我が按じたる事の有るは如何が有るべき」と云ひければ、「如何やうなる事をせさせ給はんぞ」と云ふに、家綱が云ふやう、「庭火白く燃きたるに、袴を高く引き上げて、細脛を出だして、「よりによりに夜の更けて、さらにさらに寒きに」「底本と一本ニヨル」、ふりちう陰囊を、ありちう炙らん」と云ひて、庭火を三廻りばかり走り廻らんとも思ふ。如何が有るべき」と云ふに、行綱が云はく、「さも侍りなん。但し、おはやけの御前にて、細脛かき出だして「陰囊炙らん」など候はんは、便なくや候ふべからん」と云ひければ、家綱「誠にさ云はれたり。さらば異事をこそせめ。賢う申し合はせてけり」と云ひける。殿上人など仰せを承はりたれば、今宵如何なる事をせんずらんと、目を澄まして待つに、人長「家綱召す」と召せば、家綱出で、させる事無きやうにて入りぬれば、上よりも、其事となきやうに思し召す程に、人長又進みて、「行綱召す」と召す時、行綱寔に寒げなる氣色をして、膝を股までかき上げて、細脛を出だして、戰慄き寒げなる聲にて、「よりに」に夜の更けてさらにさらに寒きに、ふりちう陰囊を、ありちう炙らん」と云ひて、庭火を十まはりばかり走り廻りたるに、上より下さまに至るまで、大方どよみたりけり。家綱片隅に隠れて「きやつに悲しう謀られぬるこそ」とて、中違ひて、目も見合はせずして過ぐる程に、家綱思ひけるは、謀られたるは憎けれど、さてのみ止むべきに有らずと思ひて、行綱に云ふやう、「此事さのみぞ有る。さりとて、

兄弟の中違ひ果つべきに有らず」と云ひければ、行綱喜びて行き睦びけり。賀茂の臨時の祭の還立に御神樂の有るに、行綱、家綱に云ふやう、「人長召し立てん時、竹の臺の許に寄りてそよめかんずるに、「あれはなんするものぞ」と囁い給へ。其時「竹豹ぞ竹豹ぞ」と云ひて、豹の眞似を盡さん」と云ひければ、家綱「こにも有らず、のきむはやさん」と言受けしつ。さて人長立ち進みて、「行綱召す」と云ふ時に、行綱やをら立ちて、竹の臺の許に寄りて、匍ひ歩いて有れば、「何するぞや」と云はゞ、それに付きて、竹豹と云はんと待つ程に、家綱「かれはなんぞの竹豹ぞ」と問ひければ、只今云はんと思ふ竹豹を先きに云はれければ、云ふべき言無くて、ふと逃げて走り入りけり。此の事上まで聞し召して、なか／＼ゆゝしき興にて有りけるとかや。前に行綱に謀られたる返報とぞ云ひける。

(六) 陪從清仲ノ事

是れも今は昔、二條の大宮と申しけるは、白河院の宮、鳥羽院の御母代におはしましける。二條の大宮とぞ申しける。二條よりは北、堀川よりは東におはしましけり。其の御所破れにければ、有賢大藏卿、備後の國をしられる重任の功に修理しければ、宮も外へおはしましにけり。其れに陪從清仲と云ふ者常に候ひけるが、宮おはしまさねども、猶御車宿りの妻戸に居て、古き物は云はじ、新らしうしたる東柱、立部などをさへ破り焼きけり。此事を有賢、鳥羽院に訴へ申しければ、清仲を召して、宮渡らせおはしまさぬに、猶留まり居て、古き物新らしき物、毀ち燃くなるは如何なる事ぞ。修理する者訴へ申すなり。先づしもおはしまさぬ

に、猶籠り居たるは、何事によりて候ふぞ。子細を申せ」と仰せられければ、清仲申すやう、「別の事に候はず、薪に盡きて候ふなり」と申しければ、「大方是れ程の事、とかく仰せらるゝに及ばず。速かに追ひ出だせ」とて、笑はせおはしましけるとかや。此清仲は、法性寺殿御時、春日の祭乗尻の立ちけるに、神馬使各障り有りて、事缺けたりけるに、清仲ばかり務めたりし者なれども、「事缺けにたり。相かまへて務めよ。せめて京ばかりをまれ「一本三字にもあれ一本」、事無きさまに計らひ務めよ」と仰せられけるに、「畏まりて奉りぬ」と申して、やがて社頭に参りたりければ、返す／＼感じ思し召す。「いみじう勤めて候ふ」とて、御馬を給びたりければ、伏し轉び喜びて、「この定に候はゞ、定使を仕り候はゞや」と申しけるを、仰せつく者も、候ひ合ふ者ども、笑壺に入りて笑ひ喧騒りけるを、「何事ぞ」と御尋ね有りければ、云々と申しけるに、「いみじう申したり」とぞ仰事有りける。

(七) かな曆あつらへたる事

是れも今は昔、或人の許に、なま女房の有りけるが、人に紙乞ひて、そこなりける若き僧に、「假字曆書きて給べ」と云ひければ、僧「安き事」と云ひて書きたりけり。初めつ方は麗はしく、「かみはとけによし。かんじくゑ日」など書きたりけるが、漸々末さまになりて、「或物はぬ日」など書き、「又これぞあればよくふ日」など書きたり。此女房、やうかる曆かなとは思へども、いと斯う程には思ひ寄らず。さる事にこそと思ひて、其のまゝに違へず。又或日「はこそすべからず」と書きたれば、如何にとは思へども、然こそ有

らめとて、念じて過ぐす程に、長凶會日の様に「はこそすべからず」と續け書きたれば、二日三日までは念じるたる程に、大方堪ふべきやうも無ければ、左右の手にて尻を抱へて、「如何にせん如何にせん」と、よぢりすぢりする程に、物も覺えずして有りけるとか。

(八) 實子にあらざる人實子のよしたる事

是れも今は昔、其人の一定子とも聞えぬ人有りけり。世の人は其由を知りて迂愚がましく思ひけり。其父と聞ゆる人亡せにける後、其人の許に年比有りける侍の、妻に具して田舎へ去にけり。其妻亡せにければ、すべきやうも無く成りて、京へ上りにけり。萬づ有るべきやうも無く、便りなかりけるに、此子と云ふ人こそ一定の由云ひて、親の家に居たなれと聞きて、此侍参りたりけり。「故殿に年比候ひし某と申す者こそ参りて候へ。御見参に入りたがり候」と云へば、此子「さる事有り」と覺ゆ。暫しさぶらへ、御對面有らんずぞ」と云ひ出だしたりければ、侍しおほせつと思ひて、睡り居たる程に、近う召し使ふ侍出で来て、「御出居へ参らせ給へ」と云ひければ、悦びて参りにけり。此召次しつる侍、「暫し候はせ給へ」と云ひて、あなたへ行きぬ。見まら「三字まは一本」せば、御出居のさま、故殿のおはしまし候ふ裝飾につゆ變らず。御障子などは少し古りたる程にやと見る程に、中の障子引き開くれば、きと見上げたるに、此子と名乗る人歩み出でたり。是れを打見るまゝに、此年比の侍、歎歎もよゝと泣く。袖も絞り敢へぬ程なり。此主人、如何に斯くは泣くらんと思ひて、躑居て、「こはなど斯く泣くぞ」と問ひければ、「故殿のおはしましゝに違はせ

おはしまさぬが、哀れに覺えて」と云ふ。さればこそ、我も故殿には違はぬやうに覺ゆるを、此人々の有らぬなど云ふなる、あさましき事と思ひて、此の泣く侍に云ふやう、「己れこそ、殊の外に老いにけれ。世の中は如何やうにて過ぐるぞ。我はまだ幼くて、母の許にこそ有りしかば、故殿の有りやう能くも覺えぬなり。己れをこそ、故殿と頼みて有るべかりけれ。何事も申せ。又偏に頼みて有らんずるぞ。先づ當時塞げなり。此衣著よ」とて、綿豊肥なる衣一つ脱ぎて給ひて、「今はさうなし。是れへ参るべきなり」と云ふ。此侍はおはせて居たり。昨日今日の者の、斯く云はんだにあり。いはんや故殿の年比の者の斯く云へば、家主笑みて、「此男の年比すちなくて有りけん、不便の事なり」とて、後見に召し出で、是れは故殿のいとほしくし給ひし者なり。先づ斯く京に旅出ちたるに、思ひはからひて沙汰しやれ」と云へば、卑下なる聲にて「む」と答へて立ちぬ。此侍は、虚言せじと云ふをぞ佛に申し切りてける。さて此の主人、我を不定げに云ふなる人々呼びて、此侍に、事の子細云はせて聞かせんとて、後見召し出で、「明後日、是れへ人々渡らんと云はるゝに、さるやうに引きつくるひて、もてなし荒涼まじからぬやうにせよ」と云ひければ、「む」と申して、さまざまに沙汰し設けたり。この得意の人々、四五人ばかり來集まりにけり。主人常よりも引きつくるひて、出で合ひて、御酒度々参りて後云ふやう、「我が親の許に、年比生ひ立ちたるもの候ふをや、御覽ずべからん」と云へば、此集まりたる人々、心地よげに顔先赤め合ひて、「尤も召し出ださるべく候ふ。故殿に候ひけるも、かつは哀れに候ふ」と云へば、「人々有る、何がし参れ」と云へば、一人立ちて召すなり。

見れば、鬚「鬢一本」はげたる男の六十ばかりなるが、まみの程など、虚言すべうも無きが、打ちたる白き狩衣に、練色の衣のさる程なる著たり。是れは給はりたる衣と覺ゆる。召し出だされて、事うるはしく、扇を笏に取りて、蹲り居たり。家主の云ふやう「やゝ、此父のそのかみより、己れは生ひ立ちたる者ぞかし」、など云へば、「む」と云ふ。「見えにたるか、如何に」と云へば、此侍云ふやう、「其事に候ふ。故殿には十三より参りて候ふ。五十まで夜晝離れ参らせ候はず。故殿の故殿の「小冠者小冠者」と召し候ひき。無下に候ひし時も、御あとに臥せさせおはしまして、夜中曉、大壺参らせなどし候ひし。其時は佗しう堪へ難く覺え候ひしが、おくれ参らせて後は、など然覺え候ひけん、悔しう候ふなり」と云ふ。主人の云ふやう、「そもそも一日汝を呼び入れたりし折、我が障子を引き開けて出でたりしをり、打見上げてほろ／＼と泣きしは、如何なりし事ぞ」と云ふ。其時侍が云ふやう、「其れも別の事に候はず。田舎に候ひて、故殿亡せ給ひにきと承はりて、今一度参りて、御有様をだにも拜み候はんと思ひて、畏れ／＼参り候ひし、さうなく御出居へ召し出ださせおはしまして候ひし、大方忝く候ひしに、御障子を引き開かせ給ひ候ひしを、きと見上げ参らせて候ひしに、御烏帽子の眞黒にて、先づさし出でさせおはしまして候ひしが、故殿の斯くの如く出でさせおはしましたりしも、御烏帽子は眞黒に見えさせおはしましゝが、思ひ出でられおはしまして、覺えず涙のこぼれ候ひしなり」と云ふに、此集まりたる人々も笑を含みたり。又この主人も氣色變りて、「さて又いづくか故殿には似たる」と云ひければ、此侍「其外は、大方似させおはしましたる所おはしまさず」と云ひ

ければ、人々微笑みて、一人二人づゝこそ逃げわらひ「三字うせい本」にけれ。

(九) 御室戸僧正の事并一乗寺僧正の事

是れも今は昔、一乗寺僧正、御室戸僧正とて、三井の門流「底本、院イ本ニヨル」にやんごとなき人おはしけり。御室戸僧正は、隆家の帥の第四の子なり。一乗寺僧正は、經輔大納言の第五の子なり。御室戸をば隆明と云ふ。一乗寺をば僧譽と云ふ。此二人、おの／＼尊くて生佛なり。御室戸は、肥滿て修行するに及ばず、偏に本尊の御前を離れずして、夜晝行ふ鈴の音絶ゆる時無かりけり。自ら人の行き向ひたれば、門をば、常に鎖したる、門を敲く時、たま／＼人の出で来て「誰ぞ」と問ふ。「云々の人のまゐらせ給ひたり。若しは院の御使に候ふ」など云へば、「申し候はん」とて、奥へ入りて無期にある程、鈴の音頻りなり。さてばかり有りて、門の關木をばづして、扉片つ方を、人一人入る程開けたり。見入るれば、庭には草繁くして、道踏みあ(○わか)けたる跡も無し。露を分けて入りて昇りたれば、廣廂一間有り。妻戸に明障子立てたり。煤氣とほりたる事、いつの世に張りたりとも見えす。暫しばかり有りて、墨染着たる僧、足音もせで出で来て、「暫し其れにおはしませ。行ひの程に候ふ」と云へば、待ちゐたる程に、とばかり有りて、うちより「其れへ入らせ給へ」と有れば、煤けたる障子を引き開けたるに、香の煙くゆり出でたり。萎え通りたる衣に、袈裟なども所々破ぶれたり。物も云はで居られたれば、此人も如何にと思ひて向ひ居たる程に、拱き、少し俯伏したるやうにて居られたり。暫し有る程に、「行ひの程よくなり候ひぬ。さらば疾く歸らせ給

へ」と有れば、云ふべき事も云はで出でぬれば、又門やがて鎖しつ。是れは偏に居行ひの人なり。一乗寺の僧正は、大峰は二度通られたり。蛇を見る法行はる。又龍の駒などを見などして、あらぬ有縁をして行ひたる人なり。其坊は、一二町ばかりより轉きて、田樂、猿樂など轉き、隨身、衛府の男どもなど出で入り舞く。物賣ども入り来て、鞍、太刀さまざまの物を賣るを、彼が云ふまゝに價を給ひければ、市をなしてぞ集ひける。さて此僧正の許に、世の賣は集ひ集りたりけり。其れに呪師小院と云ふ童を愛せられけり。鳥羽の田植に見つきしたりける。さき／＼いくひにのりつゝ、みつきをしける男の田植に僧正云ひ合はせて、此頃するやうに、あふぎにたち／＼して、こは／＼より出でたりければ、大方見る者も驚き／＼し合ひたりけり。此童餘りに寵愛して、「由無し法師に成りて、夜晝離れず付きて有れ」と有りけるを、童「如何が候ふべからん。今暫し斯くて候はゞや」と云ひけるを、僧正猶いとほしさに、「唯だ成れ」と有りければ、童しぶ／＼に法師に成りにけり。さて過ぐる程に、春雨打そゞぎて徒然なりけるに、僧正人を呼びて、「あの僧の装束は有るか」と問はれければ、「納殿に未だ候ふ」と申しければ、「取りて來」と云はれけり。持て來たりけるを、「是れを著よ」と云はれければ、此の呪師小院「見苦しう候ひなん」と辭みけるを、「唯だ著よ」と責め宜ひければ、かた／＼へ行きて裝束きて兜して出で來たりけり。つゆ昔に變らず、僧正打見てかひを作られけり。小院又面變りして立てりけるに、僧正「未だはしりて御おぼゆや」と有りければ、「覺え候はず。但しかたさらばの調ぞ、能くしつけて來し事なれば、少し覺え候ふ」と云ひて、篋の中割りて通る程を

走りてとぶ。兜持ちて、一拍子にわたりたりけるに、僧正隠を放ちて泣かれけり。さて「こち來よ」と呼び寄せて、打撫つゝ、「何しに出家をさせけん」とて泣かれければ、小院も「然ればこそ、今暫しと申し候ひしものを」と云ひて、裝束ぬがせて、障子の内へ具して入られにけり。其後は、如何なる事か有りけん、知らず。

(十) 或僧人の許にて氷魚ぬすみ食ひたる事

是れも今は昔、ある僧人の許へ行きけり。酒など進めけるに、氷魚初めて出で來たりければ、主人珍しく思ひてもてなしけり。主人用の事有りて内へ入りて、又出でたりけるに、此氷魚の殊の外に少なく成りたりければ、主人如何にと思へども、云ふべきやうも無かりければ、物語し居たりける程に、此僧の鼻より、氷魚の一つふと出でたりければ、主人怪しう覺えて、「其鼻より氷魚の出でたるは、如何なる事にか」と云ひければ、取りも敢へず、「此比の氷魚は、目鼻よりふり候ふなるぞ」と云ひたりければ、人皆「は」と笑ひけり。

(十一) 仲胤僧都地主權現説法の事

是れも今は昔、仲胤僧都を、山の大家、日吉の二の宮にて、法華經を供養しける導師に請じたりけり。説法
「イ本ニヨリテ補フ」えも云はずして、果て方に「地主權現の申せと候ふは」とて、此經難持、若暫持者、
我即歡喜、諸佛亦然と云ふ文を、打あげて誦して、諸佛と云ふ所を「地主權現の申せとは、我即歡喜、諸神
忽「ふ、亦ノ古證ヨリ誤リシカ」然」と云ひたりければ、そこらに集まりたる大家、異口同音にあめきて、
扇を開きつかひたりけり。是れを或人、日吉社の御正體を現はし奉りて、各御前にて千日の講を行ひけるに



二の宮の御料のをり、或僧、此句を少しも違へずしたりける「を一本アリ」、或人仲胤僧都に、「斯かる事こそありしか」と語りければ、仲胤僧都きやらきやらと笑ひて、「是れは斯う斯うの時、仲胤がしたりし句なり。えい／＼」と笑ひて、大方は此比の説經をば、犬のくそ説經と云ふぞ。犬は人の糞を食ひて糞をまるなり。仲胤が説法を取りて、此比の説經師はすれば、犬の糞説經と云ふなり」とぞ云ひける。

(十二) 大二條殿に小式部内侍歌よみかけ奉る事

是れも今は昔、大二條殿、小式部内侍思しけるが、絶え間がちになりける頃、例ならぬ事おはしまして、久しうなりてよろしくなり給ひて、上東門院へ參らせ給ひけるに、少式部、臺盤所に居たりけるに、出でさせ給ふとて「死なんとせしは。など問はざりしぞ」と仰せられて過ぎ給ひける、御直衣の裾を引き留めつゝ申しけり。

死ぬばかり歎きにこそは歎きしか生きて問ふべき身にし有らねば

堪へず思しけるにや、かき抱きて、局へおはしまして、寢させ給ひにけり。

(十三) 山横川賀能地藏の事

是れも今は昔、山の横川に賀能知院と云ふ僧、極めて破戒無慙の者にて、晝夜に佛の物を取りつかふ事をのみしけり。横川の執行にて有りけり。政所へ行くとて、塔のもとを常に過ぎ歩きければ、塔の許に、古き地藏の物の中に棄て置きたるを、きと見奉りて、時々衣被りしたるを打脱ぎ、頭を傾ぶけて、少しく敬ひ拜

みつゝ行く時も有りけり。斯かる程に、かの賀能はかなく失せぬ。師の僧都是れを聞きて、彼僧破戒無慙の者にて、後世さだめて地獄に落ちん事疑ひ無し、と心憂がり哀れみ給ふ事限りなし。斯かる程に「塔のもと、の地藏こそ、此程見え給はね。如何なる事にか」と、院内の人々云ひ合ひたり。「人の修理し奉らんとて、取り奉りたるにや」など云ひける程に、此僧都の夢に見給ふやう、「此地藏の見え給はぬが、如何なる事ぞ」と尋ね給ふに、傍らに僧有りて云はく、「この地藏菩薩、はやう賀能知院が無間地獄に落ちし其日、やがて助けんとて、あひ具して入り給ひしなり」と云ふ。夢心地にいとあさましくて、「如何にして、さる罪人には具して入り給ひたるぞ」と問ひ給へば、「塔の許を常に過ぐるに、地藏を見遣り申して、時々拜み奉りし故なり」と答ふ。夢覺て後、自ら塔の許へおはして見給ふに、地藏誠に見え給はず。さはこの僧に、誠に具しておはしたるにやと思す程に、其後又僧都の夢に見給ふやう、塔の許におはして見給へば、此地蔵立ち給ひたり。是れは失せさせ給ひし地藏如何にして出で來給ひたるぞ」と宣へば、又人の云ふやう、「賀能具して地獄へ入りて、助けて歸り給へるなり。されば御足の焼け給へるなり」と云ふ。御足を見給へば、誠に御足黒ら焼け給ひたり。夢心地に、誠にあさましき事限りなし。さて夢覺めて、涙止らずして、急ぎおはして塔の許を見給へば、現にも地藏立ち給へり。御足を見れば、誠に焼け給へり。是を見給ふに、哀れに悲しき事限りなし。さて泣く／＼、此地蔵を抱き出だし奉り給ひてけり。今におはします。二尺五寸ばかりの程にこそと、人は語りし。是れ語りける人は拜み奉りけるとぞ。

宇治拾遺物語 卷第六

(一) 廣貴依妻訴炎魔王宮へめさる事

是れも今は昔、藤原廣貴と云ふ者有りけり、死して閻魔の廳に召されて、王の御前と思しき所に参りたるに、王の給ふやう、「汝が子を孕〔底本のけニ誤ル一本ニヨル〕みて、産をしそこなひたる女死にたり。地獄に落ちて苦しみを受くるに、愁訴へ申す事の有るに依りて、汝をば召したるなり。先づさる事有るか」と問はるれば、廣貴「さる事候ひき」と申す。王の給はく、「妻の訴へ申す心は、『我れ男に具して共に罪を作りて、しかも彼が子を産みそこなひて、死して地獄に落ちて、斯かる堪へ難き苦しみを受け候へども、聊かも我が後世をも弔ひ候はず。されば我れ一人苦しみを受け候ふべきやう無し。廣貴をも諸共に召して同じやうにこそ苦しみを受け候はめ、』と申すに依りて召したるなり」とのたまへば、廣貴が申すやう、「この訴へ申す事、尤も理に候ふ。公私、世を営み候ふ間、思ひながら後世をば弔らひ候はで、月日はかなく過ぎ候ふなり。但し今におき候ひては、共に召されて苦しみを受け候ふとも、彼が爲に苦しみの助かるべきに候はず。されば此度は暇を給はりて、娑婆に罷り歸りて、妻の爲に、萬づを捨て、佛經を書き、供養して弔らひ候はん」と申せば、王「暫し候へ」とのたまひて、彼が妻を召し寄せて、汝が「二字一本無し、衍カ」夫廣貴が申すやうを問ひ給へば、「實に佛經をだに書き、供養せんと申し候はゞ、疾く許し給へ」と申す時に、



又廣貴を召し出で、申すまゝの事を仰せ聞かせて、「さらば此度は罷り歸れ。確に妻の爲に、佛經を書き供養して弔ふべきなり」とて、歸し遣はす。廣貴斯かれども、是れはいづく「底本」今一本ニヨル誰が宣ふぞとも知らず、許されて座を立ちて歸る道にて思ふやう。此玉の籠の内に居させ給ひて、かやうに物の沙汰して我を歸さるゝ人は誰にかおはしますらんと、いみじく覺束なく覺えければ、又参りて庭に居たれば、籠の内より、「あの廣貴は返し遣はしたるには有らずや。如何にして又参りたるぞ」と問はるれば、廣貴が申すやう、「計らざるに御恩を蒙りて、歸り難き本國へ歸り候事を、如何におはします人の仰せとも、え知り候はで罷り候はん事の、極めていぶせく口惜しく候へば、恐れながら是れを承はりに、又参りて候ふなり」と申せば、「汝不覺なり。閻魔提にしては、我を地藏芥と稱す」とのたまふを聞きて、さは閻魔王と申すは、地藏にこそおはしましたしけれ。この芥に仕うまつり候ふが、地獄の苦しみをば免かるべきにこそ有んめれと思ふ程に、三日と云ふに生き返りて、其後妻の爲に、佛經を書き供養してけりとぞ、日本法華驗記に見えたるとなん。

(二) 世尊寺に死人を掘りいだす事

今は昔、世尊寺と云ふ所は、桃園大納言「〇師氏」住み給ひけるが、大將になる旨言かうぶり給ひにければ、大慶の「底本は、一本ニヨル」あるじの料に修理し、先づは祝し給ひし程に、明後日とて俄に失せ給ひぬ。つかはれ人皆出で散りて、北の方、若公ばかりなん凄くて住み給ひける。其若公は、主殿頭ちかみつと云ひし

なり。此家を、一條攝政殿取り給ひて、太政大臣になりて、大慶行はれける。坤の角に塚の有りける。築地を築き出だして、其の角は襍形にぞ有りける。殿「そこに堂を建てん。この塚を取り棄て、其上に堂を建てん」と定められぬれば、人々も「塚の爲に、いみじう功德に成りぬべき事なり」と申しければ、塚を掘り崩すに、中に石の唐櫃あり。あけて見れば、尼の年二十五六ばかりなる、色美しくして唇の色などつゆ變らで、えもいはず美しくしげなる、寝入りたるやうにて臥したり。いみじう美しくしき衣の、「いろ／＼なるをなむ著たりける。若かりけるもの、俄に死にたりけるにや」校本ニヨリテ補フ「金の坏麗はしくて据ゑたりけり。入りたる物、何も香しき事類ひ無し。あさましがりて、人々立ちこみて見る程に、乾の方より風吹きければ、いろ／＼なる塵になん成りて失せにけり。金の坏より外の物つゆ留まらず。「いみじき昔の人なりとも、骨髪ほねかみの散るべきにあらず。斯く風の吹くに、塵に成りて吹き散らされぬるは、希有のものなり」と云ひて、其頃入あさましがりける。攝政殿いくばくもなく失せ給ひにければ、此の祟にやと人疑ひけり。

(三) 留志長者、事

今は昔、天然てんぜんに留志長者とて、世に裕福しき長者有りける。大方藏いくらともなく持ち裕福ゆうふくきが、心の口惜くて、妻子にも、況して従者にも物食はせ著すること無し。己れ物欲しければ、人にも見せず隠して食ふ程に、物の飽ず多く欲しかりければ、妻に云ふやう、「飯酒、菓物くわぶつなどもたらかにして給へ、我につきて物をしまする慳貪けんこんの神祭らん」と云へば、物惜む心失はんとする、善き事」と喜びて、「いろ／＼に」一本ア

リ」調じて、大らかに取らせければ、受け取りて、人も見ざらん所に行きて、よく食はんと思ひて、行器に入れ、瓶子に酒入れなどして持て出でぬ。この木のもとには鳥あり、かしこには雀ありなどえりて、人離れたる山の中の木の蔭に、鳥獸も無き所にて一人食ひ居たり。心の樂しき物にも似ずして誦するやう、今曠野中、食飯飲酒大安樂、猶過毘沙門天、勝天帝釋天、この心は「今日人無き所に獨り居て、物を食ひ酒を飲む。安樂なる事、毘沙門帝釋にも勝りたり」と云ひけるを、帝釋きと御覽じてけり。憎しと思しけるにや、留志長者が形に化し給ひて、彼家におはしまして、「我れ山にて、物惜む神を祭りたるしにや、其神はなれて、物の惜しからねば、斯くするぞ」とて、藏どもを開けさせて、妻子を始めて、從者も其れならぬよその人々も、修行者、乞食に至るまで、寶物どもを取り出だして配り取らせければ、皆々悦びて分け取りける程にぞ、誠の長者は歸りたる。藏ども皆開けて、斯く寶ども皆人の取り合ひたる、あさましく悲しさ云はん方なし。「如何に斯くはするぞ」とのよしれども、我と唯だ同じ形の人出で來て斯くすれば、不思議なる事限なし。あれは變化の者ぞ。我こそ其れよ」と云へども、聞き入る人無し。御前に愁訴へ申せば、「母に問へ」と仰せ有れば、母に問ふに、「人に物くるこそ我が子にて候はめ」と申せば、する方無し。「腰の程に、黒子〔底本ひ一本ニヨル〕といふ物の跡ぞ候ひし。其れをしるしに御覽ぜよ」と云ふに、あけて見れば、帝釋其れを學ばせ給はざらんや。二人ながら同じやうに物の跡有れば、力無くて、佛の御許に二人ながら參りたれば、其の時帝釋もとの姿になりて、御前におはしませば、論じ申すべき方無しと思ふ程に、佛の御力にて、やがて須陀洹果を成じたれば、惡き心離れたれば、物惜む心も失せぬ。かやうに帝釋は、人を導かせ給ふ事はかりなし。そとろに長者が財を失はんとは、何しに思し召さん。慳貪の業に因りて、地獄に落つべきをあらはれませ給ふ御心ざしによりて、斯く構へさせ給ひけるこそめでたけれ。

(四) 清水寺に二千度參詣者打、入雙六事

今は昔、人の許に宮仕してある生〔底本なる一本ニヨル〕侍有りけり。する事の無きまゝに、清水へ人負似して、千度詣を二度したりけり。其後いくばくも無くして、主の許に有りける同じやうなる侍と、雙六を打ちけるが、多く負けて、渡すべき物無かりけるに、いたく責めければ、思ひ詫びて、「我れ持ちたる物無し。只今貯へたる物とは、清水に二千度參りたる事のみなん有る。其れを渡さん」と云ひければ、傍らにて聞く人は、はかるなりと、迂愚に思ひて笑ひけるを、この勝ちたる侍、「いと善き事なり。渡さば得ん」と云ひて、「いな、斯くては受け取らじ。〔精進脱力〕三日して、此由申して、己れ渡す由の文書きて、渡さばこそ、受取けらめ」と云ひければ、「善き事なり」と契りて、其日より精進して、三日と云ひける日、「さは、いざ清水へ」と云ひければ、此負侍、この痴者に逢ひたるをかしく思ひて、喜びつれて參りにけり。云ふまゝに文書きて、御前にて師の僧呼びて、事の由申し、さて、「二千度參りつる事、某に雙六に打入れつ」と書きて取らせければ、受け取りつゝ喜びて、伏し拜み罷り出でにけり。其後幾程なくして、この負侍、思ひ懸けぬ事にて捕へられて、獄にゐにけり。取りたる侍は、思ひ懸けぬ便有る妻まうけて、いとよく總つきて、

司つかさどなど成りて、裕あま福ふくくてぞ有りける。目に見えぬものなれど、誠の心を致して受け取りければ、佛哀れと思し召したりけるなんめりとぞ、人は云ひける。

(五) 観音經化くわんおんけいけの蛇人を助け給ふ事

今は昔、鷹たかを役にて過ぐる者有りけり。鷹の放れたるを取らんとて、飛ぶに従ひて行きける程に、遙なる山の奥の谷の片岸に、高き木の有るに、鷹の巢うらくひたるを見つけて、いみじき事見置きたると嬉しく思ひて、歸りて後、今は善き程に成りぬらんと覺ゆる程に、子を下くださんとて又行きて見るに、えもいはぬ深山みやまの、深き谷の底ひも知らぬうへに、いみじく高き榎えの木の枝は、谷にさし掩おほひたるが上かみに、巢をくひて子を産みたり。鷹巢の廻まわりにし歩あく。見るに、えも云はず感あでたき鷹にて有れば、子も善かるらんと思ひて、萬づも知らず昇るに、やう／＼今巢の許に昇らんとする程に、踏ふへたる枝折れて谷に落ち入りぬ。谷の片岸にさし出でたる木の枝に落ち掛かりて、其木の枝を捉へて有りければ、生きたる心地もせず、すべき方無し。見下ろせば底ひも知らず深き谷なり。見上ぐれば、遙に高き峯なり。かき昇るべき方も無し。從者じゆうしやどもは、谷に落ち入りぬれば、疑ひ無く死ぬらんと思ふ。然るにても、如何が有ると見んと思ひて、岸の端はたへ寄りて、わりなく爪つめ立て、見下ろしけれど、僅に見下ろせば、底ひも知らぬ谷の底に、木の葉繁く隔てたる下なれば、更に見ゆべきやうも無し。目くるめき悲しければ、暫しも見えす。すべき方無ければ、さりとて有るべきならねば、皆家に歸りて、斯う／＼と云へば、妻子ども泣き惑へどもかひ無し。逢はぬまでも見に行かま欲しけれど、更に道も



覺えず。又「おはしたりとも、底ひも知らぬ谷にて、さばかり窺き、萬づに見しかども、見え給はざりき」と云へば、「誠にさぞ有るらん」と人々も云へば、行かずなりぬ。さて谷にはすべき方無くて、石のそばの折敷の廣さにて、さし出でたる片端に尻を掛けて、木の枝を捉へて、少しも身動ぐべき方無し。聊も動かば、谷に落ち入りぬべし。如何にも如何にもせん方無し。斯く鷹飼を役にて世過ぐせど、幼くより観音經を讀み奉り、保ち奉りたりければ、助け給へと思ひ入りて、偏に頼み奉りて、此經を夜晝いくらともなく讀み奉る。弘誓深如海と有るわたりを讀む程に谷の底の方より。物のそよ／＼と來る心地のすれば、何にか有らんと思ひて、やをら見れば、えも云はず大きな蛇なりけり。長さ二丈ばかりも有るらんと見ゆるが、差しに差して伺ひ來れば、我は此蛇に食はれなんずるなめりと「イ本无、衍カ」。悲しきわざかな。観音助け給へとこそ思ひつれ。是は如何にしつる事ぞと思ひて、念じ入りて有る程に、唯だ來に來て、我が膝の許を過ぐれど、我を吞まんと更にせず、唯だ谷より上さまへ登らんとする氣色なれば、如何がせん、唯だ是れに取り付きたらば、登りなんかしと思ふ心付きて、腰の刀をやはら抜きて、此蛇の背中に突立て、其れに纏りて、蛇のゆゑ底本を、一本ニヨルくまゝに引かれて行けば、谷より岸の上さまに、こそ／＼と登りぬ。其をり、此男離れてのくに、刀を取らんとすれど、強く突き立てければ、え抜かぬ程に、ひきはづして、背に刀さしながら、蛇はこそろと渡りて、向ひの谷に渡りぬ。此男嬉しと思ひて、家へ急ぎて行かんとすれど、この二三日、聊か身をも動かさず、物も食はず過したれば、影のやうに瘦せさらばひつゝ、かつ「底本ろ、一本ニヨルく

とやう／＼にして家に行き着きぬ。さて家には、今は如何がせんとて、あと弔ふべき經佛の營みなどしけるに、斯く思ひがけずよろほひ來たれば、驚き泣き騒ぐ事限りなし。「斯う／＼の事」と語りて、「觀音の御助けにて、斯く生きたるぞ」と、まさましかりつる事ども泣く／＼語りて、物など食ひて其の夜は休みて、翌朝疾く起きて手洗ひて、いつも讀み奉る經を讀まんとて、引きあげたれば、あの谷にて、蛇の背に突き立てし刀、この御經に、弘誓深如海の所に立ちたり。見るに、いとあさましなどはおろかなり。こは此經の蛇に變じて、我を助けおはしましたしけりと思ふに、哀れに尊く悲し。いみじと思ふ事限りなし。其あたりの人々、是れを聞きて見あざみけり。今さら申すべき事ならねど、觀音を頼み奉らんに、其驗無しと云ふ事有るまじき事なり。

(六) 賀茂の社より御幣紙米等給事

今は昔、比叡山に僧有りけり。いと貧しかりけるが、鞍馬に七日参りけり。夢などや見ゆるとて参りけれど、見えざりければ、今七日とて参れども、猶見えねば、七日を延べ／＼して百日参りけり。其の百日と云ふ夜の夢に、「我はえ知らず。清水へ参れ」と仰せらるゝと見ければ、明くる日より又清水へ百日参るに、又「我はえこそ知らね。賀茂に参りて申せ」と夢に見てければ、又賀茂に参る。七日と思へども、例の夢見ん／＼と参る程に、百日と云ふ夜の夢に、「わ僧が、斯く参るいとほしければ、御幣紙、打散きの米程の物、確かに取らせん」と仰せらるゝと見て、打驚きたる心地、いと心憂く哀に悲し。所々参り歩きつるに、

有りく／＼て斯く仰せらるゝよ。打撒きのかはりばかり給はりて何にかはせん。我れ山へ歸り登らんも人目恥かし。賀茂河にや落ち入りなましなど思へども、又さすがに身をもえ投げず。如何やうに計らはせ給ふべきにかと、ゆかしきかたも有れば、もとの山の坊に歸りて居たる程に、知りたる所より、「物申し候はん」と云ふ人有り。「誰ぞ」とて見れば、白き長櫃を荷ひて、縁に置きて歸りぬ。いと怪しく思ひて、使を尋めれど大方無し。是れを開けて見れば、白き米と善き紙とを一長櫃入れたり。是れは見し夢のまゝなりけり。さりともそこを思ひつれ。是ればかりを誠に給ひたるといと心憂く思へども、如何がはせんと、此米を萬づに使ふに、唯だ同じおほさにて盡くる事無し。紙も同じ如つかへど、失する事無くて、いと別に煌煌しからねど、いと裕福き法師に成りてぞ有りける。猶心長く物參では爲すべきなり。

(七) 信濃國つくまの湯に観音沐浴の事

今は昔、信濃國に筑摩の湯と云ふ所に、萬づの人の浴みける藥湯あり。其わたりなる人の夢に見るやう、「明日の午の時に、観音湯浴み給ふべし」と云ふ。「如何やうにてかおはしまさんずる」と問ふに、答ふるやう、「年三十ばかりの男の鬚黒きが、綾蘭笠きて、節ぐろなる熊皮巻きたる弓持ちて、紺の襖著たるが、夏げの行藤はきて、葦毛の馬に乗りてなん來べき。其れを観音と知り奉るべし」と云ふと見て夢醒めぬ。驚きて、夜明けて人々に告げ廻しければ、人々聞き續きて、其湯に集まる事限りなし。湯を替へ、めぐりを掃除し、標を引き、花香を奉りて、居集まりて待ち奉る。やう／＼午時過ぎ未「底本むつじニ誤ル一本ニヨル」な

る程に、唯だ此夢に見えつるに、つゆ違はず見ゆる男の、顔より始め、著たるもの、馬何かに至るまで、夢に見しに違はず。萬づの人、俄に立ちて額をつく。此男大きに驚きて、心もえざりければ、萬づの人に問へども、唯だ拜みに拜みて、其事と云ふ人無し。僧の有りけるが、手を摩りて額にあて、拜み入りたるが許へ寄りて、「こは如何なる事ぞ、己れを見て斯やうに拜み給ふは」と、「よ」「イ本ニテ補フ」こ訛りたる聲にて問ふ。此僧、人の夢に見えけるやうを語る時、此男云ふやう、「己れ、先いつ頃符をして、馬より落ちて、右の腕を打折りたれば、其れをゆでんとて參で來たるなり」と云ひて、と行きかう行きする程に、人々後に立ちて拜み喧騒する。男し佗て、我が身はさは観音にこそ有りけれ。こゝは「さらばカ」法師に成りなんと思ひて、弓、箆、太刀、刀切り棄て、法師に成りぬ。斯く成るを見て、萬づの人泣き哀れがる。さて見知りたる人出で來て云ふやう、「哀れ彼は上野の國におはするばとうぬしにこそいましけれ」と云ふを聞き、是れが名をば馬頭觀音とぞ云ひける。法師に成りて後、横川に登りて、がてう「イ本覺朝」僧都の弟子に成りて、横川に住みけり。其後は土佐の國にいにけりとなん。

(八) 帽子叟與孔子問答の事

今は昔、唐土に孔子、林の中の岡だちたるやうなる所にて逍遙し給ふ。我は琴を弾き、弟子どもは書を讀む。こゝに舟に乗りたる叟の帽子したるが、舟を蘆に繋ぎて陸に上ほり杖を衝きて琴の調への終るを聞く。人々怪しき者かなと思へり。此翁、孔子の弟子どもを招くに、一人の弟子招かれて寄りぬ。叟云はく、「此琴

ひき給ふは誰ぞ、若し國の王か」と云ふ。「然も有らず」と云ふ。「さは國の大臣か」。「其れにも有らず」。「さは國の司か」。「其れにも有らず」。「さは何ぞ」と問ふに、唯だ國の賢き人として政をし、惡しき事を直し給ふ賢人なり」と答ふ。翁嘲笑ひて、「いみじき癡者かな」と云ひて去りぬ。御弟子不思議に思ひて、聞きしまゝに語る。孔子聞きし「賢き人にこそ有なれ。疾く呼び奉れ」と、御弟子走りて、今舟漕ぎ出づるを呼び返へす。呼ばれて出で來たり。孔子のたまはく、「何わざし給ふ人ぞ」翁の云はく、「させる者にも侍らず、唯だ舟に乗りて、心をゆかささんが爲に罷り歩りくなり。君は又何人ぞ」。「世の政を直さむ爲に罷り歩りくなり」。叟の云はく、「極まりてはかなき人にこそ。世に影を厭ふもの有り、晴に出で、離れんと走る時、影離るゝ事無し。陰にゐて心長閑に居らば、影離れぬべきに、さはせずして、晴に出で、離れんとする時は、力「底本中一本ニヨル」こそ盡くれ、影離るゝ事無し。又犬の屍の水に流れて下る、是れを取らんと走るものは、水に溺れて死ぬ。斯くの如くの無益の事をせらるゝなり。唯だしかるべき居所しめて、一生を送られん、是れ今生の望みなり。此事をせずして心を世に染めて騒がるゝ事は、極めてはかなき事なり」と云ひて、返答も聞かぬ歸り行き、舟に乗りて漕ぎ出でぬ。孔子其の後を見て、二度拜みて、棹の音せぬまで拜み入りて給へり。音せず成りてなん、車に乗りて歸り給ひにける由、人の語りしなり。

(九) 僧伽多(羅力下同)行羅刹國事

昔、天竺に僧伽多と云ふ人有り。五百人の商人を舟に乗せて、金の津へ行くに、俄に惡しき風吹きて、舟を南の方へ吹き持て行く事、矢を射るが如し。知らぬ世界に吹き寄せられて、陸に寄りたるを畏き事にして、さうなく皆惑ひ下りぬ。暫しばかり有りて、いみじくをかしげなる女房、十人ばかり出で來て、歌を歌ひて渡る。知らぬ世界に來て心細く覺えつるに、斯かる感でたき女どもを見付けて、喜びて呼び寄す。呼ばれて寄り來ぬ。近勝りして、らうたきこと物にも似ず。五百人の商人目を付けて、感でたがる事限りなし。商人、女に問うて云はく、「我等賣を求めんために出でにしに、惡しき風に逢ひて、知らぬ世界に來たり。堪へ難く思ふ間に、人々御有様を見るに、憂ひの心皆失せぬ。今は速に具しておはして、我等を養ひたまへ。」「舟は皆損じたれば、歸るべきやう無し」と云へば、此女ども「さらば、いざせ給へ」と云ひて、前に立ち導きて行く。家に着きて見れば、白く高き築地を遠く築き廻して、門を嚴めしく立てたり。其内に具して入りぬ。門の鎖をやがてさしつ。内に入りて見れば、さまざまの屋ども隔てく作りたり。男一人も無し。さて商人ども、皆々とりぐに妻にして住む。互に思ひあふ事限りなし。片時も離るべき心地せずして住む間、此女、日毎に晝寢をする事久し。顔をかしげながら、寢入る度に少し氣疎く見ゆ。僧伽多、此の氣疎きを見て、心えず怪しく覺えければ、やはら起きてかたぐを見れば、様々の隔て隔て有り。茲に一つの隔あり。築地を高く廻らしたり。戸に鎖を強くさせり。側より登りて内を見れば、人多くあり。或は死に、或は呻吟ふ聲す。又白き屍あかき屍多く有り。僧伽多、一人の生きたる人を招き寄せて、「是れは、如何なる人の斯くては有るぞ」と問ふに、答へて云はく、「我は南天竺の者なり。商の爲に海をありきしに、惡しき風に放たれて、

此嶋に來たれば、世にめでたげなる女どもにたばかられて、歸らん事も忘れて住む程に、産みと産む子は皆女なり。限りなく思ひて住む程に、又異商人舟寄り來ぬれば、もとの男をば斯くの如くして、日の食にあつるなり。御身ども、又舟來なば、斯かる目こそは見給はめ。如何にしても、疾く逃げて給へ。此鬼は晝三時ばかりは晝寝をするなり。此の間、よく逃げば逃ぐべきなり。此の籠められたる四方は鐵にて固めたり。其上、よを「一本は、鬮ナラン」筋を斷たれたれば、逃ぐべきやう無し」と、泣く泣く云ひければ、「怪しとは思ひつるに」とて歸りて、残りの商人どもに此由を語るに、皆あきれ惑ひて、女の寝たる隙に、僧伽多を始めとして濱へ皆行きぬ。遙に補陀落世界の方へ向ひて、諸共に聲を上げて觀音を念じけるに、沖の方より大きな白馬、浪の上を泳ぎて、商人等が前に來て俯伏しに伏しぬ。是れ念じ參らする驗なりと思ひて、有る限り皆取り付きて乗りぬ。さて女どもは寢起きて見るに、男ども一人も無し。「逃げぬるにこそ」とて、有る限り濱へ出で、見れば、男みな羣毛なる馬に乗りて、海を渡りて行く。女ども、忽ちに長一丈ばかりの鬼に成りて、十四五丈高くをどり上りて叫び喧騒るに、此商人の中に、女の世にありがたかりし事を思ひ出づる者一人有りけるが、取りはづして海に落ち入りぬ。羅刹奪ひしらがひて、是れを破り食ひけり。さて此馬は、南天竺の西の濱に至りてふせりぬ。商人ども喜びて下りぬ。其馬かき消つやうに失せぬ。僧伽多深く恐ろしと思ひて、此國に來て後、此事を人に語らず。二年を経て、この羅刹女の中に、僧伽多が妻にて有りし、僧伽多が家に來たりぬ。見しよりも猶いみじくめでたく成りて、云はん方なく美しく、僧伽多に云ふ

やう、「君をば、さるべき昔の契にや、殊に睦まじく思ひしに、斯く捨て、逃げ給へるは、如何に思すにか。我が國には、斯かる者の時々出で來て人を食ふなり。されば鎖をさし、築地を高く築きたるなり。其れに斯く人の多く濱に出で、喧騒る聲を聞きて、かの鬼どもの來て、怒れるさまを見せて侍りしなり。あへて我等がしわざに有らず。歸り給ひて後、餘りに戀しく悲しく覺えて、殿は同じ心にも思さぬにや」とて、さめさめと泣く。飄氣の人の心には、然もやと思ひぬべし。されども僧伽多大きに嘆りて、太刀を抜きて殺さんとす。限りなく恨みて、僧伽多が家を出で、内裏に參りて申すやう、「僧伽多は我が年比の夫なり。其れに我を棄て、住まぬ事は、誰にかは訴へ申し候はん。帝王是れを判り給へ」と申すに、公卿殿上人是れを見て、限りなく感でまどはぬ人無し。帝聞し召して窺きて御覽するに、云はん方なく美しく、そこばくの女御后を御覽じ較ぶるに、皆土塊の如し。是れは玉の如し。斯かる者に住まぬ僧伽多が心、如何ならんと思し召しければ、僧伽多を召して問はせ給ふに、僧伽多申すやう、「是れは更に、み内裏へ入れ見るべき者に有らず、返すく恐ろしき者なり。ゆゑしき曲事出で來候はん」と申して出でぬ。帝此由聞し召して、「この僧伽多は云ひ甲斐なき者かな。よし、後の方より入れよ」と、藏人して仰せられければ、夕暮方に參らせつ。帝近く召して御覽するに、氣はひ、姿、みめ、ありさま、かうばしく懐かしき事限りなし。さて二人臥させ給ひて後、二日三日まで起きあがり給はず、世の政事をも知らせ給はず。僧伽多參りて、「ゆゑしき事出で來たりなんす。あさましきわざかな。是れは速に殺され給ひぬる」と申せども、耳に聞き入るゝ人

無し。斯くて三日に成りぬる朝、御格子も未だあがらぬに、此女夜の御殿より出で、立てるを見れば、まみも變りて世に恐ろしげなり。口に血を付けたたり。暫し世の中を見廻して、軒より飛ぶが如くして雲に入りて失せぬ。人々此由申さんとて、夜の御殿に参りたれば、御帳の中より血流れたり。怪しみて御帳の中を見れば、赤き頭一つ残れり。其外は物無し。さて宮の内喧騒る事例へん事なし。臣下男女泣き悲しむ事限り無し。御子の東宮、やがて位に即き給ひぬ。僧伽多を召して、事の次第を召し問はるゝに、僧伽多申すやう、「さ候へばこそ、斯かる者にて候へば、速に追ひ出ださるべきやうを申しつるなり。今は官旨を蒙つて、是れを打ちて参らせん」と申すに、「申さんまゝに仰せ給ふべし」と有りければ、劍の太刀備きて候はん兵百人、弓矢帶したる百人、早船に乗せて出だし立てらるべし」と申しければ、其のまゝに出だし立てられぬ。僧伽多この軍兵を具して、かの羅刹の嶋へ漕ぎ行きつゝ、先づ商人のやうなる者を、十人ばかり濱に下ろしたるに、例の如く、王女ども歌を歌ひて来て、商人を誘ひて女の城に入りぬ。其の後に立ちて、二百人兵亂れ入りて、此女どもを打切り射るに、暫しは恨みたるさまにて、哀れげなる氣色を見せけれども、僧伽多大きな聲を放ちて、走り廻つて探ければ、其の時鬼の姿に成りて、大口をあきて懸かりけれども、太刀にて頭を割り、手足打切りなどしければ、空を飛びて逃ぐるをば、弓にて射落しつ。一人も残る者無し。家には火をかけて焼き拂ひつ。空しき國となし果てつ。さて歸りて、朝廷に此由申しければ、僧伽多にやがて此國を給ひつ。二百人の軍兵を具して其國にぞ住みける。いみじくたのしかりけり。今は僧伽多が子孫、彼國の主にて有りとなん申し傳へたる。

宇治拾遺物語 卷第七

(一) 五色鹿の事

是れも昔、天竺に身の色は五〔今昔物語九ニ作ル〕色にて、角の色は白き鹿一つ有りけり。深山にのみ住みて人に知られず。其山の邊に大きな川有り、其山にまた鳥あり、此かせきを友として過ぐす。或時この川に男一人流れて、既に死なんとす。「我を人助けよ」と叫ぶに、此かせき、此の叫ぶ聲を聞きて、悲しみに堪へずして、河を泳ぎ寄りて、此男を助けてけり。男命の生きぬる事を喜びて、手を摩りて鹿に向ひて云はく、「何事をもちてか此恩を報い奉るべき」と云ふ。かせきの云はく、「何事をもちてか恩をば報はん。唯だ此山に我有りと云ふ事をゆめく、人に語るべからず。我が身の色五色なり。人知りなば、皮を取らんとて必ず殺されなん。此事を恐るゝに依りて、斯かる深山に隠れて、あへて人に知られず。しかるを汝が叫ぶ聲を悲しみて、身の行方を忘れて助けつるなり」と云ふ。時に男、「是れ誠に理なり。更に洩す事有るまじ」と、返すぐ契りて去りぬ。もとの里に歸りて、月日を送れども、更に人に語らず。斯かる程に、國の後夢に見給ふやう、大きなかせき有り、身の色は五色にて角白し。夢覺めて大王に申し給はく、「斯かる夢をなん見つる。此かせき定めて世に有らん。大王必ず尋ね取りて、我に與へ給へ」と申し給ふに、大王官旨を下して、「若し五色のかせき尋ねて奉らん者には、金銀珠玉等の寶、並びに一國等を給ふべし」と

仰せふれらるゝに、此の助けられたる男、内裏に参りて申すやう、「尋ねらるゝ色のかせきは、其の國の深山に候ふ。有り所を知れり。狩人を給て、取りて参らすべし」と申すに、大王大きに喜び給ひて、自ら多くの狩人を具して、此男をしるべに召し具して行幸なりぬ。その深山に入り給ふ。此かせきあへて知らず、峒の中に臥せり。かの友とする鳥是れを見て、大きに驚きて聲をあげて鳴き、耳をくひて引くに、鹿驚きぬ。鳥告げて云はく、「國の大王多くの狩人を具して、此山を取り巻きて、既に殺さんとし給ふ。今は逃ぐべき方無し。如何がすべき」と云ひて、泣く／＼去りぬ。かせき驚きて、大王の御輿の許へ歩み寄るに、狩人ども矢を擧げて射むとす。大王のたまふやう、「かせき恐るゝ事無くして來たれり。定めてやう有らん、射る事なかれ」其時、狩人ども矢をはづして見るに、御輿の前に跪きて申さく、「我れ毛の色を恐るゝに依りて、此山に深く隠れ住めり。しかるに大王如何にして、我が住所をば知り給へるぞや」と申すに、大王のたまはく、「此輿のそばにある顔に痣の有る男、告げ申したるに依りて來たれるなり。」かせき見るに、顔に痣ありて御輿の傍らに居たり。我が助けたりし男なり。かせき彼に向ひて云ふやう、「命を助けたりし時、此恩何にても報じ盡し難き由云ひしかば、此處に我が有る由人に語るべからざる由、返す／＼契りし所なり。然るに今其恩を忘れて、殺させ奉らんとす。如何に汝、水に溺れて死なんとせし時、我が命を顧ず、泳ぎ寄りて助けし時、汝限りなく喜びし事は覺えずや」と、深く恨みたる氣色にて涙を垂れて泣く。其時に大王、同じく涙を流してのたまはく、「汝は畜生なれども、慈悲をもて人を助く。彼男は怒にふけりて恩を忘



れたり。畜生と云ふべし。恩を知るをもて人倫とす」とて、此男を捕へて、鹿の見る前にて頸を切らせらる。又のたまはく、「今より後、國の中にかせきを狩ることなかれ。若し此の官旨を背きて、鹿の頭にても殺す者有らば、速に死罪に行はるべし」とて歸り給ひぬ。其後より天下安全に、國土豊かなりけりとぞ。

(二) 播磨守爲家侍佐多事

今は昔、播磨守爲家と云ふ人有り。其れが内にさせる事も無き侍有り。宇佐太と云ふ人云ひけるを、例の名をば呼ばずして、主も朋輩も唯だ佐多とのみ呼びける。さしたる事は無けれども、實につかはれて年比になりければ、怪しの郡の收納などせさせければ、喜びて其郡に行きて、郡司の許に宿りにけり。爲すべきものゝ沙汰など云ひ沙汰して、四五日ばかり有りて上りぬ。此郡司が許に、京より浮れて、人に賺されて來たりける女房の有りけるを、いとをかしがりて養ひ置きて、物縫はせなど使ひければ、さやうの事なども心得てしければ、哀れなる者に思ひて置きたりけるを、此佐多に従者が云ふやう、「郡司が家に、京のめな〔女房カ〕と云ふ者の、容貌よく髪長きが候ふを隠し据ゑて、殿にも知らせ奉らで置きて候ふぞ」と語りければ、「妬き事かな。わ男、彼處に有りし時は云はで、此處にて斯く云ふは、憎き事なり」と云ひければ、「そのおはしまし、傍らに、切懸の侍りしを隔て、其れがあなたに候ひしかば、知らせ給ひたるらんとこそ思ひ給へしか」と云へば、「此の度は暫しいかじと思ひつるを、暇申して疾く行きて、其女房かなしうせん」と云ひけり。さて二三日ばかり有りて、爲家に「沙汰すべき事どもの候ひしを、沙汰さして参りて候ひしなり。暇給は

りて罷らん」と云ひければ、「事を沙汰さして、何せんに上りけるぞ、疾く往けかし」と云ひければ、喜びて下りけり。行き着けるまゝに、とかくの事も云はず、もとより見馴れなどしたらんにてだに、疎からん程はさや有るべき。従者などにせんやうに、著たりける水干の怪しげなりけるが、綻びたえたるを、切懸の上より投げ越して、高やかに、「是れが綻び縫ひておせよ」と云ひければ、程も無く投げ返したりければ、「物縫はせ事」せすと聞くが、實に疾く縫ひておせたる女人かな」と、荒らゝかなる聲して響めて取りて見るに、綻びは縫はで、陸奥紙の文を、其綻びの許に結び付けて、投げ返したるなりけり。怪しと思ひて廣げて見れば、斯く書きたり。

我れが身は竹の林に有らねどもさたが衣を脱ぎ掛くるかな

と書きたるを見て、哀れなりと思ひ知らん事こそ悲しからめ、見るまゝに大きに腹を立て、「目つぶれたる女人かな。綻び縫ひに遭りたれば、綻びの絶えたる所をば見たにえ見つけずして、「さたの」とこそ云ふべきに、掛けまくも畏き守殿だにも、またこそ許多の年月頃、まだしか召さね。何ぞわ女が「さたが」と云ふべき事か。此女人に物ならはさんと云ひて、世にあさましき所をさへ、何せんかせん」とのり咀ひければ、女房は物も覺えずして泣きけり。腹立ち散らして郡司をさへ罵りて、「いで、これ申して事にあはせむ」と云ひければ、郡司も「よしなき人を哀れみ置きて、其徳には、はては勘當蒙るにこそあなれ」と云ひければ、かたぐ女恐ろしう佗しく思ひけり。斯く腹立ち叱りて、返り上りて、侍にて、「安からぬ事こそ有れ。も

物も覺えぬくさり女にかなしう云はれたる、かうの殿だに「さた」とこそ召せ。此女め「さたが」と云ふべき故やは」と、唯だ腹立に腹だてば、聞く人どもえ心得ざりけり。「さても如何なる事をせられて、斯くは云ふぞ」と問へば「聞き給へよ、申さん。かやうの事は、誰も同じ心に守殿にも申し給へ。君たちの名立てにも有り」と云ひて、有りのまゝの事を語りければ、「さてく」と云ひて笑ふ者も有り、憎がる者も多かり。女をば、皆いとほしがりやさしがりけり。此事を爲家聞きて、前に呼びて問ひければ、我が愁訴なりなたりと喜びて、事々しく伸びあがりて云ひければ、能く聞きて後、其男をば追ひ出だしてけり。女をばいとほしがりて、物取らせなどしけり。心から身を失ひける男とぞ。

(三) 三條中納言水飯の事

今は昔、三條中納言と云ふ人有りけり。三條右大臣の御子なり。才賢くて、もろこしの事、この世「一本國」の事、皆知り給へり。心ばへ賢く膽太く、おしからだちてなんおはしける。笙の笛をなん極めて吹き給ひける。長高く、大きに太りてなんおはしける。太りの餘り、せめて苦しきまで肥え給ひければ、藥師重秀を呼びて、「斯くいみじう太るをば如何がせんとする。立居などするが身の重く、いみじう苦しきなり」とのたまへば、重秀申すやう、「多は湯づけ、夏は水づけにて物を食すべきなり」と申しけり。其まゝに食しけれど、唯だ同じやうに肥え太り給ひければ、せん方無くて、又重秀を召して、「云ひしまゝにすれど、其驗も無し。水飯食ひて見せん」との給ひて、男ども召すに、侍一人参りなれば、「例のやうに、水飯して持て

來」と云はれければ、暫しばかり有りて、御臺持て参るを見れば、御臺かたぐよそひ持て來て、御前に据ゑつ。御臺に箸の臺ばかり据ゑたり。續きて御盤捧げて参る。御まかなひの臺にするを見れば、御盤に白き干瓜、三寸ばかりに切りて十ばかり盛りたり。又詣鮎のおせぐゝに、廣らかなるが、尻頭ばかり押し、三十ばかり盛りたり。大きな金椀を具したり。皆御臺に「とり」「一本アリ」据ゑたり。今一人の侍、大きな銀の提に、銀の匙をたて、重げに持て参りたり。金椀を給ひたれば、匙に御物を抄ひつゝ、高やかに盛り上げて、そばに水を少し入れて参らせたり。殿、臺を引き寄せ給ひて、金椀を取らせ給へるに、さばかり大きにおはする殿の御手に、大きな金椀かなと見ゆる、けしうは有らぬ程なるべし。干瓜三切ばかりに食ひ切りて、五つ六つばかり参りぬ。次に鮎を二切ばかりに食ひ切りて、五つ六つばかり安らかに参りぬ。次に水飯を引き寄せて、二度ばかり箸を廻し給ふと見る程に、おもの皆失せぬ。又とてさし給はす。さて二三度に提の物皆になれば、又提に入れて持て参る。重秀是れを見て、「水飯を役と食すとも、此の提に食さば、更に御太り直るべきに有らず」とて、逃げていにけり。されば、いよく相撲などのやうにてぞおはしける。

(四) 檢非違使忠明の事

是れも今は昔、忠明と云ふ檢非違使有りけり。其れが若かける時、清水の橋の許にて、京童部どもと争をしけり。京童部、手毎に刀を抜きて、忠明を立ち籠めて殺さんとしければ、忠明も太刀を抜きて御堂さまに

上るに、御堂の東の端にも、數多立ちて向ひ合ひたれば、内へ逃げて、葎の許を脇にはさみて、前の谷へをどり落つ。葎、風にしぶかれて、谷の底に、鳥の居るやうにやをら落ちにければ、其れより逃げて去にけり。京童部ども谷を見下ろして、あさましがり立ち並みて見けれども、すべきやうも無くて止みにけりとなん。

(五) 長谷寺參籠男預三利生二事

今は昔、父母も主も無く、妻も子も無くて、唯だ一人有る青侍有りけり。すべき方も無かりければ、「觀音助け給へ」とて、長谷に參りて、御前に俯伏し伏して申しけるやう、「此世に斯くて有るべくは、やがて此御前にて干死に死なん。若し又自らなる便も有るべくば、其由の夢を見ざらん限りは、出でなまし」とて、俯伏し伏したりけるを、寺の僧見て、「こは如何なる者の斯くては候ふぞ。物喰ふ所も見えず、斯く俯伏し伏したれば、寺の爲けがらひ出で來て、大事に成りなん。誰れを師にはしたるぞ。何處にてか物は食ふ」など問ひければ、「斯く便り無き者は、師も如何でか侍らん。物給はる所も無く、哀れと申す人も無ければ、佛の給はん物を食べて、佛を師と頼み奉りて候ふなり」と答へければ、寺の僧ども集まりて、此事、いと不便のことなり。寺の爲に悪しかりなん。觀音をかこち申す人にこそ有んなれ。これ集まりて養ひて候はせん」とて、代るく物を食はせければ、持て來る物を食ひつゝ、御前を立ち去らず候ひける程に、三七日に成りにけり。三七日果て、明けんとする夜の夢に、御帳より人の出で、「此男前世の罪の報いをば知らで、觀音をかこち申して、斯くて候ふこと、いと怪しき事なり。さは有れども、申す事のいとほしければ、

聊の事計ひ給はりぬ。先づ速に罷り出でよ。罷り出でんに、何もあれ手に當らん物を取りて、捨てずして持ちたれ。疾く／＼罷り出でよ」と追はるゝと見て、匍ひ起きて、約束の僧の許行きて、物を打食ひて罷り出でける程に、大門にて蹴躓きて、俯伏しに倒れにけり。起きあがりたるに、有るにも有らず手に握られたる物を見れば、藥すと云ふ物、唯だ一筋握られたり。佛のたまふ物にて有るにや有らんと、いとほかなく思へども、佛の計らはせ給ふやう有らんと思ひて、是れを手弄りにしつゝ行く程に、蟬一つふめきて、顔のめぐりに有るを、煩さければ、木の枝を折りて拂ひ捨つれども、猶唯だ同じやうに煩さくふめきければ、捕へて、腰を此藥すぢにて引き括りて、枝の先につけて持たりければ、腰を括られて、外へえいかで、ふめき飛び廻りけるを、長谷に參りける女車の、前の簾を打被きて居たる兒の、いと美しくしげなるが、「あの男の持ちたる物は何ぞ、かれ乞ひて我に給べ」と、馬に乗りて供にある侍に云ひければ、其侍「其持ちたる物、若君の召すに參らせよ」と云ひければ、「佛の給びたる物に候へど、斯く仰せごと候へば、參らせ候はん」とて取らせたりければ、「此男、いと哀れなる男なり。若君の召す物を安く參らせたる事」と云ひて大柑子を、「是れ、喉乾くらん、たべよ」とて、三ついと香ばしき、陸奥紙に包みて取らせたりければ、侍取り傳へて取らす。藥一すぢが大柑子三つになりぬる事と思ひて、木の枝に結び付けて、肩に打掛けて行く程に、故有る人の忍びて參るよと見えて、侍など數多具して、徒より參る女房の歩み困じて、唯だ立てりに立てり居たるが、「喉の乾けば水飲まよせ」とて、消え入る標にすれば、供の人々手惑ひをして、近く水や有ると、

走り騒ぎ求むれど、水も無し。「此は如何がせんずる、御はたご馬にや若し有る」と問へば、「遙に後れたり」と見えす。ほとほとしき様に見ゆれば、誠に騒ぎ惑ひてしあつかふを見て、喉乾きて騒ぐ人よと見ければ、やはら歩み寄りたるに、「こゝなる男こそ水の有り所は知りたるらめ。此邊近く水の清き所や有る」と問ひければ、「此四五町が内には清き水候はじ。如何なる事の候ふにか」と問ひければ、「歩み困せさせ給ひて、御喉乾かせ給ひて、水欲しがらせ給ふに、水の無きが大事なれば、尋ねぬるぞ」と云ひければ、「不便に候ふ御事かな。水の所は遠くて、汲みて參らば程へ候ひなん。是れは如何が」とて、包みたる柑子を三つながら取らせたりければ、喜び騒ぎて食はせたりければ、其れを食ひて、漸々目を見あげて、「是は如何なりつる事ぞ」と云ふ。御喉乾かせ給ひて、「水飲ませよ」と仰せられつるまゝに、御とのごもり入らせ給ひつれば、水求め候ひつれども、清き水の候はざりつるに、こゝに候ふ男の思ひがけぬに、其心を得て、此柑子を三つ奉りたりつれば、參らせたるなり」と云ふに、此女、「我はさは、喉乾きて絶え入りたりけるにこそ有りけれ。「水飲ませよ」と云ひつるばかりは覺ゆれど、其後の事はつゆ覺えず。此柑子えざらましかば、此野中にて消え入りなまし。嬉しかりける男かな。此男未だ有るか」と問へば、「かしこに候」と申す。「其男暫し有れと云へ。いみじからん事有りとも、絶え入りはてなば、甲斐なくてこそやみなまし。男の嬉しと思ふばかりの事は、斯かる旅にては如何がせんずるぞ。食物は持ちて來たるか、食はせてやれ」と云へば、「あの男暫し候へ。御旅籠馬など參りたらんに、物など食ひて罷れ」と云へば、「承はりぬ」とて居たる程に、旅籠

馬、皮籠馬など來着きたり。「何斯く遙に後れては參るぞ。御旅籠馬などは、常に先立つこそ善けれ。急の事なども有るに、斯く後るゝはよき事かは」と云ひて、やがて轆引き疊など敷きて、「水邊かんなれど、困せさせ給ひたれば、食し物は此處にて參らすべきなり」とて、夫ども道りなどして、水汲ませ食物し出だしたれば、此男に清げにして食はせたり。物を食ふく有りつる柑子何にか成らんずらん、觀音計らはせ給ふ事なれば、よも空しくはやまじと思ひ居たる程に、白く善き布を三むら取り出で、「是れあの男に取らせよ、此柑子の喜びは、云ひ盡すべき方も無けれども、斯かる旅の道にては、嬉しと思ふばかりの事は如何がせん。是れは唯だ志の始めを見するなり。京のおはしまし所はそこくになん。必ず參れ、此柑子の喜びをばせんずるぞ」と云ひて、布三むら取らせたれば、喜びて布を取りて、鹽すぢ一筋が布三むらに成りぬる事と思ひて、脇に挟みて罷る程に、其日は暮れにけり。道づらなる人の家に留りて、明けぬれば、鳥と共に起きて行く程に、日さし上がりて、辰の時ばかりに、えも云はず善き馬に乗りたる人、此馬を愛しつゝ、道も行きやらすふるまはする程に、誠にえも云はぬ馬かな。是れをぞ千貫かけなどは云ふにや有らんと見る程に、此馬俄に倒れて、たゞ死に死ぬれば、主我にも有らぬ氣色にて、下りて立ち居たり。手惑ひして、從者ども、鞍おろしなどして、「如何がせんずる」と云へども、かひ無く死に果てぬれば、手を打ちあさましがり、泣きぬばかりに思ひたれど、すべき方無くて、怪しの馬の有るに乗りぬ。「斯くて此所に有りとすすべきやうもなし。我はいなん、是れともかくもして引き隠せ」とて、下衆男を一人留めていぬれば、この男見て

此馬我が馬にならんとて死ぬるにこそ有んめれ。粟一すぢが柑子三つに成りぬ。柑子三つが布三むらに成りたり。此布の馬に成るべきなめりと思ひて、歩み寄りて、此下衆男に云ふやう、「此は如何なりつる馬ぞ」と問ひければ、陸奥國むつより得させ給へる馬なり。萬づの人の欲しがりて、價も限らず買はんと申しつるをも、惜しみて放ち給はずして、今日斯く死ぬれば、其價少分をも取らせ給はず成りぬ。己れも皮をだに剝はがばやと思へど、旅にては如何がすべきと思ひて、まもり立ちて侍るなり」と云ひければ、「其事なり。いみじき御馬かなと見侍りつるに、はかなく斯く死ぬる事、命有る者はあさましき事なり。誠に旅にては、皮剝ぎ給ひたりとも、え乾し給ふまじ。己れは此邊に侍れば、皮剝ぎて遣ひ侍らん。得させておはしね」と、此布一むら取らせられたれば、男思はずなる所得したりと思ひて、思ひぞ返すと思ふらん、布を取るまゝに、見だにも返らず走り去ぬ。男よく遣りはて、後、手かき洗ひて、長谷の御方に向ひて、「此馬を生けて給はらん」と念じ居たる程に、此馬目を見上ぐるまゝに、頭をもたげて起きんとしければ、やはら手を掛けて起しぬ。嬉しき事限りなし。おくれて来る人もぞ有る、又有りつる男もぞ来るなど危く覺えければ、やうく隠れの方に引き入れて、時移るまで休息やすみで、もとのやうに心地も成りにければ、人の許に引きもて行きて、その布一むらして、轡くわやあやしの鞍くらに替へて馬に乗りぬ。京さまに上る程に、宇治邊うぢにて日暮れにければ、其夜は人の許にとまりて、今一むらの布して、馬の草我が食物などに替へて、其夜はとまりて、翌朝つぎあしたいと疾く京さまに上りければ、九條わたりなる人の家に、物へ往かむするやうにて立ち騒ぐ所あり。此馬京に率ひて行きた

らむに、見知りたる人有りて、「盗みたるか」など云はれんも由無し。やはら是れを賣りてばやと思ひて、かやうの所に馬など用なる物ぞかして、下り走りて寄りて、「若し馬などや買はせ給ふ」と問ひければ、馬がなと思ひける程に、此馬を見て、何如がせんと騒ぎて、「只今替り絹ぬいなどは無きを、この鳥羽とよの田や米などには替へてんや」と云ひければ、なか／＼絹よりは第一の事なりと思ひて、「絹や錢などこそ用には侍れ。己れは旅なれば、田ならば何にかはせんずると思ひ給ふれど、馬の御用有るべくは、唯だ仰せにこそ従はめ」と云へば、此馬に乗り心み馳せなどして、「唯だ思ひつるさまなり」と云ひて、この鳥羽の近き田三町、稻少し米など取らせて、やがて此家を預けて、「己れ若し命有りて歸り上りたらば、其時返し得させ給へ。上らざらん限りは斯くて居給へれ。若し又命絶えて無くも成りなば、やがて我が家にして居給へ。子も侍らねばとかく申す人も侍らじ」と云ひて、預けてやがて下りにければ、其家に入り居て、得たりける米稻など取り置きて、唯だ一人なりけれど、食物有りければ、傍ら其邊かたはなりける下衆など出できて使れなどして、唯だ有りつき居つきにけり。二月ばかりの事なりければ其得たりける田を、半は人に作らせ、今半は我が料かたに作らせたりけるが、人の方の善けれども、其れは世の常にて、己れが分とて作りたるは、殊の外多く出で來たりければ、稻多く刈り置きて、其れより打始め、風の吹き付くるやうに徳付とくきて、いみじき徳人にてぞ有りける。其家主人も普あませずなりにければ、其家も我が物にして、子孫など出で來て、殊の外に榮えたりけるとか。

(六) 小野宮大饗事 付西宮殿富小路大臣等大饗事

今は昔、小野宮殿「○實頼」の大饗に、九條殿「○師輔」の御贈物にし給ひたりける女の装束に、添へられたりける紅くわなの打ちたる細長ほそながを、心無かりける御前まへの取りはづして、遺水いすいに落し入れたりけるを、即ち取り上げて打ち振ひければ、水は走りて乾きにけり。其濡れたりける方の袖の、つゆ水に濡れたる「一本とアリ」も見えで、同じやうに打目うらめなども有りける。昔は打ちたる物は、斯やうになん有りける。又西宮殿「○高明」の大饗に、小野宮殿を「尊者におはせよ」と有りければ、「年老い腰痛くて、庭の拜えすまじければ、え參づまじきを、雨降らば、庭の拜も有るまじければ參りなん。降らずばえなん參るまじき」と、御返事の有りければ、雨降るべき由、いみじく祈り給ひけり。其餘しるしにや有りけん、其日に成りてわざとはなくて、空曇り渡りて、雨そゞぎければ、小野宮「一本ニヨリテ補フ」殿は、臨より上ぼりておはしけり。中島に、大きに木高き松一本立てりけり。其松を見と見る人、「藤の懸かりたらししかば」とのみ見つゝ云ひければ、此大饗の日は正月ひつぎの事なれども、藤の花いみじくをかしく作りて、松の梢たねより懸無う懸けられたるが、時ならぬ物は荒涼あせきに、是れは空の曇りて雨のそぼふるに、いみじく感あはでたうをかしう見ゆ。池の面おもてに影の移りて、風の吹けば、水の上も一つに躍きたる、誠に藤波と云ふ事は、是れを云ふにや有らんとぞ見えける。」後の日、富小路とみこうじの大饗おほいけ「○顯忠」の大饗に、御家のあやしくて、所々の裝飾しつじゆも理無く構へて有りければ、人々も見苦しき大饗かなと思ひたりけるに、日暮れて、事やう／＼果はて方かたになるに、引出物の時ときになりて、東の廊ろうの前に現きたる幕の内に、引出物の馬を引き立てゝ有りけるが、幕の中うちながら嘶なきたりける聲、空を響かしけるを、人



人いみじき馬の聲かなと聞きける程に、幕柱を蹴折りて、口取を引きさげて出で来るを見れば、黒栗毛なる馬の、長八寸餘りばかりなる、ひらに見ゆるまで身太く肥えたる、鬚鬚なれば、額の望月のやうにて白く見えければ、見て譽め喧騒りける聲、驚しきまでなん聞えける。馬の振舞、面だち、尾さし、足つきなどの、こゝはと見ゆる所無く、似合しかりければ、家の裝飾の見苦しかりつるも消えて、めでたうなん有りける。さて世の末までも語り傳ふるなりけり。

(七) 式成、源満、則員等三人被瀧口弓藝事

是れも今は昔、鳥羽院位の御時、白河院の武者所の中に、宮道式成、源満、則員、殊に的弓の上手なりと其時聞え有りて、鳥羽の院位の御時の瀧口に、三人ながら召されぬ。試み有るに、大かた一度もはつさず。これをもてなし興せさせ給ふ。或時三尺五寸的的を給ひて、「是れが第二の黒目、射落して持て参られよ」と仰せ有り。巳の時に給はりて、未の時に射落して参られり。平題三人の中に三手「原本上手イ本ニヨル」なり。「矢とりて、矢取の歸らんを待たば、程程ぬべし」とて、残りの輩、我と矢を走り立ちてとりくして、立ち代りく射る程に、未の時の半ばかりに、第二の黒目射めぐらして、射落して持て参れりけり。是れ既に養由が如しと、時の人譽め喧騒りけるとかや。

宇治拾遺物語 卷第八

(一) 大膳大夫以長前駈問事

是れも今は昔、播磨大膳亮大夫以長と云ふ藏人の五位有りけり。法勝寺千僧供養に、鳥羽院御幸有りけるに、宇治左大臣、○頼長参り給ひけり。前に公卿の車行きけり。後より左府参り給ひければ、車を抑へて有りければ、御前の隨身下りて通りけり。其れに此以長一人下りざりけり。如何なる事にかと見る程に、通らせ給ひぬ。さて歸らせ給ひて、「如何なる事ぞ。公卿逢ひて、禮節して車を抑へたれば、御前の隨身皆下りたるに、未練の者こそ有らめ、以長下りざりつるは」と仰せらる。以長申すやう、「是は如何なる仰せにか候ふらん。禮節と申し候は、前に罷る人後より御出でなり候はと、車を遣りかへして、御車にむかへて牛をかき外して、欄に頸木を置きて通し参らするをこそ、禮節とは申し候ふに、前に行く人車を抑へ候ふとも、後を向けて参らせて、通し参らするは、禮節にては候はで、無禮をいたすに候ふとこそ見えつれば、さらん人には、如何おり候はんずるぞと思ひて、下り候はざりつるに候ふ。誤りて然も候はと、打密せて一言申さばやと思ひ候ひつれども、以長年老い候ひにたれば、抑へて候ひ「底本う、イ本ニヨル」つるに候」と申しければ、左大臣殿、「いさ、此事如何が有るべからん」とて、あの御方に「斯かる事こそ候へ。如何に候はんずる事ぞ」と申させ給ひければ、「以長、ふるさぶらひに似けり」とぞ仰せごと有りける。昔はかきはつして榎「校本



アリ」をば鞍の中に、おりんずるやうに置きけり。是れぞ禮節にては有なるとぞ。

(二) 下野武正大風雨日參法性寺殿事

是れも今は昔、下野武正と云ふ舍人は、法性寺殿に候ひけり。ある折大風大雨降りて、京中の家皆毀れ破れけるに、殿下近衛殿におはしましけるに、南面の方に喧騒る者の聲しけり。誰ならんと思し召して見せ給ふに、武正赤香の上下に簑笠を着て、簑の上に繩を帶にして、槍笠の上を又隙に繩にて繋け付けて、鹿杖を衝きて、走り廻りて行ふなりけり。大方、其姿影しく似るべき物無し。殿南面へ出で、御簾より御覽するに、あさましく思し召して、御馬をなん給ひけり。「イ本る」

(三) 信濃國聖の事

今は昔、信濃國に法師有りけり。さる田舎にて法師に成りにければ、まだ受戒もせで、如何で京に上りて、東大寺と云ふ所にて受戒せんと思ひて、とかくして上りて受戒してけり。さて本の國へ歸らんと思ひけれども由無し。さる無佛世界のやうなる所に歸らじ、此處に居なんと思ふ心付きて、東大寺の佛の御前に候ひて、いづくにか行ひして、長閑やかに住みぬべき所や有ると、萬づの所を見廻しけるに、埧の方に當りて山かすかに見ゆ。其處に行ひて住まんと思ひて行きて、山の中にえも云はず行ひて過ぐす程に、すゝろに小さやかなる鬘子佛を行ひ出だしたり。毘沙門にてぞおはしましける。其處に小さき堂を建て、据ゑ奉りて、えも云はず行ひて年月經る程に、此山の麓に、いみじき下衆徳人有りけり。そこに聖の鉢は常に飛び行きつゝ、物

は入りて来けり。大きな校倉の有るを開けて、物取り出だす程に、此の鉢飛びて、例の物乞ひに來たりけるを、「例の鉢來にたり。ゆゝしく貪欲き鉢よ」とて、取りて倉の隅に投げ置きて、頼に物も入れざりければ、鉢は待ち居たりける程に、物どもしたゝめ果てゝ、此鉢を忘れて、物も入れず取りも出ださで、倉の戸を鎖して主歸りぬる程に、とばかり有りて、此倉すゞろにゆさゞくと揺るぐ。如何に如何にと見騒ぐ程に、揺さゞくて、土より一尺ばかり揺ぎ上がる時に、「こは如何なる事ぞ」と怪しがりて騒ぐ。「誠々、有りつる鉢を忘れて、取り出でず成りぬる、其れが仕業にや」など云ふ程に、此の鉢藏より漏り出でゝ、此鉢に藏乗りて、たゞ昇りに空さまに一二丈ばかり昇る。さて飛び行く程に、人々見喧騒りあざみ騒ぎ合ひたり。藏の主も更にすべきやうも無ければ、「此倉の往かん所を見ん」とて後に立ちて行く。其邊の人々も皆走りけり。さて見れば、やう／＼飛びて、河内國に、此聖の行ふ山の中に飛び行きて、聖の坊の傍にどうと落ちぬ。いとどあさましと思ひて、さりとて有るべきならねば、此藏主、聖の許に寄りて申すやう、「斯かるあさましき事なん候ふ。此鉢の常に參で來れば、物入れつゝ參らするを、今日紛亂しく候ひつる程に、倉に打置きて忘れて、取りも出ださで、鎖をさして候ひければ、此藏唯だ揺ぎに揺ぎて、此處になん飛びて參で落ちて候ふ。此倉返し給ひ候はん」と申す時に、「誠に怪しき事なれど、飛びて來にければ、藏はえ返し取らせじ。此處にかやうの物も無きに、自ら物をも置かんに善し。中ならん物は、さながら取れ」との給へば、主の云ふやう、「如何にしてか、忽ちに運び取り返さん、千石積みて候ふなり」と云へば、「其れはいと安き事

なり。確に我れ運びて取らせん」とて、此鉢に一俵を入れて飛ばすれば、雁などの續きたるやうに、残りの俵ども續きたる、群雀などのやうに飛び續きたるを見るに、いとどあさましく尊とければ、主の云ふやう、「暫し、皆なつかはしそ。米二三百石は留めて使はせ給へ」と云へば、聖「有るまじき事なり。其れ此處に置きては、何にかはせん」と云へば、「さらば、唯だ使はせ給ふばかり、十廿をも奉らん」と云へば、「さまでも入るべき事の有らばこそ」とて、主の家に確に皆落居にけり。かやうに尊く行ひて過ぐす程に、其比延喜の御門重く煩はせ給ひて、さま／＼の御祈りども、御修法御讀經など萬づにせらるれど、更にえおこたらせ給はず。或人の申すやう「河内の國信貴と申す所に、此年來行ひて、里へ出づる事もせぬ聖候ふなり。其れこそ、いみじく尊く願有りて、鉢を飛ばし、さて居ながら、萬づ有難き事をし候ふなれ。其れを召して祈りせさせ給はゞ、平癒らせ給ひなんかし」と申せば、さらばとて、藏人を御使にて召しにつかはす。往きて見るに、聖のさま殊に貴くめでたし。斯う／＼宣旨にて召すなり。疾く／＼參るべき由云へば、聖「何しに召すぞ」とて、更に動きげも無ければ、「斯う／＼御惱大事におはします。祈り參らせ給へ」と云へば、「其れは參らずとも、此處ながら祈り進らせ候はん」と云ふ。「さては、若し平癒らせおはしましたりとも、如何でか聖の験とは知るべき」と云へば、「其れは、誰が験と云ふ事知らせ給はずとも、御心地だに平癒らせ給ひなば、よく候ひなん」と云へば、藏人「さるにても、如何でか數多の御祈りの中にも、其験と見えんこそよからめ」と云ふに、「ちらば祈り參らせんに、龜の護法を參らせん。自ら御夢にも幻にも御覺せば、

さとは知らせ給へ。劍を編みつゝ衣に着たる護法なり。我は更に京へはえ出でじ」と云へば、敕使歸り参りて、斯うくと申す程に、三日と云ふ晝つ方、ちと微睡ませ給ふとも無きに、惶々とある物の見えければ、如何なる物にかとて御覽すれば、あの聖の云ひけん劍の護法なりと思し召すより、御心地爽々と成りて、聊か心苦しき御事も無く、例さまに成らせ給ひぬ。人々喜びて、聖を尊がり感で合ひたり。御門も限りなく尊く思し召して、人を遣はして、「僧都僧正にやなるべき。又其寺に庄などや寄すべき」と仰せ遣はす。聖承りて、「僧都僧正、更に候ふまじき事なり。又かかる所に庄など寄りぬれば、別當なにくれなど出で来て、なか／＼困惑しく罪得がましく候ふ。唯だ斯くて候はん」とて止みにけり。かかる程に、此聖の姉そ一人有りける。「此聖、戒せんとて上ほりしまゝ見えぬ一本ず」、かうまで年比見えぬは、如何に成りぬるやらん、覺束なきに尋ねて見ん」とて上りて、東大寺山階寺の邊を、「まうれん〇命蓮又ハ明練小院と云ふ人や有る」と尋ねれど、知らずとのみ云ひて、知りたると云ふ人無し。尋ね佗びて、如何にせん、是れが行方聞きてこそ歸らめと思ひて、其の夜東大寺の大佛の御前にて、「此まうれんが有り所教へさせ給へ」と、夜一夜申して、打微睡みたる夢に、此佛仰せらるゝやう、「尋ぬる僧の有り所は、是れより未申の方に山有り。其山に雲た靡きたる所を行きて尋ねよ」と仰せらるゝと見て覺めたれば、曉方に成りにけり。いつしか疾く夜の明けよかしと思ひて見居たれば、ほの／＼と明方になりぬ。未申の方を見やりければ、山階に見ゆるに、禁の聖た歸きたり。嬉しくて、其方を指して行きたれば、誠に堂など有りと思ゆる所へ寄りて、「まうれん小

院やいまする」と云へば、「誰そ」と出で、見れば、信濃なりし我が姉なり。「こは如何にして尋ねましたるぞ、思ひがけず」と云へば、有りつる有様を語る。「さて如何に寒くておはしつらん、是れを著せ奉らん」とて、持たりつる物なりとて、引き出でたるを見れば、ふくたいと云ふ物を、なべてにも似ず太き糸して、厚々と細かに強げにしたるを持て來たり。喜びて取りて著たり。もとは紙ぎぬ一重をぞ著たりける。さていと寒かりけるに、是れを下に著たりければ、暖かにて善かりけり。さて多くの年頃行ひけり。さて此姉の尼君も、本の國へ歸らず留り居て、其處に行ひてぞ有りける。さて多くの年頃、此ふくたいをのみ著て行ひければ、果てには破れ／＼と著なして有りけり。鉢に乗りて來たりし轆を飛び倉とぞ云ひける。其轆に著、ふくたいの破れなどは納めてまだ有んなり。其破れの端をつゆばかりなど、自ら縁にふれて得たる人は、守りにしけり。其轆も朽ち破れて未だ有んなり。其の木の間を、つゆばかり得たる人は守りにし、毘沙門を作り奉りて持たる人は、必ず徳付かぬは無かりけり。されば聞く人縁を尋ねて、其倉の木の間をば買ひ取りける。さて信貴とて、えも云はず驗ある所にて、今に人々明暮參る。此毘沙門は、まうれん聖の行ひ出だし奉りけるとか。

(四) 敏行朝臣事

是れも今は昔、敏行と云ふ歌詠みは、手を善く書きければ、此彼が云ふに隨がひて、法華經を二百部ばかり書き奉りたりけり。かかる程に俄に死にけり。我は死ぬるぞとも思はぬに、俄に搦めて引きはりて率て行く

は、我ばかりの人を、朝廷と申すとも、かくせさせ給ふべきか、心得ぬわざかなと思ひて、搦めて行く人に、「是れは如何なる事ぞ。何事の過ちに依り、斯くばかりの目をば見るぞ」と問へば、「いさ我は知らず、確に召して來と仰せを承りて率て參るなり。そこは法華經や書き奉りたる」と問へば、「しかく書き奉りたり」と云へば、「我が爲には、いくらか書きたる」と問へば、「我が爲とも侍らず、唯だ人の書かすれば、二百部ばかり書きたるらんと覺ゆる」と云へば「其事の愁訴出で來て、沙汰の有らんするにこそ有めれ」とばかり云ひて、又他事も云はで行く程に、あさましく人の向ふべくもなく、恐ろしと云へばおろかなる物の、眼を見れば電光りのやうにひらめき、口は煙などのやうに恐ろしき氣色したる軍の、鎧を着て、えも云はぬ馬に乗り續きて、二百人ばかり逢ひたり。見るに肝惑ひ、倒れ伏しぬべき心地すれども、我にも有らず引き立てられて行く。さて此軍は先立ちて去ぬ。我れ搦めて行く人に、「あれは如何なる軍ぞ」と問へば、「え知らぬか、是れこそ汝に經あつらへて書かせたる者どもの、其功德に依りて、天にも生れ、極樂にも參り、又人に生れかへるとも、善き身とも生るべかりしか。汝が其の經書き奉るとて、魚をも食ひ女にも觸れて、清まはる事も無くて、心をば女の許に置いて書き奉りたれば、其功德の協はずして、斯くいかう「一本り」武き身に生れて、汝を妬がりて「呼びて給はらん、其の報せん」と愁訴申せば、此度は道理にて召さるべき度に有らねども、此愁訴に依りて召さるるなり」と云ふに、身も切るやうに心もしみこほりて、是れを聞くに死ぬべき心地す。「さて我をば如何にせんとて、斯くは申すぞ」と問へば、「愚かにも問ふかな。其持た

りつる太刀刀にて、汝が身は先づ二百に切りさきて、各一切づゝ取りてんとす。其二百の切に、汝が心も分れて、切毎に心の有りて、責められんに隨ひて、悲しく佗しき目を見んずるぞかし。堪へ難き事譬へん方有らんやは」と云ふ。「さて其事をば如何にしてか助かるべき」と云へば、「更に我も心も及ばず、況して助かるべき力は有るべきに有らず」と云ふに、歩むそらなし。又行けば大きな川有り、其水を見れば、濃く磨りたる墨の色にて流れたり。怪しき水の色かなと見て、「是れは如何なる水なれば、墨の色なるぞ」と問へば、「知らずや、是れこそ汝が書き奉りたる法華經の墨の斯く流るゝよ」と云ふ。「其れは如何なれば、斯く川にて流るゝぞ」と問ふに、「心の善く誠を致して清く書き奉りたる經は、さながら王宮に納められぬ。汝が書き奉りたるやうに、心きたなく、身穢はしうて書き奉りたる經は、廣き野邊に捨て置きたれば、其墨の雨に濡れて、斯く川にて流るゝなり。此川は、汝が書き奉りたる經の墨の川なり」と云ふに、いと恐ろしともおろかなり。「さて此事は、如何にしてか助かるべき事有る、教へて助け給へ」と泣くく云へば、「いとほしけれども、尋常き罪ならばこそは、助かるべき方をも搦め。是れは心も及び、口にも述べべきやうも無き罪なれば、如何がせん」と云ふに、ともかくも云ふべき方無うて往く程に、恐ろしげなるもの走り逢ひて、「遅く率て參る」と誠め云へば、其れを聞き、さけ「〇きカ」立てゝ率て參りぬ。大きな門に、我がやうに引きはられ、又鐵柵など云ふ物を接げられて、結び搦められて、堪へ難げなる目とも見たる者どもの、數も知らず十方より出で來たり集まりて、門に所無く入り満ちたり。門より見入れば、逢ひたりつ

る軍ども、目を瞞し舌舐りをして、我を見付けて、疾く率て來かしと思ひたる氣色にて、立ちさまよふを見るに、いとと士も踏まれず。「さてもく如何にし侍らんずる」と云へば、其控へたる者、「四卷經書き奉らんと云ふ願を起せ」と密に云へば、今門入る程に、此とがは四卷經書き供養して、願はんと云ふ願を發しつ。さて入りて、廳の前は引き据まつ。事沙汰する人、「彼は彼行か」と問へば、「さに侍り」と、此の附きたる者答ふ。「愁訴ども頻りなるものを、何と遅くは参りつるぞ」と云へば、「召し捕りたるまゝ、滞り無く率て参りて候ふ」と云ふ。「娑婆世界にて何事かせし」と問はるれば、「仕りたる事も無し。人の誂へに従ひて、法華經を二百部書き奉りて侍りつる」と答ふ。其れを聞きて、「汝はもと受けたる所の命は、今暫く有るべけれども、其の經書き奉りし事の穢はしく、清からで書きたる愁訴の出で來て、揃められぬるなり。速に愁訴申す者どもに出だし賜びて、彼等が思ひのまゝにせさすべきなり」と有る時に、有りつる軍ども、喜べる氣色にて請け取らんとする時、戰慄く、「四卷經書き供養せんと申す願の候ふを、其事をなん未だ遂げ候はぬに、召され候ひぬれば、此の罪重く、いと争ふ方候はぬなり」と申せば、此沙汰する人聞き驚きて、「然る事やは有る。誠ならば不便なりける事かな。帳を引きて見よ」と云へば、又人大きな文を取り出でて、ひくく見るに、我がせし事ども脱さず記しつけたる中に、罪の事のみ有りて、功德の事一つも無し。此門入りつる程に、起しつる願なれば、奥の果に注されにけり。文引き果て、今はとする時に「さる事侍り。此奥にこそ注されて侍れ」と申し上げれば、「さてはいと不便の事なり。此度の暇をば免し給ひて、

此願遂げさせて、ともかくも有るべき事なり」と定められければ、この目を瞞かして、我を疾く得んと、手をねぶりつる軍ども失せにけり。「儘に娑婆世界に歸りて、其の願必ず遂げさせよ」とて、免さるゝと思ふ程に生き返りにけり。妻子泣き合ひて有りける二日と云ふに、夢の覺めたる心地して、目を見あけたりければ、「生き返りたり」とて、喜びて湯飲ませなどするにぞ、然は我は死にたりけるにこそ有りけれと心得て、勘へられつる事ども、有りつる有様、願を起して、其力にて免されつる事など、明らかなる鏡に向ひたらんやうに覺えければ、いつしか我が力付きて、清まはりて、心清く四卷經供養し奉らんと思ひけり。やうく日比經比過ぎて、例のやうに心地も成りにければ、いつしか四卷經書き奉るべき紙、經師に打續がせ、辨かけさせて、書き奉らんと思ひけるが、猶もとの心の色めかしう、經師の方に心の至らざりければ、此の女の許に行き、あの女懸想し、如何で善き歌詠まなど思ひける程に、暇無くて、はかなく年月過ぎて、經をも書き奉らで、此の受けたりける齡限りにや成りにけん、遂に失せにけり。其後二二年ばかり隔て、紀友則と云ふ歌詠みの夢に見えけるやう、此の敏行と思しき者に逢ひたれば、敏行とは思へども、様形違ふべき方もなく、あさましく恐ろしうゆゑしげにて、現にも語りし事を云ひて、「四卷經書き奉らんと云ふ願によりて、暫くの命を助けて返されたりしかども、猶心の愚か怠りて、其の經を書かずして遂に失せにし罪に因りて譬ふべき方もなき苦しみを受けてなん有るを、若し哀れと思ひ給はゞ、其の料の紙は未だ有るらん。其の紙尋ね取りて、三井寺に某と云ふ僧にあつらへて、書き供養をさせて給へ」と云ひて、大きな膝をあげて

泣き叫ぶと見て、汗水になりて、驚きて明くるや遅きと、其の料紙尋ね取りて、やがて三井寺に行きて、夢に見えつる僧の許へ行きければ、僧見付けて、「嬉き事かな。只今人を参らせん、自らにても参りて申さんと思ふ事の有りつるに、斯くおはしましたる事の嬉しさ」と云へば、先づ我が見つる夢をば語らで、「何事ぞ」と問へば、「今宵の夢に、故彼行朝臣の見え給へるなり。一四卷經書き奉るべかりしを、心の怠りにえ書き供養し奉らずなりにし、其罪によりて、極まりなき苦を受くるを、其の料紙は、御前の許になん、其紙尋ね取りて、四卷經書き供養し奉れ、事のやうは御前に問ひ奉れ」と有りつる、大きな聲を放ちて叫び泣き給ふと見つる」と語るに、哀れなる事おろかならず。さし向ひてさめぐくと二人泣きて、「我もしかぐ夢を見て、其紙を尋ね取りて、此處に持ちて侍り」と云ひて取らすに、いみじう哀れがりて、此僧誠をいたして、手づから自ら書き供養し奉りて後、又二人が夢に、此の功德に依りて、堪へ難き苦しみ少し免れたる由、心地とげにて、形も始めには變りて、よかりけりとなん見えけり。

(五) 東大寺華嚴會の事

是れも今は昔、東大寺に恒例の大法會有り、華嚴會とぞ云ふ。大佛殿の内に高座を立て、講師のほりて、堂の後より、掻い消つやうにして逃げて出づるなり。古老傳へて云はく、「御堂建立の始め、齋賣る翁來たる。こゝに本願の上皇、召し留めて大會の講師とす。賣る所の齋を經机に置く、變じて八十華嚴經と成る。即ち講説の間梵語をさへづる。法會の中間に、高座にして忽ちに失せをはりぬ。」又云はく、「齋を賣る翁、

杖を持ちて齋を荷ふ。其齋の數八十、則ち變じて八十華嚴經と成る。件の杖の木、大佛殿の内、東回廊の前に揃き立つ。忽ちに枝葉をなす。是れ白樺の木なり。今伽藍の榮え衰へんとするに従ひて、此の木榮え枯ると云ふ。かの會の講師、此比までも、中間に高座より下りて後戸より掻い消つやうにして出づる事、是れを學ぶなり。彼の齋の杖の木、三十四年がさきまでは、葉を胷くて榮えたり。其の後猶枯木にて立てりしが、この度平家の炎上に焼け終りぬ、世の末ぞかし口惜しかりけり。

(六) 獵師佛を射る事

昔、愛宕の山に久しく行ふ聖有りけり。年比行ひて坊を出づる無事し。西の方に獵師有り、此聖を尊みて、常には詣で、物奉りなどしけり。久しく参らざりければ、御袋に干飯など入れて詣でたり。聖悦びて、日比の覺東なさなどの給ふ。其中に、居寄りてのたまふやうは、「此程、いみじく尊き事有り。此年來、他念なく經をたもち奉りて有る驗やらん、此夜比、普賢尊象に乗りて見え給ふ。今宵留りて拜み給へ」と云ひければ、此の獵師「世に尊き事にこそ候ふなれ。さらば留りて拜み奉らん」とて留りぬ。さて聖の使ふ童の有るに問ふ、「聖のたまふやう、如何なる事ぞや、己れも、此の佛をば拜み参らせたりや」と問へば、童は「五六度ぞ見奉りて候ふ」と云ふに、獵師、我も見奉りつる事もや有るとて、聖の後にいねもせずして起きみたり。九月二十日の事なれば、夜も長し。今やくと待つに、夜半過ぎぬらんと思ふ程に、東の山の嶺より月の出づるやうに見えて、嶺の嵐もすさまじきに、此坊の内、光さし入りたるやうにて、明く成りぬ。見れば、



普賢フセ 白象ハクゾウに乗りて、やうくおはして、坊の前に立ち給へり。聖泣くく拜みて、「如何に、主殿しゅだんは拜み奉るや」と云ひければ、「如何がは此の童も拜み奉る。をひく、いみじう尊し」とて、獵師リョウシ思ふやう、聖は年比經をもたも讀み給へばこそ、其の目ばかりに見え給はめ。この童我が身などは、經の向きたる方も知らぬに、見え給へるは心得られぬ事なりと、心の中に思ひて、此事試みてん、是れ罪得べき事に有らずと思ひて、尖矢せんやを弓につかひて、聖の拜み入りたる上よりさしこして、弓を強く引きて、ひやうと射たりければ、御胸の程に當るやうにて、火を打消つ如くにて光も失せぬ。谷へ轟とどろめきて逃げ行く音ねす。聖「是れは如何にし給へるぞ」と云ひて、泣き惑ふ事限りなし。男申しけるは、「聖の目にこそ見え給はめ。我が罪深き者の目に見え給へば、試み奉らんと思ひて射つるなり。誠の佛ならば、よも矢は立ち給はじ。されば怪しき物なり」と云ひけり。夜明けて、血を覚めて行きて見ければ、一町ばかり行きて、谷の底に大きな狸、胸より尖矢を射通されて死にて伏せりけり。聖なれど無智なれば、斯やうに化まされけるなり。獵師なれども、慮おぼ有りければ狸を射害し、その化を顯はしけるなり。

(七) 千手院僧正仙人にあふ事

昔、山の西塔さいた千手院に住み給ひける、靜觀じやうくわん僧正と申しける座主、夜深く、尊勝そんじやう陀羅尼だらにを終夜見て明して、年比になり給ひぬ。聞く人もいみじく尊みけり。陽勝やうじやう仙人と申す仙人、空を飛びて此の坊の上を過ぎけるが、此の陀羅尼の聲を聞きて、下りて勾欄こうらんの矛木ぼうぼくの上に居給ひぬ。僧正怪しと思ひて問ひ給ひければ、蚊の

聲のやうなる聲して、一陽勝仙人にて候ふなり。空を過ぎ候ひつるが、尊勝陀羅尼の聲を承りて参り侍るなり」とのたまひければ、戸を開けて請せられければ、飛び入りて前に居給ひぬ。年比の物語して、「今は罷りなん」とて立ちけるが、人けにおされて、え立たざりければ、「香爐の煙を近く寄せ給へ」との給ひければ、僧正香爐を近くさし寄せ給ひける、其の煙に乗りて空へ上りにけり。此僧正は年を経て、香爐をさじ上げて、煙を立てゝぞおはしける。此仙人は、もと使ひ給ひける僧の、行ひして失せにけるを、年比怪しと思しけるに、斯くして参りたりければ、あはれ／＼と思してぞ、常に泣き給ひける。

宇治拾遺物語 卷第九

(一) 瀧口道則術をならふ事

昔、陽成院位にておはしましける時、瀧口道則官旨を承り、陸奥へ下る間、信濃國ひくうと云ふ所に宿りぬ。郡の司に宿をとれり。設けてもてなして後、主の郡司は郎等引き具して出でぬ。いも寝られざりければ、やはら起きて佇みありくに、見れば屏風を立てまはして、疊など清げにしき、火燈して、萬づ目安きやうにしつらひたり。空炷物するやらんと香ばしき香しけり。いよ／＼心にくゝ覺えて、能く窺きて見れば、年二十七八ばかりなる女一人有りけり。みめ事がら、姿有様殊にいみじかりけるが、只一人臥したり。見るまゝに、唯だ有るべき心地せず、あたりにも無し。火は几帳の外に燈してあれば、明くあり。さて此の道則思ふやう、よに／＼懸るにもてなして、心ざし有りつる郡司の妻を關心たなき心つかはん事いとほしけれど、此人の有様を見るに、唯だ有らん事かなはじと思ひて、寄りて傍らに臥すに、氣憎くも驚かず、口覆ひをして笑ひ臥したり。云はん方なく嬉しく覺えければ、長月十日比なれば、衣もあまた著す、一重ねばかり男も女も著たり。香しき事限りなし。我が衣をば脱ぎて、女の懐へ入るに、暫しは引き寒くやうにしけれど、あながちに氣憎からず懐に入れぬ。男の陰莖の痒きやうなりければ、探りて見るに物無し。驚き怪しみて、能く／＼探れども、隙の鬚を探るやうにて、凡て跡形無し。大きに驚きて、此女のためたげな

るも忘れぬ。此男探りて怪しみるめくに、女少し微笑みて有りければ、いよく心得ず覺えて、やはら
起きて、我が寢所へ歸りて探るに更に無し。あさましくなりて、近く使ふ郎等と呼びて、斯かるとは云はで、
「此處にめでたき女有り、我も行きたりつるなり」と云へば、喜びて此男いぬれば、暫し有りて、よに／＼
あさましげにて、此男出で來たれば、是れも然るなめりと思ひて、又こと男を誘めて遣りつ。是れも又暫し
有りて出で來ぬ。空を仰ぎてよに心得ぬ氣色にて歸りてけり。斯くの如く七八人まで郎等を遣るに、同じ氣
色に見ゆ。斯くする程に、夜も更けぬれば、道則思ふやう、宵に主人のいみじう持成しつるを、嬉しと思ひ
つれども、斯く心得ずあさましき事の有れば、疾く出でんと思ひて、未だ明け果てざるに急ぎて出づれば、
七八町行く程に、後より呼ばひて、馬を馳せ來る者有り。走り着きて、白き紙に包みたる物をさし上げて持
て來。馬を控へて待てば、有りつる宿に通ひしつる郎等なり。「是れは何ぞ」と問へば、「是れ郡司の參らせ
よと候ふ物にて候ふ。斯かる物をば、如何で棄てよはおはし候ぞ。かたの如く御設けして候へども、御急ぎ
に、是れをさへ落させ給ひてけり。されば拾ひ集めて參らせ候ふ」と云へば、「いで何ぞ」と取りて見れば、
松茸まつたけを包み集めたるやうにて有る物九つ有り。あさましく覺えて、八人の郎等ども、怪しみをなして見る
に、誠に九つの物有り、一度にさつと失せぬ。さて使は、やがて馬を馳せて歸りぬ。其折、我が身より初め
て、郎等ども皆「有り／＼」と云ひけり。さて奥州にて金受取りて歸る時、又信濃の有りし郡司の許へ行
きて宿りぬ。さて郡司に、金、馬、鷹たか、鷹たかなど多く取らす。郡司よに／＼喜びて、「是れは如何に思して、

斯くはし給ふぞ」と云ひければ、近く寄りて云ふやう、「かたはら痛き申し事なれども、初め是れに參りて
候ひし時、怪しき事の候ひしは、如何なる事にか」と云ふに、郡司物を多く得て有りければ、さがたく思
ひて、有りのまゝに云ふ。「其れは若く候ひし時、此國の奥の郡に候ひし郡司の、年寄りて候ひしが、妻の
若く候ひしに、忍びて罷り寄りて候ひしかば、斯くの如く失ひてありしに、怪しく思ひて、其の郡司に、懇
ろに心ざしを盡して習ひて候ふなり。若し習はんと思し召さば、此度は公おんの御使なり。速かに上ほり給ひ
て、又わざと下り給ひて、習ひ給へ」と云ひければ、其の契りを成して上りて、金など參らせて、又暇を申
して下りぬ。郡司に、さるべき物など持ちて下りて取らすれば、郡司大きに喜びて、心の及ばん限りは教へ
んと思ひて、「是れは腫氣の心にて習ふ事にては候はず、七口水を浴み精進をして、習ふ事なり」と云ふ。其
のまゝに清まはりて、其日になりて、唯だ二人連れて深き山に入りぬ。大きな河の流るゝ邊ほとりに行きて、さ
ま／＼の事どもを、えも云はず罪深き誓言ちかひごころども立てさせけり。其郡司は水上へ入りぬ。「其河上より流れ來
ん物を、如何にも／＼、鬼にても有れ、何にても有れ抱け」と云ひて行きぬ。暫しばかり有りて、水上の
方より雨降り風吹きて、暗くなり水増る。暫し有りて、川上より頭一抱きばかりなる大蛇の、目は金輪かなぐるを入
れたるやうにて、背は青く紺青くろあざを塗りたるやうに、頸の下は紅のやうにて見ゆるに、先づ來ん物を抱けと云
ひつれども、せん方なく恐ろしくて、草の中に伏しぬ。暫し有りて郡司來りて、「如何に、取り給ひつや」と
云ひければ、「かう／＼覺えつれば、取らぬなり」と云ひければ、「斯く口惜しき事かな、さては此事はえ

習ひ給はじ」と云ひて、「今一度試みむ」と云ひて又入りぬ。暫しばかり有りて、やを「やまき本」ばかりなる猪の出で来て、石をはらくとくだけば、火煙々と出づ。毛を荷かして走りて懸かる。せん方なく恐ろしけれども、是れをさへと思ひ切りて、走り寄りて抱きて見れば、朽木の三尺ばかり有るを抱きたり。妬く悔しき事限りなし。初めのも、斯かる物にてこそ有りけれ。何どか抱かざりけんと思ふ程に、郡司來りぬ。「如何に」と問へば、「かうく」と云ひければ、「前の物失ひ給ふ事は、之習ひ給はずなりぬ。さてこと事のはかなき物を、物に成す事は習ひぬめり。されば其れを教へん」とて、教へられて歸り上りぬ。口惜き事限りなし。大内に参りて、澁口どもの履きたる杵どもを、争ひをして、皆犬の子になして走らせ、古き薬杵を、三尺ばかりなる鯉に成して、薬盤の上に跳らす事などをしけり。御門此由を聞き召して、黒戸の方に召して習はせ給ひけり。御几帳の上より、賀茂祭などわたし給ひけり。

(二) 寶志和尚影の事

昔、もろこしに寶志和尚と云ふ聖有り。いみじく尊くおはしければ、御門かの聖の姿を影に書き留めんとて、繪師三人を遣はして、若し一人しては、書き違ゆる事有りとして、三人して面々に寫すべき由、仰せ含められて遣はさせ給ふに、三人の繪師、聖の許へ参りて、斯く宣旨を蒙りて参でたる由申しければ、「暫し」と云ひて、法服の装束して出で合ひ給へるを、三人の繪師、各書くべき絹をひろげて、三人並びて筆を下さんとするに、聖「暫らく、我が眞實の影有り、其れを見て書き寫すべし」と有りければ、繪師左右なく書か

ずして、聖の御影を見れば、大指の爪にて、額の皮をさし切りて、皮を左右へ引き退けて有るより、金色の菩薩の顔をさし出でたり。一人の繪師は十一面觀音と見る、一人の繪師は聖觀音と拜み奉りける。各見るまゝに寫し奉りて、持ちて参りたれば、御門意き給ひて、別の便を給ひて問はせ給ふに、掻い消つやうにして失せ給ひぬ。其れよりぞ、尋常人にてはおはせざりけりと申し合へりける。

(三) 越前敦賀、女觀音たすけ給ふ事

越前の國に、敦賀と云ふ所に住みける人有りけり。とかくして、身一つばかり佗しからで過ぐしけり。女人より外に又子も無かりければ、此女をぞまた無きものに愛なくしける。此女を、我があらん折たのもしく見置かんとて、男逢はせけれど、男も堪らざりければ、是れやくと四五人までは逢はせけれども、猶たまらざりければ、し佗びて後には逢はせざりけり。居たる家の後ろに堂をたて、「此女助け給へ」とて、觀音を掘り奉りける。供養し奉りなどして、いくばくも經ぬ程に父失せにけり。其れだに思ひ歎くに、引き續くやうに母も失せにければ、泣き悲しめども云ふかひも無し。知行所なども無くて、かまへて世を過ぐしければ、鬪なる女一人有らんには、如何にしてかはかしくしき事有らん。親の物少し有りける程は、使はるゝ者四五人有りけれども、物失せ果てゝければ、使はるゝ者一人も無かりけり。物食ふ事難くなりなどして、自ら求め出でたる折は、手づからい「くか」ふばかりにして食ひては、「我が親の思しがひ有りて、助け給へ」と觀音に向ひ奉りて、泣く／＼申し居たる程に、夢に見るやう、此の後ろの堂より老いたる僧の來て、

「いみじういとほしければ、男逢はせんと思ひて呼びに遣りたれば、明日ぞ此處に來着かんずる。其れが云はんに隨ひて、有るべきなり」とのたまふと見て覺めぬ。此佛の助け給ふべきなめりと思ひて、水打浴みて參りて、泣く／＼申して、夢を頼みて、其人を待つとて、打掃きなどして居たり。家は大きに遣りたりければ、親失せて後は、住みつきあるべかしき事なけれど、屋ばかりは大きなりければ、片隅にぞ居たりける。敷くべき筵だに無かりけり。斯かる程に、其日の夕方になりて、馬の足音どもして數多入り來るに、人ども覗きなどするを見れば、旅人の宿借るなりけり。「速かに居よ」と云へば、皆入り來て、こゝに借りけり。「家廣し。如何にぞやなど、物云ふべき主人も無くて、我がまゝにも宿り居るかな」と云ひ合ひたり。覗きて見れば、主人は三十ばかりなる男の、いと清けなるなり。郎等二三十人ばかり有る、下衆など取り具して、七八十人ばかり有らんとぞ見ゆる。唯だ居に居るに、筵疊を取らせばやと思へども、恥かしと思ひて居たるに、皮子筵を乞ひて、皮を重ねて敷きて、幕引き廻して居ぬ。そゞめく程に、日も暮れぬれども、物食ふとも見えぬは、物の無きにや有らんとぞ見ゆる。物有らば取らせてましと思ひ居たる程に、夜打更けて、此旅人の氣はひにて、「此おはします人密らせ給へ、物申さん」と云へば、「何事にか侍らん」とて膝行り寄りたるを、何の障りも無ければ、ふと入り來て控へつ。こは如何にと云へど、云はすべくも無きに合せて、夢に見し事も有りしかば、とかく思ひ云ふべきにもあらず。此男は、美濃國に猛將有りけり。其れが獨子にて、其の親失せにければ、萬づの物受け傳へて、親にも劣らぬ者にて有りけるが、思ひける妻におくれて、鰥に

て有りけるを、此れ彼れ罪に取らん、妻に成らんと云ふ者數多有りけれども、有りし妻に似たらん人と思ひて、鰥にて過ぐしけるが、若狭に沙汰すべき事有りて行くなりけり。晝宿り居る程に、片隅に居たる所も、何の隠れも無かりければ、如何なる者の居たるぞと覗きて見るに、唯だ有りし妻の有りけると覺えければ、目もくれ心も騒ぎて、いつしか疾く暮れよかし、近からん氣色も心みんとて入り來たるなりけり。物打云ひたるより初め、つゆ違ふ所無かりければ、あさましく斯かりける事も有りけりとて「脱有ルカ、今昔物語參考スベシ」、若狭へと思ひ立たさらましかば、此人を見ましやはと、嬉しき旅にぞ有りける。若狭にも十日ばかり有るべかりけれども、此人の心めださに「明けば行きて、又の日歸るべきぞ」と、返す／＼契り置きて、寒げなりければ、衣も著せ置きて「越えにけり」「今昔ニアリ」郎等四五人ばかり、其れが従者など取り具して、二十人ばかりの人の有るに、物食はすべきやうも無く、馬に草食はすべきやうも無かりければ、如何にせましと思ひ歎きける程に、親の御厨子所に使ひける女の、娘の有りとはかりは聞きけれども、來通ふ事も無くて、よき男して、事協ひて有りとばかりは聞き渡りけるが、思ひも懸けぬに來たりけるが、誰にか有らんと思ひて、「如何なる人の來たるぞ」と問ひければ、「あな、心憂や、御覽じ知れぬは我が身の咎にこそ候へ。己れは故上のおはしましをり、御厨子所仕り候ひし者の娘に候ふ。年比如何で參らんなど思ひて過ぎ候ふを、今日は萬づを捨て、參り候ひつるなり。かく便り無くおはしますとならば、怪しくとも居て候ふ所にもおはしまし通ひて、四五日づもおはしませかし。心ざしは思ひ奉れども、よそながらは、明暮訪

らひ奉らん事も、おろかなるやうに思はれ奉りぬべければ」など、細々と談らひて、「此の候ふ人々は如何なる人ぞ」と問へば、「こゝに宿りたる人の、若狭へとていぬるが、明日此處へ歸り着かんずれば、其の程とて、此の有る者どもを留め置いていぬるに、是れにも食ふべき物は具せざりけり。此處にも食はずべき物も無きに、日は高くなれば、いとほしと思へども、すべきやうも無くて居たるなり」と云へば、「知り扱かひ奉るべき人にやおはしますらん」と云へば、「わざとさは思はねど、此處に宿りたらん人の、物食はでゐたらんを、見過ぐさんもうたてあるべう、又思ひ放つべきやうもなき人にて有るなり」と云へば、「さて、いと安き事なり。今日しもかしこく参り候ひにけり。さらば罷りて、さるべき様にて参らん」とて立ちて去ぬ。いとほしかりつる事を、思ひがけぬ人の來て、頼もしげに云ひて去ぬるは、とかく唯だ觀音の導かせ給ふなめりと思ひて、いとゞ手を摩りて念じ奉る程に、即ち物ども持たせて來たりければ、食物どもなど多かり。馬の草まで拵へ持ちて來たり。云ふ限り無く嬉しと覺ゆ。此人々もて饗應し、物食はせ酒飲ませ果て、入り來たれば、「こは如何に、我が親の生き返りおはしたるなめり。とにかくにあさましくて、すべき方無く、いとほしかりつる恥を隠し給へる事」と云ひて、悦び泣きければ、女も打泣きて云ふやう、一年比も、如何でかおはしますらんと思ひ給へながら、世の中過ぐし候ふ人は、心と違ふやうにて過ぎ候ひつるを、今日斯かる折に参り合ひて、如何でかおろかには思ひ参らせん。若狭へ越え給ひにけん人は、何時か歸りつき給はんぞ。御供人はいくらばかり候ふ」と問へば、「いざ誠にや有らん、明日の夕さり此處に來べかんなる。

供には此の有る者ども具して、七八十ばかりぞ有りし」と云へば、「さては、其の御設けこそ仕るべかんなれ」と云へば、「是れだに思ひがけず嬉きに、さまでは如何が有らん」と云ふ。「如何なる事なりとも、今よりは如何でか仕らで有らんずる」とて、頼もしく云ひ置きて去ぬ。此人々の、夕方翌朝の食物まで沙汰し置きたり。覺えなくあさましまさすには、唯だ觀音を念じ奉る程に、其日も暮れぬ。又の日に成りて、此のある者ども「今日は殿おはしますらんかし」と待ちたるに、申の時ばかりにぞ著きたる。著きたるや遅きと、此女、物ども多く持たせて來て申し喧嘩れば、物頼もし。此男いつしか入り來て、覺束なかりつる事など云ひ臥したり。曉は、やがて具して行くべき由など云ふ。如何なるべき事にかなど思へども、佛の「唯だ任せられて有れ」と、夢に見えさせ給ひしを頼みて、ともかくも云ふに隨ひて有り。此女、曉立たん設けなどもしにやりて、急ぎくるめくがいとほしければ、何がな取らせんと思へども、取らすべき物無し。自ら入る事もや有るとて、紅なる生絹の袴ぞ一つ有るを、是れを取らせてんと思ひて、我は男の脱ぎたる生絹の袴を著て、此女を呼び寄せて、「年比は、さる人有らんとだに知らざりつるに、思ひも懸けぬ折しも來合ひて、恥がましかりぬべかりつる事を、斯くしつる事の、此世ならず嬉きも、何に付けてか知らせんと思へば、心ざしばかりに、是れを」とて取らすれば、「あな心憂や、誤りて人の見奉らせ給ふに、御様なども心憂く侍れば、奉らんとこそ思ひ給へらるに、こは何しにか給はらん」とて取らぬを、「此年比も、誘ふ水有らばと思ひ渡りつるに、思ひも懸けず、具して往なん」と此人の云へば、明日は知らねども、隨ひなんずれば、形見と

もし給へ」とて猶取らすれば、「御心ざしの程は、返すくもおろかには思ひ給ふまじけれども、形見など仰せらるゝが忝ければ」とて、取りなんとするをも、程なき所なれば、此男聞き臥したり。鳥鳴きぬれば、急ぎ立ちて、此女のし置きたる物食ひなどして、馬に鞍置き引き出だして、乗らんとする程に、「人の命知らねば、又拜み奉らぬやうもぞ有る」とて、旅装束しながら、手洗ひて、後ろの堂に参りて、観音を拜み奉らんとて見奉るに、観音の御肩に赤き物懸かりたり。怪しと思ひて見れば、此女に取らせし袴なりけり。是は如何に、此女と思ひつるは、さは此観音のせさせ給ふなりけりと思ふに、涙の雨霖と降りて、忍ぶとすれど伏し轉び泣く氣色を、男聞き付けて、怪しと思ひて走り來て、「何事ぞ」と思ふに、泣く様氣ならず。如何なる事の有るぞとて見廻すに、観音の御肩に赤き袴懸かりたり。是れを見るに、如何なる事にか有らんとて、有様を問へば、此女の思ひも懸けず來て、しつる有様を細かに語りて、「其れに取らすと思ひつる袴の、此観音の御肩に懸かりたるぞ」と、云ひも遣らず膝を立て、泣けば、男も空寝して聞きしに、女に取らせつる袴にこそ有んなれと思ふが悲しくて、同じ様に泣く。郎等どもも、物の心知りたるは手を摩り泣きけり。斯くて閉てをさめ奉りて、美濃へ越えにけり。其後思ひ交はして、又横目する事無くて住みければ、子ども産み續けなどして、この教賀にも常に來通ひて、観音に返すく仕う奉りけり。有りし女は、さる物や有るとて、近く遠く尋ねさせけれども、更にさる女無かりけり。其れより後、又音づるゝ事も無かりければ、偏に此の観音のせさせ給へるなりけり。此の男女、互に七八十に成るまで榮えて、男子女子産みなどし

て、死の別れにぞ別れにける。

(四) くうすけが佛供養の事

くうすけと云ひて、兵だつる法師有りき。親しかりし僧の許にぞ有りし。其法師の「佛を造り、供養し奉らばや」と言ひ渡りければ、打開く人、佛師に物取らせて、造り奉らんずるにこそと思ひて、佛師を家に呼びたれば、「三尺の佛造り奉らんとするなり。奉らんずる貨どもは、是れなり」とて、取り出で、見せければ、佛師善き事と思ひて、取りていなんとするに、云ふやう、「佛師に貨奉りて、遅く造り奉れば、我が身も腹だゝしく思ふ事も出で、責めいはれ給ふ、佛師もむつかしうなれば、功德つくるもかひ無く覺ゆるに、此物どもはいと善き物どもなり。封付けて此處に置き給ひて、やがて佛をも此處にて造り給へ。造り出だし奉り給へらん日。皆ながら取りておはすべきなり」と云ひければ、佛師うるさき事かなとは思ひけれど、物多く取らせたりければ、云ふまゝに佛造り奉る程に、「佛師の許にて造り奉らましかば、其處にてこそは物はまゐらましか。此處にしまして、物食はんとやはのたまはまし」とて、物も食はせざりければ、さる事なりとて、我が家にて物打食ひては、つとめて來て、一日作り奉りて、夜ざりは歸りつゝ、日比經て造り奉りて、此の得んずる物をつのりて、人に物を借りて漆ぬらせ奉り、薄買ひなどして、えも云はず造り奉らんとす。「斯く人に物を借らんよりは、漆の價の程は先づ得て、薄も著せ漆ぬりにも取らせん」と云ひけれども、「何と斯くの給ふぞ、始め皆申ししたゝめたる事には有らずや。物は群らかに得たるこそ善けれ。細々に得

んとのたまふ、わろき事なり」と云ひて、取らせねば、人に物をば借りたりけり。斯くて造り果て奉りて、佛の御眼など入れ奉りて、「物得て歸らん」と云ひければ、如何にせましと思ひ廻して、小女子どもの二人有りけるをば、「今日だに、此の佛師に物して參らせん、何も取りて來」とて出だし遣りつ。我も又物取りて來んずるやうにて、太刀引き佩て出でにけり。唯だ妻一人、佛師に向はせて置きたりけり。佛師、佛の御眼入れはて、男の僧歸り來らば、物とく食ひて、封つけて置きたりし物ども得て、家に持て行きて、其物は彼の事に遣はん、彼の物は其事に遣はんと、支度し思ひける程に、法師こそくとして入り來るまゝに、目を隠らかして「人の妻犯く者有り、やうくをうく」と云ひて、太刀抜きて、佛師を切らんとて走り懸かりければ、佛師頭打割れぬと思ひて、立ち走り逃げけるを追ひ着きて、斬りはづしんぐつゝ追ひ逃して、云ふやうは、「好き奴を逃しつる。しや頭打割らんとしつる物を。佛師は必ず人の妻や犯きける。己れ後に逢はざらんや」とて、ねめかけて歸りにければ、佛師逃げのきて、息つきたちて思ふやう、長く頭を打割られずなりぬる、「後に逢はざらんや」とねめずばこそ、腹の立つ程斯くしつるかとも思はめ。見え逢はど、又頭割らんとこそ云へ。千萬の物、命に増す物無しと思ひて、物の具をだに取らず深く隠れにけり。薄、漆の料に物借りたりし人、使をつけて責めければ、佛師とかくして返しけり。斯くてくうすけ「かしこき佛を造り奉りたる、如何で供養し奉らん」など云ひてければ、此事を聞きたる人々、笑ふも有り憎むも有りけるに、善き日取りて佛供養し奉らんとて、主にも乞ひ、知りたる人にも物乞ひ取りて、講師の前、人にあつ

らへさせなどして、其日になりて、講師呼びければ來にけり。下りて入るに、此法師出で迎ひて、出居を掃きて居たり。「こは如何にし給ふ事ぞ」と云へば、「如何で、斯く仕う奉らでは候はん」とて、名簿を書きて取らせたりければ、講師は「思ひがけぬ事なり」と云へば、「今日より後は、仕うまつらんずれば、參らせ候ふなり」とて、善き馬を引き出だして、「こと物は候はねば、此の馬を御布施には奉り候はんずるなり」と云ふ。又鈍色なる衣の、いと善きを包みて取り出だして、「是れは女の奉る御布施なり」とて見すれば、講師笑みまけて、善しと思ひたり。まへの物設けて据ゑたり。講師食はんとするに、云ふやう、「先づ佛を供養して後、物を食すべきなり」と云ひければ、然る事なりとて高座に昇りぬ。布施善き物どもなりとて、講師心に入れてしければ、聞く人も尊がり、此法師もはらくと泣きけり。講果て、鐘打ちて、高座より下りて物食はんとするに、法師寄り來て云ふやう、手を摩りて「いみじく候ひつるものかな。今日よりは長く頼み參らせんずるなり。奉仕人と成りたれば、御まかりに候ふ人は、御さがりたべ候ひなん」とて、箸をだに立てさせずして、取りて持ちて往ぬ。是れをだに怪しと思ふ程に、馬を引き出だして、「此馬、端乘に給はり候はん」とて、引き返していぬ。衣を取りて來れば、さりとも是れは得させんずらんと思ふ程に、「冬〇己カ そうづに給はり候はん」とて取りて「さらば歸らせ給へ」と云ひければ、夢に富したるらん心地して出で、往にけり。こと所に呼ぶ有りけれど、是れは善き馬など布施に取らせんとすとかねて聞きければ、人の呼ぶ所には往かずして、此處に來けるとぞ聞きし。かかりとも少しの功德は得てんや、如何が有るべからん。

(五) つねまさが郎等佛供養の事

昔、兵藤大夫恒政と云ふ者有りき。其れは筑前國山鹿の庄と云ひし所に住みし。又そこに假初に居たる人有りけり。恒政が郎等に、まさ行とて有りしをのこの、佛造り奉りて、供養し奉らんとすと聞き渡りて、恒政が居たる方に、物食ひ酒飲み喧騒るを、「こは何事するぞ」と云はすれば、まさゆきと云ふ者の佛供養し奉らんとて、主の許に斯う仕りたるを、かたへの郎等どものたべ喧騒るなり。今日饗百膳ばかりぞ仕まつる。明日その御前の御料には、恒政やがて具して參るべく候ふなる」と云へば、「佛供養し奉る人は、必ず斯くやはする」「田舎の者は佛供養し奉らんとて、かねて四五日より、斯かる事どもをし奉るなり。昨日一昨日は、己が私に、里隣、私の者ども呼び集めて候ひつる」と云へば、「をかしかりつる事かな」と云ひて、「明日を待つべきなめり」と云ひて止みぬ。明けぬれば、いつしかと待ち居たる程に、恒政出で來たり。さなめりと思ふ程に、「いづら、是れ參らせよ」と云ふ。さればよと思ふに、させる事は無けれど、高く大きに盛りたる物ども、持て來つゝ据りぬ。侍の料とて、悪くも有らぬ饗一二膳ばかり据えつ。雑色女どもの料に至るまで、數多く持て來たり。講師の御試みとて、ごだいなる物据えたり。講師には、此旅なる人の具したる僧をせんとしけるなりけり。斯くて物食ひ酒飲みなどする程に、此講師に請せられんずる僧の云ふやうは、「明日の講師とは承れども、其佛を供養せんずるぞとこそ承らね。何佛を供養し奉るにか有らん。佛は數多おはしますなり。承りて説經をもせばや」と云へば、恒政聞きて、「さる事なり」とて、

「まさ行や候ふ」と云へば、此の佛供養し奉らんとする男なるべし。たけ高くお背屈たる者、赤鬚にて年輪五十ばかりなる、太刀佩き、股貫はきて出で來たり。「此方へ參れ」と云へば、庭中に參りて居たるに、恒政、「かの眞人は、何佛を供養し奉らんずるぞ」と云へば、「如何でか知り奉らんずる」と云ふ。「と」「この誤力」は如何に、誰が知るべきぞ。若しこと人の供養し奉るを、唯だ供養の事の限りをするか」と問へば、「さても候はず、まさ行まろが供養し奉るなり」と云ふ。「さては、如何でか何佛とは知り奉らぬぞ」と云へば、「佛師こそは知りて候ふらめ」と云ふ。あやしけれど、實にさも有らん、此男佛の御名を忘れたるならんと思ひて、「其の佛師は何處にか有る」と問へば、「叡明寺に候ふ」と云へば、「さては近かなり、呼べ」と云へば、此男歸り入りて、呼びて來たり。平面なる法師の太りたるが、六十ばかりなるにてあり。物に心得たるらんかしと見えたり。出で來てまさ行に並びて居たるに、「此僧は佛師か」と問へば、「さに候ふ」と云ふ。「まさ行が佛や造りたる」と問へば、「造り奉りたり」と云ふ。「幾頭造り奉りたるぞ」と問へば、「五頭造り奉れり」と云ふ。「さて其れは、何佛を作り奉りたるぞ」と問へば、「え知り候はず」と答ふ。「是は如何に、まさ行知らずと云ふ。佛師知らずば誰が知らんぞ」と云へば、「佛師は如何でか知り候はん、佛師の知るやうは候はず」と云へば、「さは誰が知るべきぞ」と云へば、「講師の御房こそ知らせ給はめ」と云ふ。「是は如何に」とて集まりて笑ひ喧騒れば、佛師は腹立ちて、「物の様體も知らせ給はざりけり」とて立ちぬ。「是は如何なる事ぞ」とて尋ねれば、「はやう唯だ佛つくり奉れ」と云へば、唯だ圓頭にて、齋の神の冠も無